4章　20校の事例

1．はじめに

この章では、本研究プロジェクトの対象となった20校のレポートを掲載する。3章で述べた手続きを経て選ばれた対象校の所在地と名称は、以下の通りである。

秋田県	a1 市立A小学校・a2 市立Q中学校
神奈川県	b1 市立B小学校・b1 市立R中学校
福井県	c1 市立C小学校・c2 町立S中学校
大阪府	d1 市立D小学校・d1 市立T中学校
兵庫県	e1 市立E小学校・e1 市立U中学校
鳥取県	f1 町立F小学校・f2 市立V中学校
香川県	g1 市立G小学校・g1 市立W中学校
高知県	h1 市立H小学校・h2 町立X中学校
宮崎県	i1 市立I小学校・i1 市立Y中学校
沖縄県	j1 市立J小学校・j2 市立Z中学校

2010年秋から2011年の1月にかけて、私たちは上記の20校に対して訪問調査を行った。研究分担者のそれぞれが1つの自治体の2校を担当し、1校あたり3日程度を費やした（ほとんどの場合、研究補助者として大学院生を同行させた）。調査員は、各校で授業見学（国語・算数数学を中心に）、教職員対象（管理職・学力向上担当者など）への聞き取り、その他関係者（児童生徒・PTA・地域の代表など）への聞き取り、各種文書資料・統計データ等の収集などに従事し、2011年1～3月にかけて、本章に掲載した各校レポートをまとめた。

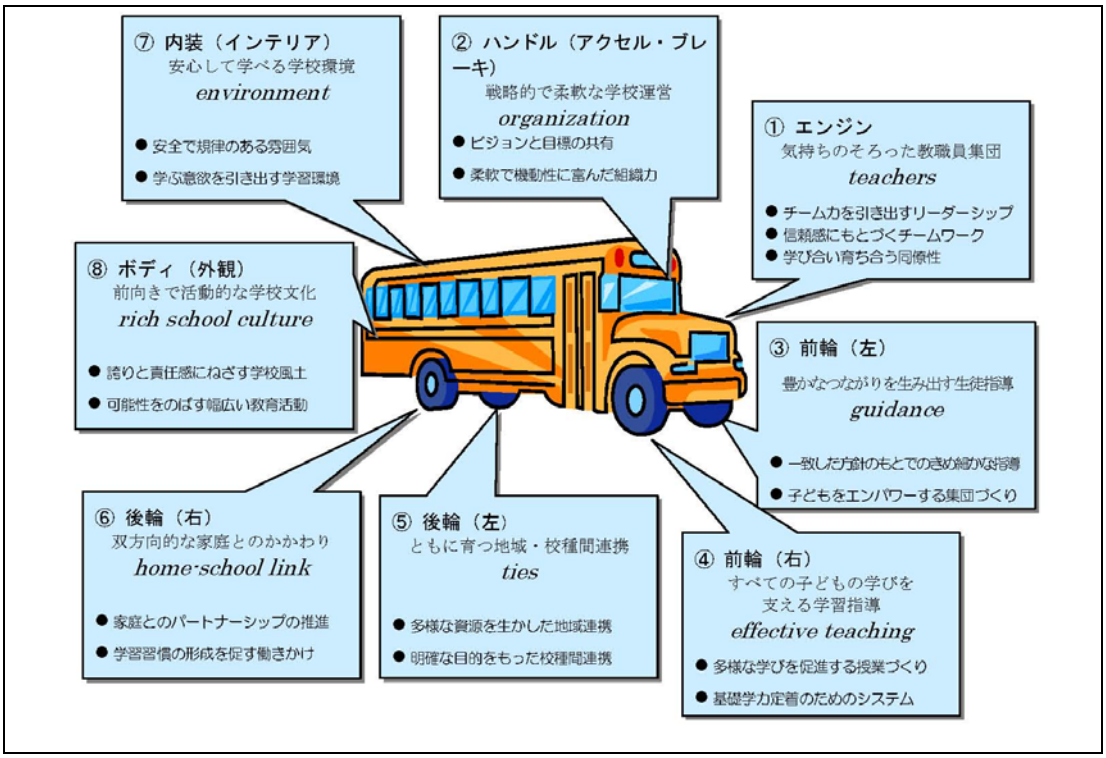
この訪問調査を実施するに際して、私たちが準拠したのが、「力のある学校のスクールバスモデル」である。次ページに示したものがその中身の骨子である。

このスクールバスモデルは、私たちの研究グループ（「力のある学校研究会」代表：志水）が、大阪府教育委員会との連携のもとに提示したものである（大阪府教育委員会『学校改善のためのガイドライン』、2008年2月）。2006年度に実施された大阪府の学力実態調査において、「効果のある学校」の視点からみてめざましい成果を収めていると判断された学校10校（小5校・中5校）に対して、およそ一年にわたって継続的な訪問調査を行った結果を整理したものが、このスクールバスモデルである。「教育的に不利な環境のもとにある子どもたちの学力の下支え」に成功している学校に共通して見られる特性として、私たちは「気持ちのそろった教職員集団」をはじめとする8つの項目を見いだした（サブカテゴリーとしては17項目）。そしてそれをスクールバスの各部分に見立てた。このスクールバスモデルの全貌は、志水宏吉『公立学校の底力』（ちくま新書、2008年）、志水宏吉編『「力

のある学校」の探究』（大阪大学出版会、2009 年）の２冊にまとめてあるので、それらを参照していただきたい。

本調査においては、各校の事例を、このスクールバスモデルとの対比のうえで位置づけることを試みた。すなわち、読んでいただければわかるように、各校の事例は、１）全体的なプロフィール、２）スクールバスモデルの 8 項目についての記述（「教員集団」「学校運営」「生徒指導」「学習指導」「地域・校種間連携」「家庭とのつながり」「学校環境」「学校文化」）、３）各校の「成功」の３つのポイント（上の 8 項目のどれが特に強いかという視点から。各見出しの末尾に①から⑧までの数値を表記。ただし、どれにも当てはまらないと考える項目に関しては⑨とカテゴライズした）という３つのパートから成り立つように紹介されている。

このような構成にしたのは、私たちが大阪で見出したスクールバスモデルの一般性を、全国の学校を対象とする今回の事例調査で得たデータをもとに検証したいと考えたためである。その部分の考察については、最後の 5 章で行うことにする。



２．各校レポート

＜秋田＞

a1 市立 A 小学校

【プロフィール】

所　在　地　秋田県 a1 市

校区の特徴　以前から「教育の町」と呼ばれてきた。

児　童　数　80 名程度

教　員　数　10 名程度

児童の特徴　三世代家族が 8 割を占め、父母・祖父母の愛情を一身に受け、大切に育てられている。ただし、１割程度が就学援助を受けている。

１．学校の概要

a1 市は、小中学校の統廃合問題が取りざたされてきたが、現在の教育長は、「学校は地域のセンターである」という考えのもと、できる限り現存する小・中学校を存続させる方針である。

全校児童 80 名程度の学校というのは、全国標準でみれば純然たる小規模校であるが、秋田県内ではそれほど珍しくはない。全学年が単学級の小学校である。

5 月の連休中には、敷地内に植えられた 20 本ほどの桜が満開となり、地域の人たちの目を和ませるという。玄関に広く張り出すようにつくられたピロティーは、冬期の大雪対策でつくられたもの。今日でも、積雪量は２～３メートルに達するというから驚きである。校舎の内装は木が多く取り入れられており、あたたかい雰囲気に満ちている。また、オープンスペースがふんだんに設けられており、開放感のあるつくりとなっている。

秋田県では、今年度（平成 22 年度）全ての公立小・中学校が全国学力調査に参加した。A 小の結果は、以下の通り（単位は全て%）。算数 A 87.5（秋田県平均 83.2）、算数 B 75.0（同 59.0）、国語 A 92.2（同 89.3）、国語 B 87.3）。いずれの教科も、県平均の値をもかなり上回っており、とりわけ、算数 B 問題の結果が良好である。これらの結果についても、いち早く校内で正答率が低い問題に関してつまずきの分析を行い、その対策を講じているということである。

A 小学校のこの好成績について、その原因・要因を学校側に問うたところ、4～5 年前から着手している「言語力の育成」を目指した、国語科を中心とした取組の成果ではないかという回答が返ってきた。その取組の中心となってきたのが、現在の研究主任および 6 年担任の教員である。最初の 2 年間は説明文、次の 2 年間は物語文を素材に、「読んで、考えて、表現する」ことを目的とした授業研究を続けてきたという。その成果は、

他教科にも及んでいる。

それが典型的に見られたのが、私たちが観察する機会を得た 2 年生の算数の授業であった。15 名ほどの子どもたちに対して、「たし算のひっ算のしかたを考えよう」という課題が与えられる。具体的に提示されたのは、「７６＋５８」という式である。10 分ほどかけて、単なる式だけではなく、ことばを使って自分の考えをノートにまとめていく。その後、友だちのノートを見合い（子どもたちは自由にあちこちを見てまわる)、わかりやすい説明をした人とその理由についてのやりとりが続く。最終的に、「2 回のくり上がりに気をつけてけいさんする」というまとめがなされて授業は終わったが、何よりも驚かされたのは、計算のやり方について、どの子も自分なりの考え方がよく書かれていることであった。算数 B 問題の高水準の達成は、こうした活動の積み重ねの成果だと考えて間違いないだろう。

いくつか参観した A 小学校の授業に関して特徴的だと思われたのは、ティームティーチング（TT）の活用であった。秋田県内では他の地域・学校でも TT が積極的に推進されているが､私たちが参観した A 小の授業では､教頭先生が T2 に入るということが行われていた。十数名という少人数での授業に 2 人の教員が入ること自体がかなり「ぜい沢」なやり方だと言えるが、その上 T2 に入る教員が高い授業力をもつ教頭先生である。私たちが見た国語の授業でも、授業の展開につまった担任教師をすかさず教頭先生がフォローし、その主導権のもとに授業がスムーズに流れていくという局面があった。TT が子どもの学習の促進に寄与するのみならず、担当教師の授業力アップのための OJT ともなりうるということを体感できたことは、私たちにとっても新たな発見であった。

「この学校では『ろへん』で子どもが話題になる」という表現を、何人かの先生方から聞いた。漢字で書くと、「炉辺」ということになるのだろう。「いろりのそば」ということである。職員室のあちこちで自然と子どもをめぐる話に花が咲くといった事態を、この表現は表している。A 小学校の学校文化を如実に物語る表現だと考えられる。

好成績を生み出す背景要因として指摘されたのが、「保護者・地域が教育熱心である」ということであった。

今日では少子化が進み、児童数が落ち込んできているので、保護者一人一人の責任はいやが上にも増し、PTA への参加意識はさらに強まっているという。A 小では、一家そろって学校行事に参加したり、登下校時に子どもたちを自然に見守ったりすることがふつうだともおっしゃった。そうした環境のもとで、学校と保護者・地域の人々ががっちりとスクラムを組んで子どもたちを育てているのが、A 小の姿である。

２．スクールバスモデルからみた A 小学校

ここでは、スクールバスモデルの８つの要素ごとに、A 小学校の特徴を簡潔に整理してみたい。

①教職員集団

全教職員は、ともかくまとまりがよく、ファミリーとして動いている。先にも述べたように、「ろへん」の関係がキーワード。今年赴任してきた校長も、「慈父」のような存在として校内をくまなく歩き回り、教員や子どもたちの話し相手となっている。

TT で授業に入っている教頭先生のアドバイスを、中堅男性教員がごく自然に受け入れている姿は、私たちにとって新鮮であった。大都市部の学校ではほとんど見られない先輩―後輩間での「同僚関係」がそこには見られた。しかし、そこにあったのはただの仲よし関係ではない。「授業が勝負」を合い言葉に、担任たちの間には適度なライバル関係が存在していることも確かなようであった。

②学校運営

小規模校であるため、お互い助け合うという形をとらざるをえず、学校運営はおのずと柔軟なものになっているようだ。私たちの訪問日の朝、1 年の担任の先生が家庭の事情で、少し遅れて出勤するという事態となった。5 人の 1 年生たちは、2 年の担任の指示で、各自椅子を持って隣にある 2 年生の教室スペースへ。朝の会の時間を一緒に過ごすためである。「子どものためにみんなが動く」形が、学校運営の基盤となっているように見受けられた。

③生徒指導

授業見学ののち、「この学年には学習習慣がついていない元気な子が何人かおり、しっかり授業を受けてくれるか心配だった」という声を担任の先生から聞いた。しかしながら、都市部の子どもを見慣れた私たちの目には、彼らはすこぶる素直で、生徒指導上の問題はほとんどないように見受けられた。そもそも教師の話を聞いていない子はおらず、仮に注意をされれば、一回で言うことを聞く。ふてくされたり、無視したりする子は、どの教室にもいない。

教師は、子どもたち全員をファーストネームで呼ぶ。各教室には家族的な雰囲気がみなぎっており、全ての子が授業に向けてのポジティブな態度を示していた。

④学習指導

県教委のスローガンである「授業で勝負」という言葉が、校内の合言葉となっている。先にも述べたように、この数年間、読むこと・書くことの指導が徹底してなされてきたようで、子どもたちは特に書くことに関して鍛えられていた。少人数・TT はもとより、書画カメラが活用されたり、ハンドサインが多用されたり、ペアやグループでの活動が取り入れられたりと、様々な工夫が個別の授業に関してなされていた。

授業外では、かなりの量の宿題と自学が課されている（高学年で、家庭学習の目安が 60～90 分）。取組が不十分な子に対しては、「残り勉」とも呼ばれる放課後学習が課される。夏休みにもたっぷりの課題が出され、サマースクール（補習授業）も数日間にわたって実

施されたという。また、読書活動も盛んであり、「読書の貯金箱」の取組では各学年の目標が設定されている(6年生では、年間4500ページ読破)。1学期に金メダルをとった児童は、4年生の男子で何と1万ページ以上を読んだという。

⑤地域・校種間連携

地域連携については、長い伝統がある。元PTA会長という地域の方に話を伺ったが、1980年代に「父母と先生の会」が結成されたそうである。そこでは、学校と保護者・地域は対等だという考えにもとづき、お互いの協議のなかでその年の課題を２～３つ選定し、学校要覧に掲載したうえで、それぞれの役割を果たそうとしたという。現在でも、校庭の桜の木の世話をはじめ、地域のバックアップ体制は極めて手厚いものとなっている。

他方、小中連携に関しては、現在はやや離れたところにある中学校に子どもたちは通っており、かつて同じ地区に中学校があった時代と比べると、連携活動はそれほど盛んではないようである。今後は、市の重点施策のもとで、小中連携活動を推進していくことが目指されている。

⑥家庭とのつながり

3世代同居家庭が8割ほどにも達するA小では､家庭と小学校との結びつきは極めて強い。数世代にわたって A 小学校に通っているという家族がマジョリティとなっており、一家そろって行事に参加するという姿が一般的である。

家庭学習のサポートに関しては、きれいな色刷りの「家庭学習のすすめ」が出されている。そこでは、低学年30～60分、中学年45～70分、高学年60～90分というガイドラインが示されている。6 年担任によると、宿題をやってこない子どもはクラスにはまずいない、ということであった。

⑦学校環境

概要でも述べたように、校舎は、オープンスペースをふんだんに取り入れた、木の肌触りにあふれたつくりとなっており、すぐれた居住性を備えている。教室内外の展示・掲示物も、子どもたちの学習意欲を引き出す工夫が随所になされている。

⑧学校文化

まず何よりも、校長・教頭をはじめ、先生方が楽しく、生き生きと働いているという印象が強い学校である。ポジティブな雰囲気がみなぎっている。地場産業と樹齢70年をこえる桜並木をシンボルに、大事に育てられてきた子どもたちの心・頭・体をしっかり鍛える文化（「やさしく かしこく たくましく」）を育んできた小学校が「A小」である。

３．成功の３つのポイント

最後に、A 小が好成績を収めている要因として、下の 3 点を指摘しておきたい。

１）教育を重視する地域の風土（⑨）

本調査において A 小が対象校として抽出されたのは、「就学援助率が 10%以上」（平成 19～21 年に関して）という条件をクリアしていたからである。先にも述べたように、平成 22 年度の値はちょうど 10%である。

都市部であれば「母子家庭」となるであろう家庭も何世帯かはあるが、A 小ではそれも 3 世代あるいは 4 世代家庭でのサポートを受けることができているという話であった。都市部であれば、「つながり」のなさに苦しまざるをえないタイプの子どもたちも、A 小では、地域・家庭の緊密なネットワークのなかで育つことができるということであろう。「母子」や「就援」がそれほど大きなハンディとなっていないのが、この学校の特徴である。

さらに、地域・家庭のなかに、「教育」という価値がしっかりと埋め込まれているのが、この地のもうひとつの特徴である。もともと文化や人々の意識の水準が高かったことのほかに、山間地で土地（農地）が狭隘だったために、伝統的に「教育」の力に頼らざるをえなかったという事情も語られていた。こうした歴史的経緯が、子どもたちのハイパフォーマンスの基盤となっているとみて間違いないだろう。

２）「ろへん」という語に代表される教職員のまとまり（①）

PTA 会長は「小さいなりのよさ」という言葉で A 小の長所を語っておられた。小さいがゆえに、一人一人の存在価値が高まり、お互いへの関心・働きかけが深まるというのである。

少人数授業、TT の活用、「ろへん」の会話といった A 小の特徴も、その「小ささ」を条件に成立・発展してきたものだと言える。子どもも教師も、妙に背伸びしたり、つっぱったりすることもなく、等身大の、生身の人間として身近なヒトたちと自然に接することができている。秋田の教師たちは、よく「ふつうのことをふつうにやっているだけ」と言う。その強みは、A 小にも濃厚に現れている。

３）ことばの力を伸ばす働きかけ（④）

とはいえ、A 小の成功は、そうした前提条件のみでもたらされたものでないことも確かである。「ことばの力を伸ばす」という確たる方針のもとで、この 4～5 年にわたって蓄積されてきた授業改善の努力の成果が、着実に実を結んだと指摘できる。

調査に参加した院生が、授業中に歩み寄ってきた低学年の男子に、「どこかでお目にかかったことがありますよね？」ときれいな標準語で話しかけられ、大いにびっくりしていた。それを聞いた研究主任の先生は、「先生方の努力によって、子どもたちが磨かれた。垢抜けてきたのでは」とコメントしてくれた。

ほとんどの子どもが塾には行っていない A 小では、学校の授業と家庭学習だけで子どもたちの基礎学力が高い水準に押し上げられている。その実践に学ぶべき点は少なくない。

a2 市立 Q 中学校

【プロフィール】

所　在　地　秋田県 a2 市

校区の特徴　里山の景観が残る農村地帯にある。過疎化・高齢化が顕著だが、地域・家庭あげての協力がある。

生　徒　数　40 名程度

教　員　数　10 名程度

生徒の特徴　小中を通して地域の人々からのあたたかい目に見守られ、「Q 町の子ども」として大事に育てられている。ただし、そうしたなかでも、約 1 割が就学援助を受けている。

１．学校の概要

かつて木材産業の中心地として栄えた歴史をもつ。木材業の衰退に伴い、近年人口は減少傾向にある。

昔から合同の運動会が行われているなど、小学校と中学校との結びつきは強く、学校と地域・家庭が一体となった教育実践が長年にわたって取り組まれてきた。

そのシンボルともいえるものが、学校林の存在である。この学校林を生かして、様々な教育活動が行われている。その一例が、地域の NPO「Q 町ときめき隊」との協働での「しいたけ栽培」である。中学生たちは「Q 町かがやき隊」を結成し、地域の人々の指導のもとで、しいたけの栽培と干しいたけの製造・販売を行う。豊かな自然に囲まれた Q という地域に立地する学校ならではの実践である。

Q 中は、全校が 50 人にも満たない小ぢんまりとした中学校である。計算上の就学援助率は 10%を超えてはいるものの、基本的には校区は、昔から教育熱心だと言われてきた安定した農村地帯である。過疎化・高齢化の趨勢のなかで、Q の子どもたち一人一人はとりわけ大切に育てられているという感が強い。校長室の壁には、最近本校を訪れた県の要職にある人物の手による「学校は地域の宝、地域は学校の宝」と記された色紙が掲げられていた。Q 小・中学校ほどこの言葉が似合う学校はないと、調査に携わった私たちは感じた。

教育内容面での Q 中の最大の特徴となっているのが、小中一貫教育である。7 年前に併設校になって以来、どのように小・中の教育をつなぐかについての試行錯誤がなされてきたはずである。Q 中で私たちが驚かされたことの一つに、日々のスケジュールが「ノーチャイム」で進められていることがあった。小学校と中学校との時程が異なるために、チャイムが鳴らせないとのこと。校舎が一体型となっているためである。小学校一年生にノーチャイムはきついのではないかと思ったが、Q 中では小学校低学年の子もしっかりと時間管理ができているようであった。「けがの功名」と表現するのは言い過ぎだろうか。

とはいえ、小学校高学年部分と中学校部分を隔てる廊下には、「目にみえない壁がある」と校長は語ってくれた。悪い意味ではなく、子どものなかにしっかりと「けじめがついている」という意味において。小学校の子どもたちは中学生をあこがれの目で見ているものの、むやみと中学校部分に立ち入ることはないとのことであった。

この 1〜2 年は、指導や授業面での実質的な小中連携が加速度的に進んでいるようである。具体的には、「学習のあとがわかる共通したノート指導の推進」「小中教科担当の連携」「『授業参観カード』『家庭学習の約束』などの共通利用」「9 年間を通じた『評価の観点と単元』づくり」「発達の段階を考慮した『基本話型』の継続」「全教科での『学習指導』のポイントの作成」「相互補完的・校種横断的な授業の推進」「学校林・ビオトープなどを利用したふるさと教育の充実」といった種々の取組の展開・深化が試みられている。それぞれの取組は注目に値するもので、「中 1 ギャップ」などといった言葉で語られる小・中教育の段差は、Q 中ではかなりの程度取り払われていると評価しうる。

かつて県立の中高一貫校に勤務した経験をもつ生徒指導担当の教員は、「中高一貫よりも小中一貫の方がよいと思う」と、私見を述べてくれた。中高一貫では「中だるみ」というデメリットが生じやすいが、小中一貫はメリットが多いと感じるとのこと。Q 中には、小学校を経験した教員が何人かいることも、連携の「やりやすさ」に役立っているとのことであった。今年度他校から赴任してきた校長も、「先生方の意識が高いと思った。学級・学年を超えるという意識、いろんな先生が子どもにかかわるというスタンスです」と指摘してくれた。

今年度の Q 中３年生の全国学力調査の結果は、県平均をかなり上回るものだったとのこと。とりわけ数学のスコアは、すこぶる良好なものであったという。私たちは、視聴覚室で行われた、その 3 年生の数学の授業を見学することができた。

担当は、ベテランの男性教員。生徒数は 10 名程度。「本時の課題」は、「動点の文章題について、2 次方程式を用いて答えを導こう」というもの。電子黒板を活用した授業。先生も生徒たちも手慣れたものである。男女が混ざっての、2 人あるいは 3 人での話し合いが、ふんだんに取り入れられている。つまずいている生徒に対する先生のアドバイスは、無駄なく的確である。そして、私たちが見た生徒たちの動きは、「素直で何事にもまじめに一生懸命取り組み、与えられた課題を確実にやり遂げようとする」という、授業案に記された通りのものであった。

残り 15 分の時点で、練習問題が提示された。かなり難しい問題である。一心に取り組む生徒たち。やがてある男子が指名され、「$(10-x)(10-2x)\times 1/2=24$」という式を立て、「２」という答えを導き出した。翌日彼は、「数学で難しい問題が解けたときは最高です！」と、快活に語ってくれた。数学の楽しさを、生徒全員が体感しているような授業だった。

「今の中 3 は、6 年のとき算数 B は県平均に満たなかったようですが、今年はびっくりするほど高い。少人数の良いところは、何といっても全員に目を配れるところですね。でも、教師が全部教えてはいけません。彼らに表現させることを大事にしています」と、校長は

コメントしてくれた。

２．スクールバスモデルからみたＱ中学校

ここでは、スクールバスモデルの８つの要素ごとに、Ｑ中学校の特徴を簡潔に整理してみたい。

①職員集団

Ｑ中の教職員数は、日本の中学校としては最少の水準にあると言ってよい。生徒指導や教科指導の諸側面で、サポートし合わなければやっていけない規模であるため、必然的にチームワークの水準は高くなっている。

小・中教員の連携については、課題も語られた。「一緒にやるということについては、当初は中学校の方に抵抗感があったかもしれません。自分の授業のパターンが確立しているので、小学校に合わせるのは・・・と。中学校の教師は、中１は中１として扱う。でもこの学校では、小６の扱い方を間近に見られるので、考えさせられることはありますね。逆に、授業研では、中学校側から発言することが多いですね。あれ、この授業はまずいなというのを。中学校の視点から、教科の専門性ということで、そういう時は言いますね。」小・中教員は、同じ職員室に「同居」しており、それぞれには教頭先生がいる。「今年から、学校要覧で小・中の教育計画を一つの表にまとめて表示したことは、両者の融合のために効果があったのではと考えている。」（校長）

②学校運営

Ｑ中の学校運営の基盤をなすのは、内的には小中連携による舵取りであり、対外的には地域との連携活動の推進であるように思われる。着任一年目の校長のリーダーシップのもとに、前者については授業を中心とする実質的な連携の強化が、後者については「Ｑ町ときめき隊」との協働を中心とする更なる活動の広がりが観察された。

③生徒指導

Ｑ中には、都市部の公立中学校が慢性的にかかえるような生徒の「荒れ」の問題は、ほとんど存在しないように見受けられた。生徒指導担当の教員は、「授業内での生徒指導の機能がきっちりとなされている」と語ってくれた。すなわち、日々の授業のなかで、生徒たちが「自分の居場所がある」「自分が必要である」といった感覚を持てるために、「この学校は落ち着いている」というのである。

ただし、他地域との交流が少ないため、「生徒たちが内向的である」のが課題だとも指摘してくれた。同様に校長も、「素直でまじめな生徒が多いが、今ひとつがまん強さが足りない気がする」とし、宿題ができなかったのが原因で、不登校気味になっている男子の事例

を話してくれた。「荒れ」の問題はないものの、都市部と共通する子どもたちの「弱さ」の問題は存在するようである。

④学習指導

一時間を通して授業を見たのは２コマだけであったが、押しなべて教師の授業力が高いと感じられた。小学校からの蓄積もあり、子どもたちの基礎学力の水準が引き上げられている（「おちこぼれ」ている生徒が見受けられない）ゆえに、先に述べた数学の授業のように、発展的な問題をベースにした授業の展開が可能となっている。生徒指導上の問題が少ないために授業準備に多くの時間を割けるという条件が、学習指導面での好循環に貢献してもいる。

さらに、生徒数が各学年（クラス）十数名という少人数であるため、相対的な低学力層の下支えも、おのずと達成されているかの観がある。明らかに、つまずきのある生徒に対するサポートが、都市部の中学校よりも、ずっと手厚いものになっているのである。

⑤地域・校種間連携

Q 中では、地域からの学校に対する高い期待と圧倒的なサポートが存在するように見受けられた。地域の人々からの熱いまなざしに対して、生徒たちが努力して応えようとする姿が、Q 中の教育実践の骨格をなしているような感すらある。地域のキーパーソン、「Q 町ときめき隊」の理事長をつとめる 72 歳の男性は、次のように語ってくれた。「子どもたちが干ししいたけを売っている時の笑顔を見たら、こうやって笑って地域の人たちとかかわることが一番大事だなって思います。（Q 町に残ってほしいという気持ちが大きいんですね。）そうです。まさにそれです。」

Q 中の場合、「〇〇の場で、中学生も動いてほしい」という、地域からの「持ち込み」も多いという。学校教育のリソースとして「地域資源」を生かすという都市的なあり方ではなく、地域の側が主体となって学校・生徒とかかわるという姿。そのなかで子どもたちが得るものは、少なくないだろうと思われる。

校種間連携（小中連携）については、前節で既に述べた通りである。9 年間の学びをどう保障するかという視点が Q 中の学校づくりの基盤となっている。

⑥家庭とのつながり

Q 中では、学校と家庭とのつながりも、地域の濃密なネットワークのなかで存在するようである。例えば、PTA の活動として、学校の草刈りや窓拭きやワックスがけを、子どもや地域の人々と一緒にやったり、小・中一緒にやったりするという。

連絡がとれなくて困るといったタイプの家庭はない。不登校気味の事例などについては、保護者を指導するなど、積極的にかかわらないといけない場合もあるが。また、家庭学習のサポートは、とりわけ丹念にやっているようである。

⑦学校環境

何と言っても、木のぬくもりを生かした校舎の存在感、それが醸し出すあたたかい雰囲気は特筆すべきものである。それにプラスして、ノーチャイムというシステムが、落ち着いた学習環境を実現するのに貢献している。さらに、教頭のリードのもとに、美しくラミネート加工された掲示物や大きく引き伸ばされた写真の数々が職員室前の廊下等にディスプレーされ、生徒たちの新たな学習意欲を引き出すよう工夫とされている。

⑧学校文化

Q 小・中学校には、a2 市 Q 地区センターも併設されており、文字通り学校は、「地域のセンターとしての役割」を果たしている。先に掲げたスローガンの通り、「学校は地域の宝」であり、この学校をなくした地域の姿などありえないと、地域の人々・保護者は強く感じていることだろう。かつては学校の統廃合が話題になった時期もあったようだが、小･中学校を併設するという決定がなされて以降は、その心配は消えたようである。

３．成功の３つのポイント

最後に､Q 中が好成績を収めている要因として､下の 3 つのポイントを指摘しておきたい。

１）子どもにかける地域の熱い思い（⑨）

これまで述べてきたように、地域・保護者の人々が学校にかける思いの大きさが、Q 中学校の成功を支える第一の要因となっていることは間違いない。地域の行事等において、ふんだんに子どもたちに「発表の場」が与えられている。またそのことで、子どもたちも「地域からの期待の大きさ」を感じ、「周囲から大事にされている」という気持ちを自然にもつことができる。この好循環が、生徒たちの様々な局面における高いパフォーマンスを支える基盤になっているようである。

２）少人数であることのメリット（⑨）

Q 中の生徒数は全校で 40 名程度。一番少ない 1 年生では 10 名程度、多い 2 年生でも 20 名程度である。これらの人数は、都市部の学校において学級を二分割した時の人数（あるいはそれ以下）に相当する。要するに、全ての授業において、「少人数指導」がもともと成立しているのである。生徒たちの学力の下支えをはかるうえで、このことのアドバンテージは計り知れないものがあると思われる。

教師の口から、「親の甘やかし」や「刺激が少ないことによるひ弱さ」が語られることはあったが、「人間関係の固定化・序列化」といった負の側面が指摘されることはなかった。また生徒の口からも、「いじめは全くありません」という証言を聞くことができた。Q 中では、規模の小ささを十分に生かした授業づくり・人間関係づくりがなされているように見

受けられた。

３）小中一貫した授業づくり（④）

既に述べたように、近年 Q 小・中では、小中一貫した授業づくりの取組が加速度的に進行しているようである。「授業のねらいを実現するための教材・教具の工夫」「学び合い、高め合うための手立ての工夫」「活動や考えのよさの評価」を三本柱とする授業改革が、小・中両方の教員による協働作業によって着実に進められており、その成果が随所に認められた。小学生と中学生とが同じ校舎で学ぶという物理的環境は、小中の連携を推進するうえでは理想的だと言える。そのメリットを最大限に活かしている Q 小・中の日々の授業の積み重ねは、子どもたちの学力に極めてポジティブな影響を与えているようである。

＜神奈川＞

b1 市立 B 小学校

【プロフィール】

所　在　地　神奈川県 b1 市

校区の特徴　開発前から住んでいる住民、宅地が造成された後に転入してきた住民が混在し、近年は大規模な分譲マンションの住民の子どもたちが数多く通うようになっている。持ち家・マンション居住者が多いが、校区内の公営住宅から通う子どもたちも一定数いる。

児　童　数　1200 名程度

教　員　数　50 名程度

児童の特徴　行事が盛んな学校だということもあり、人前で発表することに慣れている。休み時間に活発に遊ぶ姿が印象的であった。教育熱心な保護者が多く、地域の人々も学校を応援してくれる。

１．学校の概要

B 小は b1 市有数の大規模校である。近年開発された大規模マンションに子育て期を迎えた住民が数多く流入していることもあり、今なお児童数が増加する傾向にある。校区の人々は主に、①開発が進む以前から暮らしていた住民（農業に従事している・していた人も多い）、②持ち家・分譲マンションを購入し、流入した住民（70 年代／90 年代以降に住み始めた層に分かれる）、③賃貸アパートや公営住宅に入居している住民から構成されている。近年は、公営住宅入居者の高齢化が進展し、分譲マンションを購入し近年移り住んだ若い家庭の子どもの占める割合が増えている。

B 小の特徴を一言でまとめると「行事を大切にしている学校」である。外部の指導者のもとで練習を積み重ねた和太鼓演奏や各学年の合唱・合奏は非常にレベルが高い。例えば、私たちが行事を見学した時に、B 小の高学年の児童は「大地讃頌」を合唱していたが、この曲は通常は中学校の合唱曲に用いられる難度の高い曲である。他の学年の合唱もさびの部分で手話の振り付けを取り入れるなど、それぞれ工夫を凝らした内容になっていた。B 小名物の和太鼓演奏は、地域協力者の指導を受けた本格的なもので、「八木節」など、和太鼓を中心にした楽曲を演奏することが代々受け継ぐべき伝統として根づいている。

行事における音楽活動の質の高さは、中学年と高学年に専科の教員を２名配置し、充実した指導体制を整えていることにも支えられている。太鼓やその他の主要な楽器（エレクトーンやマーチング・キーボードなど）の演奏を希望する児童はオーディションで選ばれた者たちであり、音楽専科の先生の説明によれば、競い合うなかで質の高い行事を追求する姿勢が共有されているために、希望通りの役割を得ることができない場合も不平を言わず納得し、次回のオーディションに受かることを目指して頑張るという。教師たちも労を

いとわず質の高い活動を達成するためにエネルギーを注いでおり、行事を核にして活気のある雰囲気を作り出すことに成功している。

教師や地域の大人たちの指導のもとで練り上げられる活動だけでなく、子どもたちが自分たちで企画する各種の出し物も工夫されている。参観した行事では、人気タレントのものまねを取り入れた寸劇やクイズなど、観客の興味を惹きつける発表が目白押しであった。

校長や保護者の話によれば、子どもたちは行事を通じて自分たちの成長ぶりを確認しており、それが学力面の好成績にもつながっているのではないかという。行事を通じて得た達成感・成就感が子どもたちの自信につながり、それが学習活動の支えとなっているのである。

行事だけでなく、休み時間の活動も活発で「本気で遊ぶ子どもたち」という印象を受けた。行事を軸に学校生活を楽しく張りのあるものにすることで、社会・文化・経済的に厳しい子どものモチベーションが喚起され、そのことが学力の下支えをもたらしているように思われる。

２．スクールバスモデルからみたＢ小学校

ここでは、スクールバスモデルの８つの要素ごとに、Ｂ小学校の特徴を簡潔に整理してみたい。

①職員集団

Ｂ小の職場集団は、各学年の横のつながりを大切にしている。級外の先生も児童に対して担任と同様に指導することが目指されており、私たちが訪問した時にも、６年生担当の教師たちが休み時間に他の学級の子どもたちに気さくに声をかける様子や、行事のリハーサルで廊下に待機している時に指示を聞かない子どもたちを厳しく注意する姿を見ることができた。学年全体で子どもを指導する姿勢が徹底している点が、職場集団に見られる特徴の一つである。

他方で、全校的な行事（あるいは学年をまたぐ行事）を行う際には、他の学年の仕上がりを意識し、切磋琢磨して行事の質を上げる努力がそれぞれの学年でなされていた。学年ごとの強固な結びつきと、行事を介して学年間で刺激を与え合う関係が組み合わさることで、これまでよりも指導の質を上げて行くという前向きな姿勢が職員の間で喚起されているようであった。

②学校運営

教育活動には「驚きとアイデア」が必要だというのがＢ小の校長・Ｃ氏の持論である。着任後、様々な仕掛けを導入し、学校の活性化を試みたという。例えば、はじめて自分の子どもが小学校に入学する保護者を対象にランチミーティングを行うことで、学校を応援し

てくれる良好な関係を早い段階から構築する、というような工夫がその一例である。

音楽の専科教員を２名配置しているのも、行事を核にした学校づくりのために意図的に導入した試みである。教務主任に授業を担当させずに、学校全体を見回せるようにしたり、気になる子どもに対して、個別で非常勤の支援教員がサポートする体制を導入したりするなど、大規模校で人員が多い強みを活かして、メリハリをつけた人員の配置を行っている。

校長室の「壁」を取り払い、地域住民や保護者が来やすい雰囲気づくりに努めるほか、教職員も気軽に校長室を訪れ、相談できるような関係づくりに力をいれている。それぞれの先生の授業をまめに参観し、週案にもコメントするなど、管理職と教諭との関係を密にするように心掛けている。

③生徒指導

どこの学年にも少し気になる子はいるが、全般的に子どもたちは落ち着いており、生徒指導上の大きな問題は今のところないという（「気になる学年」についても、行事の際に私語をする児童が数名いるくらいで、教師が声を掛けると収まったので、現時点では気に掛かる程度で大きな問題はないように見えた）。学校の概要で紹介したように、行事を通じて子どもたちを学校生活にコミットさせる取組が特徴的である。「来年はみなさんが主役だから」「他の学年（クラス）に負けないように」など、他のクラスと切磋琢磨しながら、下級生に見本を示し、上級学年を乗り越えるために頑張ることが大切だというメッセージを、教師たちは様々な場面で子どもたちに伝えていた。

④学習指導

一部の学年で少人数指導が導入されており、きめ細かい支援が必要なケースに対しては個別対応ができる体制が整えられていた。他方で学力向上に特化した取組は特に行われておらず、普段の学習活動の積み重ねが、結果的に調査での好成績をもたらしたようである。

子どもたちは教師の指示に素直に従っており、グループ作業時に若干の私語が見られたものの、基本的には授業の内容に関係した話が中心で、落ち着いた雰囲気のもとで円滑に授業が展開していた。国語の教科書に取り上げられたテキスト（物語文）の元になった絵本や、同じ著者の他の作品を図書館から借りてきて紹介するなど、授業で学んだことを日常的な文脈のもとで再確認するなど、子どもたちの興味を喚起する工夫がなされていた。

⑤地域・校種間連携

和太鼓の指導者として、地域のお祭りなどで活動している奏者や近隣の学校で長年演奏指導を行っている先生を招いており、地域住民や近くの学校の協力を得ながら行事の創造に取り組んでいる。学校に協力的な保護者が多く、学校を訪問した日にも、駅伝大会に向けた朝練習を補助する姿を目にした。保護者による「教育支援ボランティア」活動は 19 種類と多岐にわたり、PTA の他に、父親の有志で結成した「おやじの会」による夏休みの映画

上映などのイベントも充実している。

⑥家庭とのつながり

PTA 役員をつとめる保護者によれば、生活にゆとりのある家庭が多く、協力的な保護者が多い（一部の児童は家庭的な背景が厳しい状況にあるという学校関係者の認識と開きがあるように思えた。これは、生活の安定した層が PTA 活動へ積極的に関わっていることに起因しているのかもしれない)。保護者の学校への関わり方は「世話好き」で積極的に関わるタイプ、声を掛ければ協力していただけるタイプ、ノータッチで学校に任せるタイプに大別されるという。PTA のメンバーは全員がどこかの部会に所属することになっていて、部会経由で学校への協力を依頼する体制になっている。最近は新たな住民と以前からの住民の世代交代が進んでおり、保護者同士の濃密な関わりが若干弱まってきているということであった。

⑦学校環境

和太鼓をはじめ、エレクトーンやマーチング・キーボードなど、合奏・合唱に使用する各種の楽器が充実している。学年で作成した掲示物（体育館などに設置されている）や、各学級の掲示物も充実している。特にガイドラインがあるわけではないが、他の学年や学級の取組に刺激され、掲示物の質を高くする工夫が常になされているということであった。B 小では、教務主任が学級を持たず、全体のコーディネートに専念できる体制が整えられている。教務主任の業務はカリキュラム編成だけでなく多岐にわたっており、訪問時にも行事が終わった直後にデジタルカメラで撮影した子どもたちの姿をプリントアウトし、昇降口に掲示するなど、学校の雰囲気を良くするための環境整備にも力を入れていた。

⑧学校文化

行事を核に子どもたちの成長を促し、教師たちも切磋琢磨しあう学校文化は、B 小の校風・伝統として定着し、保護者や地域住民もそこに大きな期待を寄せている。行事を通じて学校の一体感が高まり、そのことが更に質の高い取組を可能にするという好循環が生じている。

３．成功の３つのポイント

最後に､B 小が好成績を収めている要因として､下の 3 つのポイントを指摘しておきたい。

１）行事を核にした学校文化の創造と継承（⑧）

B 小の一番の持ち味は、行事を核にした学校づくりである。音楽活動を主軸に質の高い文化活動を創造することで、子どもたちは成長を実感し、教師たちも互いに刺激を与えあって指導力の向上に努めていた。各種の行事は、同一学年の横のつながりと、学年を越えた

縦の連携の要でもあり、学校の一体感と活力の源泉になっている。長い準備期間をかけて、質の高い内容の表現活動を練り上げてゆく営みは、ひとつの文化を創造する過程である。発表の内容はそれぞれの学年で異なるが、上級生の姿を目標に、下級生に恥じない内容の行事づくりに取り組む姿勢が、B 小の伝統としてしっかりと継承されていた。行事を核に学校文化を創造し、物事に取り組む姿勢を継承することによって、子どもたちは自らが成長していることを実感する。そこで得られた自己肯定感が、学習活動を支える基盤になっているのであろう。

２）縦横の連携を重視した集団づくり（③）

B 小では、最高学年の６年生の姿を最終目標に、下級生が上級生に憧れ、校風を引き継ぎたいと思わせる様々な仕掛けが導入されていた。伝統行事の「６年生を送る会」で見送る側の代表である５年生が６年生とエールを交換したあとに伝統の法被を受け継ぐやりとりは、こうした関係を象徴する例の一つである。全校的な行事以外の学年間の交流も盛んで、上級生と下級生が一緒に遊ぶ（「どろけい」をする、など）のイベントが企画され、そこでも上級生に対する憧れが喚起されているようである。

学年間の縦の連携だけでなく、同じ学年の横の連携が大切にされている点も重要である。教師たちは「学級王国」に陥ることを避けて、他のクラスの子どもたちも、自分が担任する子どもと同じように接することを心がけていた。縦横の連携を重視した集団づくりの取組がなされているからこそ、行事を通じた学校文化の創造と継承が、教育的な機能を十全に発揮することができるのである。

３）「仕掛け」のある学校経営が生み出すチームワーク（②）

教師の仕事は、子どもや同僚、保護者など、周りの人を驚かせる「仕掛け」を常に考案する必要がある仕事で、それは学校を経営するうえでも大切である。「驚き」をプロデュースすることの教育的な意義を強調する校長は、B 小に着任した後に様々なアイデアを率先して具現化していった。保護者に対しては、ランチミーティングの実施や「おやじの会」の設立など、学校との間の壁を取り払い、関係を密にする取組が導入されるとともに、教員に対しても、週案にコメントを寄せ、授業の進め方について気軽に相談できる、風通しの良い関係づくりに力を入れていた。

校長は、教育目標の達成に向けて自ら率先して動くことを心がけており、「子どもたちに元気の良さを求めるならば、自分がまず溌剌としていなければならない」と語る。職員向けに「校長通信」を発行し、自らの姿勢を明確に打ち出すだけでなく、教員評価の仕組みが導入されているのだから自分も同じように評価されなければならないと「校長評価」アンケートを実施し、管理職としての役割を果たしているかどうかを教職員に尋ね、率直な意見や助言を集約する試みを導入していた。

こうした校長のオープンな姿勢が効果を発揮しているようで、教員集団の雰囲気は良好

であった。「仕掛け」のある学校経営に触発され、「ベテランが率先して動き、それに若手が刺激され、若手の頑張りに負けないよう中堅・ベテランが努力する」（校長談）という互いに刺激し合う関係が構築されていた。

b1 市立 R 中学校

【プロフィール】

所　在　地　神奈川県 b1 市

校区の特徴　校区内に大規模な公営住宅があり、社会経済的に厳しい背景を持つ家庭の子どもたちの割合が高い。住宅地としての開発が進んでいるが、近隣には農地や里山も残されており、古くからの住民も多い。

生　徒　数　800 名程度

教　員　数　40 名程度（管理職含む）

生徒の特徴　人なつっこい感じで、部活動の生徒たちが元気よく挨拶する様子が印象的であった。

１．学校の概要

R 中学校は、大規模な公営住宅を学区に擁しており、また、学区域が広範囲で様々な特性をもつ地域から生徒たちが通学していることにより、家庭的な背景が厳しい生徒の占める割合が高い学校である。ひとり親家庭の子どもも多く、母子家庭だけではなく父子家庭の子どもも目立つ。両親のいる家庭でも直接的な血縁関係にない継家族（ステップ・ファミリー）がいるなど、複雑な事情を抱えるケースがあるという。

数年前までは非常に「荒れた」学校だった。当時は生徒たちの逸脱行動が日常茶飯事で、時には警察が介入する事件も生じたという。厳しい状況のなかでも教師たちのねばり強い取組と、地域・保護者の支援で事態は少しずつ改善し、現在は落ち着きを取り戻している。

約十年前に新設された校舎はバリアフリー化とオープン・スペースが特徴で、車いすで移動できるスロープやエレベーターが完備されている。荒れている時代にはオープン・スペースが生徒たちのたまり場になっており、教師の目の届かない死角が多く、当初予定していたような活用は全くできなかったそうである。現在も、いくつかのスペースには間仕切りを設置し、生徒が勝手に入ることができないようになっていて、子どもたちの荒れに苦慮していたことが窺える。

教師たちによれば、R 中の生徒たちは人なつっこく、大人との関わりを求めているところがあるという。「押さえつける」指導ではなく、日常的な関わりのなかで信頼関係を確立することが生徒指導の基本方針になっており、休み時間に生徒たちが廊下に交代に常駐する先生たちに気軽に話しかける姿が印象的であった。

荒れている時代は、やんちゃな生徒たちが邪魔をするために部活に集中することも難しい状況だったそうであるが、現在はそのようなこともなく、多くの生徒は部活動に熱心に取り組んでいる。部活ではきちんと挨拶するよう指導されているようで、活動の様子を見学する筆者に気づくと、すぐに挨拶をしてくれた（練習中の陸上部員たちは、グラウンドを走りながら大声で挨拶してくれ、かえってこちらが恐縮するくらいであった）。

２．スクールバスモデルからみたＲ中学校

ここでは、スクールバスモデルの８つの要素ごとに、Ｒ中学校の特徴を簡潔に整理してみたい。

①職員集団

困難を乗り切った経験をもつ教員を要に、足並みをそろえつつ、それぞれの持ち味を発揮して集団でことにあたる姿勢が特徴的である。管理職と他の教職員の関係も良好で、教師たちの多くは「校長は自分たちが力を発揮しやすい環境を整えてくれている」と考えている。比較的規模が大きいこともあり、初任者が配置されることも多いそうで、若手の教員が多いという印象をうけた。

②学校運営

荒れの経験のなかで培った集団的な指導体制が特徴的である。各学年の廊下やオープン・スペースには、空き時間の先生が常駐することになっていて、授業中に生徒が中抜けした場合でも、すぐに対応できる体制が組まれている。

最近は授業を抜ける生徒はほとんどいないが、何かあった時にすぐに対応できるように、この取組は現在も継続している。教師たちは常駐スペースで事務作業や教材の準備をしており、この体制を維持するには一定の負担を共有する必要があるが、子どもたちが逸脱的な振る舞いをしたときに即時に対応できることが肝要だという認識が共有されており、やめたいという意見は今のところない。

校長は若い頃から「荒れている」学校を渡り歩いてきた経験があり、そこから得られた教訓にもとづき「教師のやる気をそがない」学校運営を心掛けている。管理職が処理できる案件はできるだけ自分で対応し、余計な負担を現場に与えないようにしている。生徒指導上の問題が生じたとしても焦らず、特定の人間を責めず、職員で一丸となって問題に取り組むことを大切にしている。

③生徒指導

生徒指導に苦慮した「荒れた」時代の経験を踏まえ、足並みをそろえた生徒指導が重視されていた。「足並みをそろえる」といっても、いわゆる押さえるタイプの指導ではなく、普段から気になる生徒に声をかけ、いざという時に指導が入る信頼関係づくりが大切だという認識が全ての教員に共有されている。

荒れている時代からここで勤務する教員は「今は落ち着いていますが、気を抜くとどうなるか分からない。これまでの地道な取組をこれからも継続しなければならない」と現状を捉えており、落ち着いた後に着任した先生に対してもこうした見方を伝え、これまでの取組を維持するように努力していた。

現在の子どもたちの様子は落ち着いており、やんちゃそうな生徒も見かけたが、ちょっ

とした逸脱に対して教師が声をかけると素直に指示に従っており、「荒れた」時代の様々な逸話を想像することが難しいくらいであった。

④学習指導

校長は学習指導について「特別なことは何もしていない」と言い切り、他の先生たちに対する聞き取りでも同様の見解が示されていた。教師たちは、学校生活が落ち着いたことが成績向上の一番の要因であり、誰からも邪魔されずに授業を受けることができ、部活や行事で活躍する場を得ることが、子どもたちの学力を下支えしていると認識していた。

いくつかの授業を見学したが、プリント学習や板書とノートを中心とした伝統的なスタイルの授業が展開しており、教師たちの認識と授業の実態が一致していたように思われた。授業規律はしっかりと維持されており、少数ながら、寝ていたり、授業とは関係のないことをしたりする生徒もいたが、教師が声をかけると課題に取り組んでいて、基本的には落ち着いた雰囲気で授業が展開していた。

⑤地域・校種間連携

b1 市の行う「地域交流活性化事業」（仮称。以下同様）に参加したことも、学校が落ち着きを取り戻したきっかけの一つである。この事業に参加することで、近隣の里山の保持活動、高齢者への配食事業、育児サークルなど、これまで学区内・近隣の地域で行われていた様々な活動に生徒たちがボランティアとして関わる機会が増加した。地域の大人たち、あるいは活動をコーディネートする高校生・大学生など、少し年上の若い世代と出会い、自分を認めてくれる機会を得ることが生徒たちの姿勢を変えることにつながった。長年この地域で暮らしている人びとの協力を得て、職場体験など、学校の教育活動を行ううえで地域の資源を活用したことも、学校を支える大きな力になっている。

⑥家庭とのつながり

経済的に厳しい状況にあるために、学校の活動に参加する余裕のない保護者もいるが、近年は PTA の活動に「学校サポーター制度」を取り入れ、役員以外の保護者にもひとりが一役を担うように積極的に働きかけている。関わり方に温度差はあるが、サポーター制度を導入してから、これまでよりも多くの人が PTA 活動に関わるようになったという。

⑦学校環境

R 中学校の校舎は新設されたものであり、バリアフリー化が進んでいる点、オープン・スペースがふんだんに用意されている点が特徴である。

⑧学校文化

「荒れ」の沈静化とともに部活動が盛んになり、地域の大会・県大会での優勝・入賞な

どの実績も蓄積されている。「荒れている学校」という地域からのネガティブなまなざしも変化しつつあり、新しい学校文化を生み出すプロセスの途上にあるように思われた。

３．成功の３つのポイント

最後に、R 中学校が好成績をおさめている要因として、下の 3 つのポイントを指摘しておきたい。

１）教職員のねばり強い取組による「荒れ」の克服（③）

数年前まではb1 市内でも３本の指に入るほどの「荒れた学校」だったが、この数年は落ち着きを取り戻している。なぜ「荒れ」が収まったのか明確な要因は分からないとしながらも、①押さえつけるのではなく、言うべきことを伝えつつ信頼関係を構築する関わりをもつこと、②授業中に複数の教員が廊下のオープン・スペースに常駐し、生徒の中抜けが生じたときに迅速に対応できる体制を整える従来からの取組をねばり強く続けた結果、しだいに学校が落ち着きを取り戻していったという。休み時間に生徒がオープン・スペースにいる教師たちと雑談したり、逆に教師が気さくに生徒に声をかけたりする場面がみられ、教師―生徒関係が良好な状態にあることが窺えた。

学力向上のための特別の取組は特にしておらず、生徒たちの問題行動が減少し、普段の授業や行事・部活動に落ち着いて取り組めるようになったことが、結果的に学力を下支えする効果を発揮しているようである。

２）学校の外に積極的に関わり、地域の力を学校に取り入れる。(⑤)

「地域交流活性化事業」への参加は、生徒たちが学校の外で、地域を支える大人や自分たちよりも年長の若い世代と関わる機会をもたらした。学校の外に積極的に飛び出すことで、子どもたちは自分を認めてくれる他者と出会い、自己肯定感を取り戻したように思われる。

学校の外に出るだけではなく、保護者や地域の人々の協力を仰ぎ、学校の教育活動に地域の力を取り入れたことも学校が落ち着きを取り戻すきっかけとなった。長年この地域で生活し、地元に根ざした人々の力を借りることで、R 中学校は豊かな内容をもつ職場体験や農業体験を企画・実施できるようになった。地域から厳しいまなざしを注がれている困難な状況を憂い、地道に学校を応援してくれる人々の力を得たことも、「荒れた」状況を乗り切る柱となっていた。

３)「教師のやる気をそがない」学校づくり（②）

R 中の校長・D 氏は、初任校から「荒れた」学校を数多く経験してきた、安定感のある校長である。過去に勤務した学校では、厳しい状況のなかで「荒れる」生徒たちにねばり強く指導を続けた結果、「ツッパリ」たちが自分たちの行為を反省し、卒業式に全校生徒と保

護者の前で謝罪するエピソードもあったという。

５年前に R 中学に着任して以降、警察や少年司法が介入する深刻な事件もたびたび生じてきたが、その時も動ぜずに適切に対処してきた。

これまで経験してきた学校と同様、荒れているときはみんな辛いので、なるべく「教師のやる気をそがない」学校づくりを心掛けてきたという。現場の負担になるようなことは自分で引き受け（あるいは現場に押しつけず)、教師たちが自分の仕事に専念できる環境を維持することに心を砕いてきた。校長のこうした姿勢が、ねばり強い取組の継続を支える基盤になっている。

教員の信頼も厚く、ある先生によれば、校長が着任した後に「自分の持ち味を発揮して、できることをやろう」という姿勢が次第に他の先生にも浸透し、職員室の雰囲気が格段に良くなったという。地域の集まりにも足繁く通い、学校を支えてくれる保護者や地域住民たちから厚く信頼されている。

＜福井＞

c1 市立Ｃ小学校

【プロフィール】

所　在　地　福井県 c1 市

校区の特徴　市の中心部の移動により、児童数が減少している。

児　童　数　400 名程度

教　員　数　20 名程度

児童の特徴　家庭の三世代同居率が低下し、単身家庭などの生活状況が厳しい要因となっている。素直でのんびりしており（「おぼこい」子どもたち）、真面目だが競争心がないと語られる。

１．学校の概要

Ｃ小学校は、「町（市街地）」の子どもたちが通う学校である。ただし、現在では市の中心部が隣接校区に移動しており、住民意識にも違いがある。

Ｃ小学校は、これまでから国語教育に力を入れてきており、これまで、「文部科学省・国語力向上モデル校」をはじめ、多くの研究指定等を受け、研究に積極的に取り組んでいる。校内外を問わず、自主的な取組も含めて研究授業・発表等が多く、児童は来客や授業見学に慣れている。これがプラスに作用して、教職員のみならず子どもたちのモチベーションの向上にもつながっているとのことである。

また、市陸上記録会では多くの種目で優勝するなど、体力向上の面での実績もある。

今回の訪問調査では、全学級の授業を見学することができた。そこでは、「低位にある子どもの底上げ」に重点をおいた教育方針が明確に示されていた。学校全体として、漢字と計算の基礎基本の徹底、「言葉」を重視した「伝え合う」ことの徹底等、「話す・聞く」ことへの取組が重視されていた。ただし、こうした方針によって、逆に「上位」の子どもたちの一層の学力向上への取組はなかなか難しいのではと感じられた。この点については、聴き取りの中でも同様の指摘があったので、後述する。

児童の特徴については、聴き取りを行った教員、保護者、地域の人々の大人が皆異口同音に「おぼこい、競争心のない子どもたち」と語っている（「おぼこい」とは、方言で「素直でのんびりした」の意味である）。大人たちには、児童の「競争心がなさ過ぎる」ことが危惧されており、子どもたちが将来大人になって県外とりわけ都会に出た時にやっていけないのではないかと心配されている。そのため、例えば聴き取りを行った「地域・学校協議会」のメンバーである地区子ども会連合会事務局長によれば、子ども会の行事では、ゲームでもスポーツでも、意識的に順位づけをしているとのことである。

地域の状況について、校区は市街地にあり、近年は三世代同居の家庭が減少している（例

えば、今回聴き取りを行った４人の６年生児童のうち、祖父母と同居しているのは一人であった)。また、経済的に厳しい家庭環境にある子どもが少なくなく、その要因は単親家庭などである。一方、塾や習い事に通っている児童は少ない。なお、保護者も校区によって違いがあるとのことで、市内の隣接する小学校区に比べて、Ｃ小学校では参観日等での保護者の「私語」や、学校へ無理難題を要求する保護者は少ない。

日常のコミュニケーションでは、粗野な言葉遣いをする教職員も児童もほぼ見当たらない。これは１年生の段階から男女児ともに「～さん」付けで呼び合うことを習慣付けられていることと関連しているのではないかとのことである。

では、学校の取組や教員に対する保護者や地域の人々の思いは、どのようなものがあるだろうか。聴き取りから、PTA 役員の人たちは次のように語っている。「先生方は非常に熱心なので、些細なことで相談するのは逆に気がひける。学校への不満は全くない。」「あえて言うならば、授業で生の英語に触れる機会が極めて少なく（現状では月に１回程度)、また家庭で英会話を習わせようにも、地域には通えるスクールがほとんどない。パソコンは家庭でも教えられるが、英語はそうもいかないので、これでは都会の子どもとの格差ができてしまうし、子どもたちが社会に出た時に、これからの社会のグローバル化に対応できない。」「解決策として、例えば（文部科学省の)「全国学力調査」に「リスニング」など、英語の実技を加えてほしい。そうすれば、今はトップレベルの福井県の順位も一気に落ちるかも知れないし、そうなれば県や市の教育委員会も対策に動いてくれるだろう。」

このように教員も保護者も地域の人々も一様に児童が「素直である」「少なくとも言われたことには一所懸命に取り組み、ルールを守る」ことを強調しており、現在の好成績とのつながりを認めるとともに、他方で「競争心がなさ過ぎるので、社会に出た時のことを危惧する」などの不安を抱いている。例えば、高校生について、進学や就職に際して「地元を出たくない」生徒が多いようで、その理由がとりわけ目的意識がなくて「地元にいる方が楽だから」というのであれば、それはよくない、とのコメントもあった。

２．スクールバスモデルからみたＣ小学校

ここでは、スクールバスモデルの８つの要素ごとに、Ｃ小学校の特徴を簡潔に整理してみたい。

①教職員集団

授業見学の際には、多くの学級で担任以外の教員が加わった複数体制による指導が行われており、教員間の連携もほぼ円滑に進められていた。こうした子どもたちに関わる多様なスタッフの存在と相互の開かれた関係が特徴的である。

また、訪問時に５年で実施されていた、「白川文字学」の漢字学習の授業は研究授業とのことで、５年の他の学級の教員も参観されていたが、研究指定等を多く受けてきたという

だけあって、私たちの訪問や見学に対して、また学校や学級の開かれた状況について、子どもたちとともに、教員も慣れている様子だった。

②学校運営

教員数 18 名の規模の小さい学校ではあるが、他に、低学年学校生活サポート、少人数指導、TT 指導、外国人担当の講師、学校支援員、学校図書館支援員などの子どもたちに関わる多様なスタッフがいることは①にも記したとおりである。学校の指導方針が明確であることや、学校として研究活動に熱心であることもあって、スタッフの間の連携は、特に授業においてはうまくいっているようである。

訪問時にお会いした校長先生は平成 22 年度からであるが、かつてＣ小学校に勤務されたこともあり、市内の他の小学校で管理職として勤めてこられた経験がある。お話では、校区の変化や他の校区との比較から、Ｃ小学校は保護者との関係が相対的によい学校であり、学校運営にも支障がないとのことである。同じ c1 市内でも周辺部では地域に学校が取り込まれるような状況があり、他方で市街地の、新しい住民が入ってくる地域では、保護者の「我が子」に関する要求が学校へ出されてくることがあり、それらに比べると、かつてと比べて児童数が減少し、他方で課題を抱える児童は増えたが、この学校の保護者は学校に任せてくれているとのことである。

③生徒指導

「子どもが素直であること」は聴き取りを行った大人が皆強調されていた。基礎基本の学力や体力の定着と向上、特に小中学校段階の学力向上においては「素直さ」は重要なポイントだと考えられるため、この点でこどもたちは伸びやすいのではないかと感じられた。授業中も学年を問わず、低学力層にある子どもたちも間違いを恐れず、積極的に挙手・発言しており、学級全体で授業が進められていると感じられた。

また、縦割りの集団活動が登下校や集団遊びの際に活用されていて、児童の生活規律の確立やリーダーシップの形成が図られている。

④学習指導

まず、学校全体として各学級の授業や学習に関するルールが徹底されている。全学年・学級で、男女児のペアを基本とした席順で机が配列されている。授業中、起立する際には椅子を机に入れてから発表する、男女児とも「さん」付けで呼び合うなどの決まりごとがあり、学年が上がるにつれて、慣れもあってか、やや形式的だったり一部でぞんざいだったりもしているが、基本的な事柄が身についているので、授業は円滑に進行している。

学習指導の方針は「低学力層にある子どもの底上げ」に重点をおいていることが明確で、基礎基本の学力定着のための取組がなされている。漢字・計算については、定期的に確認テストが実施され、基本の水準を達成できない児童には、夏と冬の長期休暇中に補充学習

が実施されている。こうした丁寧な指導を保護者も認め信頼している反面、児童の「競争心のなさ」が危惧されており、「グローバル化時代に対応した英語教育」の必要性など、県外でも広く通用する「卓越性」を伸ばすことを求める意見も出ている。ここには、商業中心の生活文化から来る c1 市の住民意識の独自性もあるようだ。

さらに、上にも記したように、これまでの研究指定等から、学校として特に国語教育に力を入れている。福井県では平成 23 年度から「白川文字学」の漢字学習が全県下で実施されることとなっており、その先導的試行モデル校として、これまでの国語教育の実績からＣ小学校が指定されたとのことである。また、授業の他に朝読書の充実や「ことばの広場」（発表会）の活用などにより、「言葉」を重視した「伝え合う」ことの徹底、「話す・聞く」ことの取組が特に重視されている。この一環として、歌唱指導も熱心に取り組まれている。

なお、c1 市では、c1 市教育委員会のサーバーに各校の指導案や公文書等全ての資料が保管・保存されている。したがって、教員は異動後も学校の過去の資料にアクセスでき、また新規に着任した場合も、その学校に以前在籍した教員の指導案等にアクセスできるため、引継ぎに関して無駄がなく、効率化がなされている。

⑤地域・校種間連携

校種間の連携は特に意識的に取り組まれてはいないようである。地域との連携では、福井型コミュニティスクールである地域・学校協議会がＣ小学校にも設置されているが、とりわけ特徴的な活動はない。地域には、基本的に学校や教員の取組への大きな信頼があり、学校もそれに応えている。

⑥家庭とのつながり

保護者会は「愛育会」という名称で、長い伝統を有している。保護者からの学校への信頼も大きい。学校が指導方針として「低学力層」の児童へのきめ細かな対応をとっていることも、概要に記した PTA 役員の人たちのコメントのとおりよく理解されており、現状については、教員の熱心さ・真面目さ故に学校への不満は全くないとのことである。

⑦学校環境

「言葉」を重視した「伝え合う」ことの徹底とその広がりを示すものとして、言葉に関わる児童の作品である俳句等が廊下や階段の踊り場の掲示板等に多く掲示されている。また、各教室には「白川文字学」に関する古い漢字（古代文字）の表やカードが設置・展示されている。このように、「言葉」に関わる掲示物や展示物を通して、児童の学習意欲や関心への働きかけがなされている。

なお、学校の敷地内にはこの夏開花したことが話題だったソテツをはじめ、多彩な草花が随所に見られ、和やかな雰囲気を醸し出している。

⑧学校文化

継続して研究指定を受けること等によりいつも新しい取組を行っており、そのことが教職員と子どもたちのモチベーションの向上につながっていることは概要で記したとおりである。また、校内に多様なスタッフがいることと共に、多くの機会に校外の人々が学校を訪れ、学級に入ってくることにより、学校・学級が開かれたものになっていることも、C小学校の特色である。

なお、教員の真面目さと熱心さ、保護者や地域住民によって学校の教育活動が支持されていること等の特徴は、県内の中学校の事例と共通しており、福井県の学校に広く見られる特徴であると考えられる。ただし、その要因の一つである「安定した家庭や地域社会」の状況はC小学校では変容してきている。

３．成功の３つのポイント

最後に、C小学校が好成績を収めている要因として、下の３点を指摘しておきたい。

1)学習ルールの徹底から基礎基本の定着へ（④）

まず、学習ルールの徹底が図られていることと基礎基本の学力定着の取組である。各授業では学習ルールが確立していて、進行がスムーズである。C小学校の学習ルールには、立ったら椅子を引く、児童名は男女児とも「さん」付けで呼ぶ等があり、どの学年・学級でも徹底されており、定着している。

学習指導では、特に「低位にある子どもたちの底上げ」の取組として、漢字と計算の基礎基本の習熟状況を丁寧にモニタリングし、不十分な場合には補充学習で対応している。

学習活動では、児童集団の編成と活用に工夫がされている。各教室では、男女児をペアとして机が配置されており、ペア学習などが効果的に取り入れられている。

2)言葉を中心に多彩な表現活動の展開（④）

学校の様々な教育活動の中で、国語教育における「言葉」の定着を中心とした表現活動が重視され、展開されている。さらに、多彩な歌唱の機会が設けられ、月ごとに合唱する楽曲を替えて（「今月のうた」）全校で歌うなど、熱心に取り組まれている。また、県独自の国語教育の取組である「白川文字学」の漢字学習の先導的モデル校でもある。

3)素直さをこえる子どもたちを目指して（③）

C小学校の児童は真面目で素直であり、「おぼこい」子どもたちであると大人たちは皆が認めている。学校では基礎基本を重視し、その定着を図る手厚い取組がなされていることを認めながらも、保護者や地域住民には、社会とりわけ県外に出てからのことを考慮して、

広い社会で通用するための学力を伸ばすことも意識されて、それが「卓越性」への希望として示されている。一方、子どもたちの中からも、「早く中学生になって、隣の校区の子と一緒になった時の自分の学力の順位を知りたい。」（６年女子児童）などの声も聞かれ、学習に熱心な子どもたちの思いに応えることも今後の取組に託されている。Ｃ小学校の「めざす児童の姿」は「Ｃの子／ひとりであるく／みんなとあるく／力のかぎりあるく」で、「学習した内容を能動的に身につけることができる児童」「普段の学校生活習慣を実社会や実生活の中に転用できる児童」と解説されている（「平成 22 年度　学校案内」より）。「言葉」の定着からその活用へ、児童の積極性や自主性の育成が目指されている。

c2 町立Ｓ中学校

【プロフィール】

所　在　地　福井県Ｎ郡 c2 町

校区の特徴　主な産業は林業、他に蕎麦、地元産の柿などが有名である。古くからの歴史のある地域である。

生　徒　数　100 名程度

教　員　数　20 名程度

生徒の特徴　長時間通学の生徒が多い。自転車通学が多く、遠方の生徒では片道 10km 以上の場合もある。ただし、降雪が多い地域のため、冬期にはスクールバスが利用されている。

１．学校の概要

訪問した時期には学校の周囲にも猪や熊が出没して、危険度が高まっていた折から、注意が喚起されていた。生徒数については、地域の過疎化の進行により、この４年間は連続して、毎年約 20 名ずつ減少している。

Ｓ中学校の特徴として、近年「歌う学校」を標榜している点があげられる。入学式、卒業式をはじめ体育祭など多くの学校の行事で、学級単位の合唱が行われている。

近年、校舎の耐震・改修工事がおこなわれていたため、訪問時には授業もプレハブ校舎で行われていた。授業を見学した２年生の教室の窓からは、工事中の本校舎と体育館の正面が眺められた。

「全国学力調査」の結果は継続して高く、平成 22 年度の結果についても、国語、数学ともに全国平均を大きく上回っている。領域・区分ごとの平均では、全ての区分で５ポイント以上上回っており、特に数学Ｂでは、一つの区分以外は 10 ポイント以上、その半数以上が 20 ポイント以上、上回っている。福井県の結果（平均）との比較でも、国語、数学をとおして、数学Ｂの一つの区分以外は全て県の平均を上回っている。また、福井県が独自に実施している学力調査でも、Ｓ中学校は５教科全てで県平均を上回ってきた。

福井県では「全国学力調査」の学習状況調査で「宿題以外の家庭学習時間」が全国平均を下回っていることが話題であるが、Ｓ中学校でも家庭での自主的な学習はあまりなされていないとのことである。これは、長時間（遠距離）通学している生徒が多いという事情と、日々相当量を課される宿題をほとんどの生徒がやっていることから、更なる家庭学習なしでも学校の授業と宿題だけで基礎学力が定着していることを意味している。ただし、一部にできていない生徒がいることやさらなる家庭学習を促すために、保護者にも「家庭学習について」の手引を配布し、家庭学習の習慣化の徹底が図られている。また、生徒の

通塾状況はほぼゼロであり、これには生徒の通える範囲に塾がないという地域の事情が大きい。

Ｓ中学校の学力向上のための取組として、次の３点があげられている。まず、１つには、英語と数学の２教科で TT の実施。２つには、家庭学習の促進で、上に記したとおり保護者にも内容を通知して徹底を図っている。３つには、教員研修である。

「全国学力調査」に関するＳ中学校の好成績について、その学校の要因や背景についての考えを教員に伺ったところ、教員の教育に取り組む意欲が高いことがあげられるが、その背景には学校の教育環境があるとの話があった。この教育環境については、伝統的に教育に熱心な教職員集団であること、県の教育施策である 35 人以下の少人数指導体制、学校のある地域の地域性として、学校の教育や教員を支持する保護者や地域の人々の意識、などが語られた。

特にＳ中学校区の保護者や地域住民の意識や生活文化の特徴として、伝統的に学校的価値観が地域社会で共有・維持されていることを、聴き取りをした人たちが異口同音に指摘されていた。これにより、家庭、地域や小学校段階でも学校の勉強や宿題をすること、教師の言うことを聞くことが「当たり前のこと」として指導されているようである。また、地域との関係で注目されるのは、学校の PTA 行事として行われている活動が地域の行事でもあって、活動を担うことで、生徒たちが地域社会の一員として認められていることである。

学校では今回見学した授業の様子もいたって普通で、例えば授業者がわざと生徒を「いちびって」笑いをとる等、大阪の地域文化を思わせるような気さくな雰囲気であった。笑いをとることについては、ここも関西の文化圏ですから、とのことであったが、緩急のめりはりはしっかりとついていた。

生徒の生活面、学習面、スポーツ等の全てにおいて「当たり前のことを当たり前にやる」ことや「基礎基本の徹底」への教職員の信念に揺らぎはなく、「しなかった」「できなかった」場合の生徒への指導が厳しくかつ丁寧であると感じられた。教員も生徒も睡眠時間以外のほとんどを通勤・通学と学校で過ごし、保護者は仕事に忙しく、祖父母も農作業と家事や孫の世話に多忙な家庭と地域には、緑豊かな大自然の中で猛烈に働く大人と子どもの姿が見られるのである。

２．スクールバスモデルからみたＳ中学校

ここでは、スクールバスモデルの８つの要素ごとに、Ｓ中学校の特徴を簡潔に整理してみたい。

①教職員集団

聴き取りにもあったとおり、教員は伝統的に教育に熱心で献身的であり、長時間労働を

厭わない。もっとも、「基礎基本の徹底」のため、学校で長く過ごさざるを得ないという状況もある。以前には 22 時頃まで補習をしていたこともあるが、隣接する町の中学校区から問題視され、次第に時間を短縮せざるを得なくなったとのことである。女性教員も部活動指導の後で学級の仕事や授業準備等で 21 時頃までいるのが普通で、家庭のことは義母等がみてくれるから、すなわち「家庭の中に女性は二人要らない」とは教員の家庭にもあてはまるとのことである。人数が少なく、工夫された教員研修や TT の取組によって、教職員の集団としてのまとまりはよい。皆が遅くまで残っているので、それが当然視されている。結果として、保護者や地域住民の期待に応える形で、学校が「補習塾」「進学塾」「スポーツ教室」の全ての役割を担っている。

教員の構成は、若手教員が配属される傾向があって比較的多く、このこともあって授業の水準は必ずしも全体的に高いというわけではない。人数が少ないので、教科によっては対応に苦慮している。国語科については教科担当が一人なので、教頭先生も授業を担当している。

②学校運営

小規模校であるため、教職員相互に助け合わざるを得ず、また、それを前提とした学校運営がなされている。学力向上の取組としての英語と数学の TT は、英語は各クラスで完全実施されているが、数学は教科担当の教員数の都合により各クラスで２～３時間の実施で、１・２年については異教科担当が T2 で入っている。

概要に記した教員研修は、今年度の研究主題である「生徒の表現力を高める授業の工夫」について、異教科・異年齢による３グループを構成し、各グループ内で研究授業と事後検討会を、一人につき年２回行う、というものである。研究主題に係る研究仮説が設定され、研究推進の方法も定式化されていて、学校としての取組が明確である。

③生徒指導

生徒指導上の課題として不登校生徒への対応がある。原因は、学業不振タイプ、朝起きられない「重役出勤」タイプ、また合唱の練習が辛いなど多様だが、個別に丁寧な対応がなされている。この点、教育相談員の配置が充実しており、県と町の両方から派遣されているので、交代でシフト勤務としている。

部活動にも伝統的に熱心であり、大きな成果も上げている。指導には外部の指導者は呼ばず、教員のみである。特別支援学級の生徒は科学部に所属し、他の生徒は全員が運動部または吹奏楽部に所属している。昨年度の高校進学実績では、約半分がスポーツ推薦である。

また、生徒の携帯電話の所有はゼロである。必要がないというのが大きいが、高校入試の結果発表後に皆こぞって買いに行くのが慣習となっていて、生徒に関心がないわけではないとのことである。

④学習指導

授業は「いたって普通」であるが、見学した範囲内でも全体として、教員の配慮や手のかけ方はとても丁寧でかつ徹底していた。笑いをとって生徒を引きつける等は上に記したが、生徒一人一人に注意を向ける点では、例えば説明の大事なポイントで全員が注目しているか、また全員が板書をノートに写し終えるのを待ち、それらを確認してから次に進むといった配慮がなされていた。

学校としての学習活動への取組は、②に記したように授業における TT の他、補充学習や時間外学習がある。具体的には、「朝学習」の徹底（全学年 7:50～8:10）、放課後の補習（県の「学力診断テスト」に向けて、部活動引退後の３年生全員を対象に 16:15～17:35）などである。

生徒の学習・生活状況は、部活動等との関わりで特筆に値する。部活動では引退後の３年生も含め、朝練が行なわれている。放課後の部活動後は、長時間通学の生徒では、帰宅後疲れて夕食後すぐに寝てしまうが、宿題をするために早朝の３～４時に早起きする者も多く、宿題をした後、時間があれば再度眠りあるいは朝食をとって家を出て、朝練に来るのである。こうした生徒の家庭生活の支えの一つとして語られたのが「じじ・ばばの存在」で、例えば、祖母が早朝に玄関先で孫のカバンをロープで自転車にくくりつけて登校準備する姿が見られる等である。

⑤地域・校種間連携

地域との連携では、生徒たちの PTA 行事への参加に関して、11 月の「雪囲い奉仕作業（２年と保護者)」など、地域の活動において生徒が地域社会の一員として認められている。こうした活動を通して地域で子どもたちを育てることが実現しており、また生徒も働き手として認められていることから自己の存在価値を肯定され、自尊感情などの自己意識が高められることから、生徒指導上の問題も起こりにくいと思われる。なお、８月には「学校林奉仕作業（３年と保護者)」として下草の伐採等が行われており、学校林を保有しているということも驚きであった。

一方、校種間連携に関して、小中連携については、上に記したように地理的に校舎が隣接しており、その取組としてお互いの授業を参観し合っている。なお、小中連携は、平成 23 年度からは福井県全体で取り組む予定である。

⑥家庭とのつながり

生徒のほぼ全ての家庭が三世代同居であり、祖父母の関わりも大きい。意識においては、家庭は学校に「協力的」であるが、聴き取りをした人たち全員が異口同音に「良くも悪くも学校に任せっきり」と語るように、家庭と学校との直接的な関わりは決して多くはない。そこで、学校として「家庭学習について」の配布などによって、生徒の家庭学習の習慣化、定着の徹底を図っている。

家庭生活については、家（住居）と車にお金をかける傾向が強いとのことで、自家用車

がないと生活していけない地域の事情もあり、一人１台の場合もある。福井県において女性の就労が多いのは、収入を得るため、そして「家の中に女性は二人要らない（同居している姑が家事をする)」からとのことである。

⑦学校環境

概要に記したように、訪問時には校舎の耐震・改修工事中で仮校舎であったがきちんと清掃されており、過ごしやすい環境整備には配慮がなされていた。

また、授業中の規律の遵守が行き渡っていることを確認できた。発問に対して挙手し、あてられて答える際には、立ったらまず椅子を机に入れてから答えるという手順が極めて自然に行われていた。聴き取りで教員に確認したところ、こうした決まりごとは、入学当初にはいくらか確認を促すものの、小学校段階から徹底されているようで、中学校では特に意識して指導はしていないとのことであった。生徒に生活や学習の規律が確立されていることも、学校の教育環境として生徒の学習への態度を形作っていると考えられる。

⑧学校文化

学校の勉強や宿題は大事、教師の言うことは聞くもの、という学校的価値観を維持し共有している地域や家庭からの信頼と期待に応えるべく、生徒に関わる活動全般を引き受けている教員は、伝統的に真面目で熱心であり、献身的な姿勢をもっている。このように、生徒に教職員が皆で関わり取り組む雰囲気が全体に強く感じられる学校であるが、それが強ばったものでなく、当然のこととされていることが教職員のまとまりを更に強くしている。

３．成功の３つのポイント

最後に、Ｓ中学校が好成績をおさめている要因として、下の３点を指摘しておきたい。

1)厳しく丁寧な指導の徹底（④）

まず、基礎基本の学力定着の徹底がなされており、学習への厳しく丁寧な指導が行き渡っていることである。山間の小規模校において、交通の便の事情等もあり、学校が、結果として「補習塾／進学塾」「スポーツ教室」の全ての役割を担っている（担わざるを得ない）ことが見出される。そして、生徒が「しなかった」「できなかった」場合には、厳しくかつ丁寧な指導がなされている。こうした取組により、学習に真面目に取り組む生徒の姿が「いたって普通」である授業風景が実現している。

2)学校的価値の重視に応える文化（⑧）

1)の教育活動を生み出しているのが、学校への信頼や期待に応える、伝統的に真面目で

熱心、献身的な教員の取組の姿である。教員には「当たり前のことを当たり前にやっている」と意識されている。これを外部から支えるものとして、学校的価値観を維持・共有する家庭と地域の存在がある。福井県全般の特徴として、家庭と地域の安定した状況があること、すなわち家庭の三世代同居・共働き・持ち家・自家用車所有の率の高さが指摘されている。S 中学校は、県内では相対的に生活状況に厳しい生徒の多い郡部の中学校として、今回の訪問調査の対象校とされたが、経済面以外の生活面ではなお安定している。ここで学校的価値観の重視とは、保護者や地域住民が学校、学校教育（勉強や宿題）の意義や必要性を認め、そして教員を大事にし、支持していることを意味している。一般に「教育に熱心」と言われる意識であるが、この教育が直接に学校と教員に期待されているのである。この意識には、地域住民の誇り高い気質の存在も関連していると語られていた。

3) 地域社会の一員としての生徒たち（⑤）

何よりも生徒に対する期待として、豊かな自然環境の中で地域社会の一員として生徒が位置づいていることである。雪かき、学校林の整備等、PTA 行事である生徒の奉仕活動が、地域の年中行事として位置づいていて、そこでは大人も子どもも共に働いている姿がある。こうして、地域社会の一員としてその存在を認められていることから、生徒も自己の存在価値を認め高めることができるのであり、このことが学習への意欲や態度へと結びついていると考えられる。

＜大阪＞

d1 市立 D 小学校

【プロフィール】

所　在　地　大阪府 d1 市

校区の特徴　生活するのには便利な地域であり、3 世代が D 小卒業生という住民も多く、学校にはたいへん協力的である。

児　童　数　400 名程度

教　員　数　20 名程度

児童の特徴　就学援助を受ける児童の率は 3 割を超え、経済的に豊かとはいえない。生活面の課題がある児童も少なくない。しかし、地域の子どもを地域で育もうとするおとなたちにしっかり見守られて子どもたちは育っているようである。子どもたちは人なつこく、訪問調査の際には、筆者のような初対面のおとなにも気軽に声をかけてくれた。普段から親や先生以外のおとなと接しているため、おとなに対する心理的な距離感が小さいのもしれない。

１．学校の概要

D 小学校の子どもたちの生活基盤は必ずしも安定したものとは言えない。平成 19 年度と平成 20 年度は就学援助を受けている児童の率が 3 割を超え、平成 21 年度は 5 割を超えている。これだけ生活状況の厳しい子どもが多くなると学習指導の成果をあげるのはかなり難しいと思われるが、D 小学校は平成 19 年度から 21 年度にかけてコンスタントに成果を残している。今回の調査の目的は、どのような取組が家庭状況の厳しさを乗り越える効果を発揮しているのかを見出すことにあった。

訪問調査時に平成 22 年度の全国学力調査の結果について校長先生に尋ねたところ（d1 市では、抽出調査の非該当校を含む全小中学校が調査に参加し、市独自で調査の集計・分析を行った）、各教科・問題ともに正答率は全国平均と同等だったとの答えが返ってきた。校長先生によると、D 小学校の調査結果には、その他にも次のような特徴があったという。

①国語・算数ともに教科に対する関心が高い。

②多くの子どもが苦手とする「書く」活動や算数の「割合」の成績は良好。

③地域活動に参加する率は高い。

④基本的生活習慣には課題がある（習慣の確立している子どもとそうでない子どもの差が大きいと思われる）。

⑤学習塾に通っている子どもの率が少ない。

基本的生活習慣や学習塾に関する結果は、D 小学校の子どもたちの家庭が学力形成に有利な条件を備えているとは言えないことを示唆している。ここで注目したいのは、学習に対する関心が高く、地域活動への参加が活発なことなどである。このあたりに D 小の「成功」

の秘密が隠されているようにも思われる。ともあれ、まずは子どもたちの生活や学力の状況について、当事者がどのようにみているのかを紹介したい。

子どもたちの生活状況の厳しさは教員にも地域住民にも意識されている。現在、D 小学校には、授業が成り立たない状況にある学級・学年はない。しかし、授業中にしゃべったり物をいじったりするなど「落ち着きのない子ども」がかなりいることは、訪問時に筆者がみた子どもたちの様子からもうかがい知ることができた。ある教員は、この小学校に赴任した時の第一印象を「みんなが静まってシーンとなる瞬間がなかった」と語っている。

別の教員によると、D 小には、なかなか子どもの勉強を見てやれないことを不安に思っている保護者や、夜遅くに仕事から疲れて帰ってくる親に連絡帳を見せにくい子どももいるようである。また、ある地域住民は、D 小の子どもたちについて「みんないい子で、なついてくれる」と述べる一方、ひとり親家庭が多くてその中には「愛情不足」と思われる子どもがいることを指摘した。保護者が生活に追われて子どもと関わる時間的・心理的なゆとりをもてないことが、子どもの生活習慣や精神状態によくない影響を与えているようである。

以上のような子どもたちの厳しい状況に対して、学校では様々な手立てを講じている。主なものを挙げるならば、第 1 に特別支援教育の視点に立った生活指導、第 2 に「楽しい」授業づくりの工夫、第 3 に学校と地域の連携である。

D 小では、1 学期と 3 学期に児童理解研修を行っている。この研修会では特別支援学級在籍児童や支援学級に在籍していなくても担任からみて「気になる子」について、全職員で情報を共有している。年度が変わっても継続的な指導をするためである。日常的にも「複数の力で、チームで子どもを支える」という考え方にたって、特別支援学級と通常学級の担任は頻繁に連絡を取り合っている。また、友達の気持ちを汲み取ったり自分の気持ちを表現したりするのが苦手な子が多いので、教員は、子どもの代弁役や気持ちの説明役になるなどして、人間関係の「交通整理」をしている。これらの取組は、全ての子どもたちが安心して過ごせる環境づくりにつながっているようである。

D 小での授業研究はかなりユニークである。そのモットーは「子どもが楽しむために教師がまず楽しむ、教師がノッたら子どももノッてくる」というものである。D 小は 20 代の若手教員が多いこともあって、教職員集団には新しいことに挑戦しようという雰囲気がある。去年と今年は音楽でパソコンを取り入れた指導を試みたそうだ。研修担当の教員は「20 代の若い先生がたくさんいるのでそういう人の刺激にしたいし、逆に自分たちもいっぱい刺激を受けたい」と語ってくれた。D 小の授業づくりの研修は、授業の充実だけでなく、教員間のコミュニケーションの活性化にも寄与しているように思われる。

保護者に D 小の子どもの学力状況について尋ねると、「みんなが塾に行っているわけでもないし、この学校の学力が高いと聞いてびっくりした」との答えが返ってきた。住民の間では、「風評」としてだが、「D 小は学力が低い」と言われてきたのだという。だが、この保護者は続けて「塾に行っていても授業をないがしろにする子はいない。これは先生の努力

のたまもの」とも述べた。おそらく、先に説明した生活指導と授業づくりの工夫が、子どもたちの学習への前向きな参加姿勢を引き出しているものと思われる。

最後に学校と地域の連携に触れておきたい。調査者が最初にこの小学校を訪問したのは登校の時間帯だったが、まず目にとまったのは通学路のそこかしこに立つ大人が子どもと声を交わす姿である。教室に貼ってあった絵日記には、神社の夏祭りや子ども会のソフトボール大会について書いたものが多かった。校長先生は「子どもたちは地域で楽しい思い出をたくさん作っている。楽しい思い出は、結局、色々なことへの意欲となる。学校の授業でも投げ出さないで頑張ってみることにつながる。そういう気持の育ちがあるのかなと思う」と語ってくださった。学校は、子ども会活動、防犯・防災活動、土曜日の体験活動などについて、申し込みの窓口になったり、広報の協力をしたり、会議や活動場所を提供したりしているという。学校の協力によって地域活動が活性化し、子どもの意欲が育まれ、結果的に子どもの学力を支える。そのような良循環がD小ではおきているように思われる。

２．スクールバスモデルからみたD小学校

①教職員集団

授業づくりの研修、特別支援教育・生活指導の研修などに見られるように、教職員相互のコミュニケーションは活発である。個人の力量頼みではなく、アイディアを持ち寄り、情報を共有し、同僚の協力関係によって、教育活動を進めようとしている。年齢構成においては20代の若手教員が多いが、この年齢層は、総じて研修には意欲的で地域行事にも積極的に参加するという。大阪では教職員の世代交代が急だが、D小の場合、若手教員の多いことが結果的に組織の活性化につながったようである。

②学校運営

市内の小学校のなかでは、学校規模は中ぐらいの部類に入る。2年前に赴任した現校長は生活指導や特別支援教育に詳しく地域連携にも積極的に取組、学校づくりにリーダーシップを発揮している。なお、特別支援教育のコーディネーターによると、日程調整が難しくてケース会議を開くのが難しいが、臨機応変に情報収集や関係教員との連絡を行っているとのことだった。

③生徒指導

現在は授業不成立などの「荒れ」はなく落ち着いている。だが、学校全体としてみると、基本的生活習慣の乱れのために遅刻が多かったり、友だちとの人間関係が作りにくい子が多かったり、落ち着きがない子が多かったりする傾向があることは否めない。ただし、「荒れ」が見られた頃でも、縦割り班活動などの異年齢集団の関係の中では、子どもたちは普

段とは異なる優しい一面をみせていたという。また、先にも述べたように、D 小では、特別支援の対象となっている子どもやそれに準じる状況の子どもを含めて、ともすれば難しくなりがちな子どもたちの関係を丁寧につなごうと心を砕いている。校長先生は「特別支援の子どもがいると学級にまとまりが感じられるようになる」とも述べていた。課題を持った子どもも含めて全ての子どもを集団に位置づけていくというのが、D 小の集団づくりのベースとなっている考え方である。

④学習指導

D 小では、国語や算数の教科学習の指導について、取り立てて研究をしているわけではない。d1 市内の他校と同じように少人数授業を導入しているが、特に D 小の特徴といえるものはないようである。放課後には自主学習のために教室を開放しているが、家の事情や習い事で帰る子どもも多く、なかなか運営は難しいという。だが、全ての子どもが安心して過ごせる人的環境づくり（集団づくり）や子どもが「ノレる」楽しい授業づくりは、子どもたちに学習に取り組む姿勢を作りだしている。

⑤地域・校種間連携

もともと地域活動が盛んな土地柄で、3 世代にわたり D 小に通った住民も多いため、地域と学校の関係は密だった。総合的な学習の時間でも各学年で地域の自然や人々とのふれあいをテーマにした学習を行ってきた。また、最近は、土曜日の体験活動「D 夢塾」、地域防災・地域福祉活動を通じて、異世代交流が活発になってきている。その他、学校の近くにある大学の文化会がボランティアとして地域活動に参加するようにもなっている。土曜日に保護者が仕事のために不在であっても、D 小の子どもたちはこれらの機会に皆で集まって楽しく過ごすことができるのである。

中学校との連携については詳しいことを聞けなかったが、不審者から子どもを守るための巡視活動は中学校の職員とともにかなり頻繁に行っているという。なお、d1 市は、2011 年度（平成 23 年度）から全市的に小中一貫の教育を推進しようとしている。

⑥家庭とのつながり

基本的生活習慣と学習習慣の形成のため、去年から「早寝早起きプロジェクト」を始めた。生活習慣の大切さをわかりやすく書いた冊子を作って保護者への啓発を行ったり、朝食摂取などの「チェック表」を家庭でつけるなどの取組である。普段の宿題は学年で相談して最小限の分量を決めている。児童の中には宿題の量が多いとこなしきれない子もいるからである。宿題だけでは飽き足らない子に対しては「自由課題」という名のプリントを毎月 30 枚ほど配り、保護者と学校が点検するようにしている。

ただ、家庭によっては、くらしに追われて子どもの生活や学習に気を配るゆとりがないこともある。それ故、学校はそのような保護者に積極的に声を掛け、学校でおきたことは

良いことも悪いことも連絡するようにしている。「どうしようかなと思ったときは、必ず（電話で）連絡をするか（家庭訪問をして）顔を見に行くこと」（ある教員の言葉）が、保護者との信頼関係づくりのための基本である。

⑦学校環境

明るい塗装のきれいな新しい校舎である。校内には住民の生涯学習活動の拠点となる部屋が設けられている。

⑧学校文化

学校教育活動と地域活動のつながりによる相乗効果が発揮されている学校だと言える。教職員間の風通しはよく、子どもたちが安心して学べる環境づくりや授業づくりに皆で取り組む雰囲気がある。地域には D 小とそこに通う子どもたちに愛着を持っている住民が多く、子どもとおとなの異世代交流や共同活動が盛んである。学校の力と地域の力が一体となった教育力のおかげで、厳しい生活状況にある子どもたちの育ちが保障されている。

３．成功の三つのポイント

１）チームですすめる特別支援教育（③）

特別支援教育と生活指導の両面から児童理解を深めている。また、特別支援学級在籍児、通常学級の支援対象児、生活指導上の配慮が必要な子について、通常学級・特別支援学級・教育支援員（地域住民）で情報交換を活発に行い、学習指導や生活指導（集団づくり）に取り組んでいる。

２）教師が楽しむ授業研究（①）

授業研究は「子どもが楽しむためには教師が楽しむ必要がある」という考え方で行っている。国語や算数の学習指導に特化して研究をしているわけではないが、若手教員のアイディアや意欲を尊重し、指導方法や教材の工夫（例えば、パソコンを使った音楽の授業）をしていることが、教員組織に活力をもたらしている。

３）子どもの気持ちを育てる地域社会（⑨）

住民の転出入が少なく地縁が健在。神社の祭り、子ども会、安全見守りパトロール、地域防災、土曜日の体験活動や異世代交流など地域活動が盛んで、子どもの精神的成長につながっている。校長先生によると「楽しい思い出は意欲につながる。気持ち（＝自尊感情）の育ちというものがある」のだそうだ。

d1 市立 T 中学校

【プロフィール】

所　在　地　大阪府 d1 市

校区の特徴　古くからこの地に住んでいる住民が多く、青少年育成組織、社会福祉協議会、子ども会などの活動が盛ん。地域と学校の関係も結びつきも強い。近年はマンションが建設されて新しい住民も増えてきたが、町会などの活動には新しい住民も一緒に参加している。

生　徒　数　300 名程度

教　員　数　20 名程度

生徒の特徴　全校の就学援助率は 3 割を超える。経済的には豊かとは言えないが堅実に暮らす家庭が多いという。最近まで、授業を抜け出すなどの問題行動が目立つ生徒もいたが、地域の人たちからの励ましや小学校時代からの友人関係の中で、「荒れ」は収束していった。

１．学校の概要

T 中学校区は生徒たちを取り巻く人々の関係がたいへん豊かな校区である。家庭の経済状況が豊かだとはいえなくても生徒の学力の底上げに成功しているのは、このような地域の特色を学校の組織的な取組とうまく結びつけた結果のようである。

T 中学校は、平成 19 年～21 年の全国学力調査で好成績を収めた。関係者からの聞き取りや授業見学をしてその要因であろうと思われたのは次のような事柄である。第 1 に、教科指導に長けたベテランの教員が多かったこと、第 2 に、指導力の充実や学習習慣形成に関わる取組を地道に進めていること、第 3 に、地域と学校が緊密に協力して子ども育成を図ってきたことである。

ただし、第 1 の要因は決定的なものではない。 d 1 市内でベテランが多いのは、T 中学校だけではない。また、この間、T 中学の教員は大幅に若返り、今では 20 代・30 代の教員が半分以上を占めるようになっているが、それでもなお、2010 年度（平成 22 年度）の調査でも T 中の生徒は良好な成績を収めた。厳しい生活状況にある生徒がかなりおり、教員の世代交代が進んでいるにもかかわらず、T 中学が安定して好成績を収めているのは、第 2 及び第 3 の要因によるところが大きいと思われる。

T 中学校は、昨年度から、市教育センターが創設した「授業力」の充実をはかる事業を導入して授業づくりに取り組んでいる。若手の教員が急増する中、授業に関わる指導力の充実が急がれるからである。研究授業では、デジタルカメラで授業中に撮影した画像をもとに、特定の教科の内容についてではなく、生徒の学習がどのように成立しているかについて、細かく検討する。アドバイザーは市の教育センターに紹介してもらった大学教員だそうである。研究は極めて実践的で、教員にはたいへん好評である。指導案の検討も全員で

行っているという。T 中学校は研究授業を年に約 10 回行っているが、この回数は市内の学校ではかなり多い方である。

T 中学では、普段の授業でも、教員が学び合う「相互参観」を実施している。参観の後は感想用紙を教頭先生に提出することになっている。この用紙は授業者が自由に見られるようにしているそうである。用紙には、授業で着目すべきポイントについて「A よくできている」から「D できていない」の 4 段階で記入する欄と、授業を見て参考になったことや自分の授業に取り入れたいことなどを記入する欄がある。前者は授業の規律や生徒への接し方など、授業の「基本」に当たるもので、次のような項目から成っている。

1　あいさつ、服装の指導、学習環境（机の整列、ごみの有無）の整備など、授業規律の向上に努めている。
2　説明がわかりやすく、指示も的確である。
3　発問の仕方を工夫し、生徒の意見や考えをうまく取り入れている。
4　机間指導等をよく行い、個々の生徒への対応に努めている。
5　居眠り、よそ見、私語等に対してしっかりと注意している。
6　本時の授業のポイントをしっかり押さえている。

いずれも当たり前と言えば当たり前のことばかりではある。だが、実際にこれらが徹底できているかといえば、我々が訪問調査中にみた授業の様子から判断する限り、教員間に温度差があることは否めない。経験の浅い教員には、これらの大切さに気がついていないこともある。「当たり前」のことをあえて明文化するのは、授業の前提となる学習規律や、どの教科であっても大切にすべき授業の基本について共通理解を図るためでもあると言える。

生徒の問題行動への対応には、d1 市内のどの中学校も苦労している。厳しい生活状況にある生徒が多い学校では特にそうである。T 中学も例外ではない。3 年ほど前に授業不成立や問題行動などの「荒れ」が見られたときは、教室に入らない生徒や授業妨害をする生徒の別室指導も行ったという。しかし、T 中学校の生徒指導は厳格さだけでなく柔軟さを備えたものである。そして、このような生徒指導を可能にしているのが、第 3 の要因、すなわち、地域と学校の協力関係である。

T 中学校は、定期的に、地域の青少年育成組織と懇談の場を設けている。その席では、生徒の様子について、良いことも悪いことも含めて、ありのままに意見交換をしている。何らかの事情で学校に来にくくなったり、クラブを辞めてしまったり、保護者との関係が上手くいかなくなっていたりする生徒に対しても、地域の人たちは親身になって接してくれているという。時にはそういう生徒をソフトボールの大会や小学生のスポーツ指導などの地域活動に積極的に誘い込むこともあるそうだ。生徒たちは、仲間と一緒に頑張ったり、大人たちに面倒をみてもらったりする中で、達成感、自信、世話になった大人たちへの感謝の念などをもつようになる。そうして、一時的に学校から離反した生徒たちも、自分を見つめ直し、学習や進路に対する前向きな姿勢を取り戻していくのである。

２．スクールバスモデルからみたＴ中学校

①教職員集団

数年前まで新規採用者の赴任がまったくない状況が続いたが、その後、新規採用者が増加し、今では20代・30代の先生と50代の先生が同じぐらいの割合になっている。しかし、40 代の先生はたいへんに少ない。このように中堅層が少ないと、若手教員が先輩から学ぶことが難しくなる。そのため、授業の指導力を高めるための研修・研究に力を注いでいる。

②学校運営

学校運営全般にわたって、教員アンケートと保護者アンケート（参観日に配布・回収する）にもとづいて自己評価を行っている。その結果は、毎年、学校評議員会で報告され、意見交換が行われている。かつて評議員は、地域の各団体の代表約20名がつとめていたが、昨年度から議論を活性化するために人数を4名に絞った。現在の評議員は、PTAの会長、元会長、保護司、主任児童委員などである。これらの人々は、町会、社会福祉協議会、青少年健全育成組織などの役員も兼ねている。

③生徒指導

部活動が盛んである。部の中には、夏休みに学校の清掃を自主的にやったり、夏休み中の宿題の点検を部活動単位で行ったりするところもある。また、特筆すべき点として、地域連携のもとで生徒指導が大きな効果をあげていることがあげられる。

④学習指導

市内の多くの中学校と同じように、少人数指導（国の第七次定数改善やd1市独自の加配を活用）や朝の読書タイムを実施しているが、実施状況に際だった特色はない。家庭学習の指導・支援も、その必要性は認識されているが、なかなか学校全体の取組になりにくいようである。しかし、担当教科・学年に関係なく全ての教員が学習指導について研究したり学び合ったりする体制はしっかりしており、指導力量に不安のある教員はいなくなってきた。

⑤地域・校種間連携

小学校時代からの子ども会活動を通じた仲間との関係や地域の大人との関係が、学校の生徒指導を有形・無形に支えている。なお、T中学校は、小学校・中学校・地域の相互交流が盛んなことから、平成 19 年と 20 年に小中連携の先導的調査研究実践校に指定された。社会体育として行われている成人ソフトボールのチームと中学校の野球部が交流試合をしたこともあったそうである。

⑥家庭とのつながり

PTA 役員は地域枠と学級枠から選出される。前者は町会を単位にしており、PTA と地域の結びつきは強い。ある地域住民は「PTA は地域デビューの場」と話してくださった。これは、子どもの小学校入学が、PTA 活動だけでなく子ども会などの地域活動にも参加するきっかけになっているという意味である。ただし、子どもが減って単位子ども会が維持できなくなった町会もある。また、多忙のために保護者が PTA や子ども会の活動に参加しにくい家庭もある。PTA や地域の活動を従来と同じ形で続けていけるかどうかについては、改めて考えてみる必要があるかもしれない。

⑦学校環境

校舎は平均的なつくりである。ただし、騒音対策として全教室にエアコンが設置されている。特に夏場は空調が効いているために学習に取り組みやすいということだった。また、数年前に学校が「荒れて」いた頃には、蛍光灯がはずされたり中庭が荒らされたりしたこともあったそうだが、今ではそのようなことはなくなり、生徒たちは落ち着いた学校生活を送れるようになっている。

⑧学校文化

安定した地域に支えられて学校教育活動が展開されている。今の校長先生が赴任したのは昨年だが、先生は校区の小学校での勤務経験があり、校区や小学校の事情に明るい。校長先生が地域連携に熱心なのは、子どもたちには「生活の大本になる地域にしっかり根を生やしてほしい」という考えからである。ただ、そこに安住するのではなく、教科の授業をはじめとする学校教育活動を通じて、子どもたちの力をもっと伸ばしたいとも考えている。学校をあげて授業力の充実に取り組んでいるのはそのためである。

３．成功の三つのポイント

１）学習規律の重視（④）

学校としては、教室の整理整頓、授業前のあいさつ、服装など、「生活指導と結びついた授業規律」（ある教員の言葉）がよい授業の前提だと考えている。実際には全ての教員が学習規律の指導を徹底できているわけではないが、授業の相互参観などの折りに触れて全教員で共通理解を図っている。また、学習習慣をつけさせるために夏休みの宿題の点検を行っているクラブもある。

２）教科の枠を取り払った研究体制（①）

担当の教科・学年に関係なく生徒の学び方を中心に授業のあり方を考えるようになり、

学校あげて授業研究が行われるようになってきた。一般的にいって、中学校では教科や担当学年の枠を越えて授業研究に取り組むのは難しいが、T 中学校はこの難題を克服しつつあると言える。

３）「包容力」ある地域との連携（⑤）

学校から気持ちが離れている生徒や、家庭での親子関係が難しくなっている生徒、問題行動を起こしている生徒に対しても、親身になって接してくれる大人がいる。それを校長先生は「地域に包容力がある」と表現している。生徒が多様な人々（地域の人や仲間）のつながりの中で生きていること、学校が生徒の抱える課題を地域にきちんと伝え、両者で子どもに関わっていることが、生徒の心に安定感や自信をもたらし、安定した学校運営と一人一人の学力の下支えにつながっているようである。

＜兵庫＞

e1 市立Ｅ小学校

【プロフィール】

所　在　地　兵庫県 e1 市

校区の特徴　県営・市営・公団の団地と一戸建て分譲住宅の中にある学校。就学援助率は高く、40％を越える。

児　童　数　300 名程度

教　員　数　30 名程度

児童の特徴　大半が核家族の児童で、あいさつもよくする、人なつっこい子どもが多い。学習態度は前向きで真面目である。

１．学校の概要

学校は、市営・県営・公団の団地が立ち並ぶ地域を校区としている。e1 市の学校では、PTA 組織がないところも多いが、Ｅ小学校も PTA が結成されて日が浅い。しかし、登下校の子どもたちの「見守り隊」を地域の老人会などが担うなど、学校と地域の連携は進んでいる。

学校背景は震災後は特に厳しく、現在、生活保護と就学援助家庭の合計は 43％と高い。中でもひとり親率が 22％で、その内、母子家庭が全体の 20％を占め、給食費の未納も多い。大半の家庭は、母親もパートなどで働いており、放課後の留守家庭も多いのが現状である。同じ校区の中学校は近年、大きく荒れたが、今年度は少し落ち着いてきた。現在、小中連携モデル地区事業の指定を受けており、実質的な小中連携はこれからというところである。Ｅ小学校の学力は高く、全国学力調査では平成 19～21 年の悉皆調査のうち、2 回、県平均を上回っている。具体的には、算・国の A・B 問題正答率合計を見ると以下のとおりである。（平成 22 年度は参加していない）

平成 19 年度　県平均　72.5　　Ｅ小　77.2（4.7 ポイント高い）

平成 21 年度　県平均　63.9　　Ｅ小　69.8（5.9 ポイント高い）

２．スクールバスモデルからみたＥ小学校

「就学援助率が高い校区にもかかわらず、学力が高い」という、全国学力調査の「常識」を覆す要因はどこにあるのだろうか。スクールバスモデルの８つの要素ごとに、Ｅ小学校の特徴を簡潔に整理してみたい。

①気持ちの揃った教職員集団

20 代若手と 40〜50 代のベテランが多く、「ひょうたん型」の年齢構成である。教職員の同僚性は高く、授業公開なども盛んにおこなわれている。研修担当や学年代表の教員などミドルリーダーのリーダーシップが授業づくりに如何なく発揮されている。そのきっかけとなったのは、2006（平成 18）年度より 3 年間、e1 市教育委員会から「分かる授業」推進拠点校の研究指定を受けたことである。以来、授業づくりの研究と実践が長年続いてきた。「発表ボード」を多用した協同的な授業や読書活動、積極的な授業公開などである。新転任の教師にも、「これがＥ小の特徴ですから、授業に取り入れてください」と、研修担当やリーダーが率先して指導し、教師の入れ替わりで取組が後退しないように努めている。

②戦略的で柔軟な学校運営

3 年間にわたる「分かる授業」推進拠点校事業が終わるとすぐに、次のタスクとして「e1 パイロットスクール事業推進校」を引き受け、授業改革の流れを維持していこうとしてきた。目指す子ども像を明確にして、「伝え合いを軸とした分かる授業を構想する」というビジョンとゴールを共有し、取組を進めてきている。

校内の研究組織として、全教員が「学力調査」「学習意識調査」「生活実態調査」「児童の授業評価」の 4 つのプロジェクトに分かれて、研究している。各プロジェクトに子どもたちへの調査と分析をおこない、その結果を全体研修でシェアしている。プロジェクトのデータ分析に基づいた提案を全体が確認して方針化するという、戦略的で柔軟な学校運営がなされており、その方策化の中心に研修担当などのミドルリーダーがいる。

③豊かなつながりを生み出す生徒指導

現在のＥ小学校では、大きな問題行動は起きていないため、「走り回ることはない」（教頭先生）。不登校児童が 1 名という数字を見ても、子どもたちが学校生活に馴染んでいることが分かる。同校では、生活指導と学習指導を組み合わせた指導が、巧みに行われているが、そのひとつが読書活動であろう。家庭で読書をしない子どもたちの実態が調査から分かると、子どもたちを読書好きにさせるための戦略が全面展開されている。週 3 回の「おはよう読書」、図書委員による「お話会」、昼休み時間などにお勧めの本のブックトーク、そのほかにも 6 年生が 1 年生の学級に読み聞かせに出向いたりするなど、多様な活動をおこなっている。さらには、学年ごとに教師側が読ませたい本をリストアップした「読書ビンゴ」シートや「読書すごろく」などで、子どもの読書意欲を巧みに刺激している。学級ごとに「読書王」を表彰したり、学年で最多の貸出クラスを表彰するなど、様々なキャンペーンも続けている。こうした読書活動の効果は、学習面のみならず、生活面の落ち着きをもたらしている。

④全ての子どもの学びを支える学習指導

Ｅ小学校では、「全ての教科で言語活動を授業に位置付ける」ことが共通課題として設定

されてきた。この 4 年間で大事にしてきた「伝え合う」授業の実践は、算数や国語だけでなく、他の教科でも繰り広げられている。後述する発表ボードを使った取組や、前述した読書活動などがそれである。家庭背景の厳しい子どもたちの実態から出発し、一方では基礎的な学力の下支えをするシステムを確立し、もう一方では読解力・活用力・コミュニケーション力を伸ばすという 2 本立ての戦略が伺える。基礎的な学力を身につけさせるシステムは、例えば、単元ごとの繰り返しプリントや補習をはじめ、宿題の出し方一つにも配慮がなされているが、そのきめ細やかな学習指導については、あとで述べてみたい。

⑤ともに育つ地域・校種間連携

「小中連携モデル地区事業」の指定を受けて、中学校区で連携を図ろうとしているが、まだ情報交換の域を出ていない。「(小学校を卒業した子どもたちが) どうして中学校に行けば、ああなるのでしょう。勉強を自主的にやることを（中学に行っても）持続させるというのはむずかしい」(研修担当) と、教え子たちの姿を見てジレンマを感じている。今後、小学習集団を活用した協同的な授業を重視しているＥ小と、隣接小学校や中学校との授業改善も含めた連携・交流が望まれる。また、幼稚園・保育所などとの交流は、「就学前からの学力保障」という視点からもスタートカリキュラム作りという視点からも望まれるところである。

一方、地域の老人会や青少年育成協議会など、地域との協働は増えてきている。老人会は学校の学習を支えるリソースであり、昔遊び体験や戦争体験の伝承などにゲストティーチャ―として積極的に活用されている。「見守り隊」は、常時、10 人程度が子どもたちの登下校を見守り、校区のあちこちで立ち番をしている。この活動は、1997 年に起きた悲惨な少年事件をきっかけにして生まれた活動である。そのほかにも、地域の夏祭りやとんど焼きなどの地域行事が学校で開かれている。学校訪問した日は、ちょうどプロサッカーチームの巡回サッカー教室が行われていて、5･6 年生がグランドでサッカー指導を受けており、選手たちとボールを追いかけていた。

⑥双方向的な家庭との関わり

平成 17 年以降の生活アンケート調査結果によると、共働き家庭が多いＥ小では、本を読まないでゲームやテレビ漬けになっている子どもや就寝時間の遅い子どもの実態が浮かび上がってきた。そこで、家庭に呼びかけて「テレビを消して家読（うちどく）10 分！」を合言葉に、家読カレンダーに読書した時間の記録もおこない、その成果は広がってきている。生活習慣の確立の大切さを、学校通信などをとおして事あるごとに啓蒙し続けている。家庭訪問も多く、「フットワークは軽いですよ。手を抜くと、すぐガラガラと崩れるのは目に見えているのでね」(学年担当) という状況の中で、教師たちの奮闘が光る。

こうした教師の奮闘は保護者も認めるところであり、保護者アンケートを見ても、概ね良好である。今年度の学校活動評価（保護者評価）においても、学校の教育活動、情報発

信、担任の指導力など、いずれも 4 段階評価中 3.5 前後の高い評価を得ている。

⑦安心して学べる学校環境

やや古くなっている校舎ではあるが、教室や廊下には様々な掲示物が貼られ、教室内には学習の軌跡が分かる工夫がされている。しかし、学習指導に注ぐエネルギー量と比べると、やや教室環境整備にかける情熱には差が見られ、中には学習環境としては殺風景な感じのする教室もあった。その中で興味深かったのは図工室である。様々な備品であふれかえる教室のはずが、ペンやハサミ、テープカッターなどの教材が装飾オブジェ風にカラフルに使いやすくまとめられ、教室中央に配置されていた。美術教師の配慮が感じられた。

⑧前向きで活動的な学校文化

「土曜日はほとんどの教員が出勤していますね」「例えば、誰かが『こうしてみましょうよ』っていい提案したら、パッと同じ方向にみんなが考える。足を引っ張らない」「研修担当としてやりやすい学校」だと、研修担当は語る。子どものためなら、少々の苦労はいとわない、そこから得られる達成感こそ喜びであるという教師文化を強く感じた。これが子どもや保護者の安心感を呼んでいるのだろう。保護者の学校評価でも、「学校の雰囲気がよく、子どもたちは生き生きしている」や「子どもは学校へ行くのを楽しみにしている」、「子どもは学校に友達がたくさんいると言っている」、「子どもは行事に積極的に参加している」などの項目で、高い評価を得ている。

３．成功の３つのポイント

Ｅ小学校が好成績を収めている要因として、次の 3 つのポイントを挙げておきたい。

１）協同研究をはぐくむ同僚性と 0JT（①）

中堅不在の「ひょうたん型」の年齢構成のため、「授業力はまだら模様」（学年代表）である。「分かる授業」研究指定をきっかけに、授業づくりの研究・実践を進め、「発表ボード」を多用した「伝え合う」協同的な授業研究実践が始まった。１年間に十数回行われる公開授業研究によって、授業力の学びあいを積極的に進めてきた。ベテラン教員が「そっちのクラスで授業してもいいかなあ？」と頼んで、若い教員のクラスを借りて、授業を「やって見せる」など、まさに 0JT が進行中なのである。

このため、教員研修の回数も多く、月に最低 2 回、夏休みには、午後会を 4 回と一日研修もおこない、さらに、「これだけじゃなくて必要に応じてどんどんやってます」（研修担当）という。こうした研修体制の中で確認されてきた共通認識は、即、方針化につながっている。例えば、学校独自の学習意識調査の結果、E 小の子どもたちはどの年度でも、3 年生 3 学期末で「ガタンとおちる」ことが分かった。例えば、「国語の勉強は好きですか」「授業中、発表しますか」「話を読んだり、考えたりするのが好きですか」「作文の学習は好きですか」などの項目で、「好き」という回答が前の学年より半減するのである。これを夏季研修で問題提起し、「3、4 年に力を入れる」方針が確認された。

こうして読書活動や協同的な授業、放課後個別指導、分割授業等々、様々な手立てが 3 年生から開始されている。また、生活アンケートの中で、読書をせずにテレビとゲーム漬けの家庭生活が見えたことで、読書活動の大規模な実践を始めるなど、研究プロジェクトの調査分析から方針化と実践へという流れがしっかりできている。

こうした一連の取組を見ても、教職員の同僚性が確立していることが伺える。その中心には研修担当や学年代表のようなミドルリーダーや管理職のリーダーシップが大きい。「教員の同僚性は高いと思います。研修担当としてとてもやりやすい学校だと思います」と、研修担当は語っている。

２）発表ボードを多用した協同的な授業づくり（④）

「分かる授業」の研究指定を受けた時に、教師集団はまず、「分かる授業」とはどういうことなのかを協議し合っている。その中で導き出されてきたのが、言語活動の重視、すなわち「伝え合う授業」であった。「分かる喜びを子どもたちに味あわせたい」とスタートした取組は、今、発表ボードを多用しながら、考える→伝えあう→書き留める→振り返るという作業を徹底して授業に取り入れている。この「考える」作業も、一人で考える、ペアで考える、発表ボードを使ってグループで考えるなど、いろいろパターンがあり、工夫がなされている。

子どもたちは難問に直面すると、「ペアで考えてもいいですか？」と言って、すぐに頭を突き合わせて自分の考えを隣の子に述べて、話し合っている。グループで「発表ボード」を使って、話し合う場面も国語や算数だけでなく、今は社会や理科など他の教科にも拡大している。グループで意見がまとまると、それを「発表ボード」に書き込み、前の黒板に並べていく。出揃ったところで、それぞれのグループから説明がなされ、討議が続く。こうして、到達した結論を吟味しながら、1 時間の振り返りをペアやグループでシェアしあうことで、一層、その効果をあげている。

このコミュニカティブで協同的な授業は、能動的な授業参加を促し、授業に参加しない「お客さん」を生み出しにくい。クラスメイトの意見を聴く中で、新たな発見や思考の高まりをもたらしている。

すぐに頭を寄せ合って話し合う

「発表ボード」の前で協議中

「発表ボード」を並べて、意見を発表

３）基礎基本の学力定着を図る指導システムの確立（④）

伝え合う協同的な授業づくりの一方で、基礎基本の学力を下支えする学習指導システムが確立している。学習意欲が「3 年末にガタンと落ちる」子どもたちを見越して、3 年生から 6 年生には、新学習の加配教員も活用して「金曜プリント」指導がある。どんなに行事があっても、「金プリ」は必ずおこなわれる。子どもたちも教師も、「お楽しみ会のない週はあっても、金プリのない週はない！」と、口をそろえて語る。さらに、金プリの指導に加えて、単元が終わるごとに、算数・国語の「くりかえしプリント」で定着を図るなど、徹底した指導がおこなわれる。また、週 1 回、ピックアップされた子どもたちは補習指導（個別指導）を受けている。

そのほか、日常の宿題の出し方も工夫されており、百字帳などの各種ノートはただ量を書くだけでなく、丁寧な字で書くことが要求されている。夏休みの宿題も、昼間、保護者がいない家庭が多いことから、一日分ごとに区切ってあり、子どもが一人でも自主的、計画的に宿題ができるように、教師の手作りのものが準備されている。

また、「テレビを消して家読 10 分！」が毎日の宿題であり、保護者の協力も得て進められている。様々な時間帯の様々な形態の読書活動もあって、その成果は数字に表れている。約 300 人の全校児童が学校図書館で借りる本は、平成 17 年には目標の年間 1 万冊となり、21 年度は 1 万 5 千冊を超えた。「雨の日になったら、本を読んでいるし、テストを早くやってしまった子が『本読んでもいいですか？』って感じで、とりあえず時間が空いたら、もう読んでる。『本読んでもいいよ！』って言ったら、『やったあ！』って言いますから」（研修担当）。こんな中で、読解力が大いに問われる全国学力調査の長文を恐れない子どもが育

っていくのだろう。

以上、見てきたように、E小学校の実践は、学校背景が厳しくとも学力向上を達成できる可能性とその方策について、大きな示唆を我々に与えてくれているのである。

e1 市立 U 中学校

【プロフィール】

所　在　地　兵庫県 e1 市

校区の特徴　県営・市営・公団の団地と一戸建て分譲住宅の中にある学校。就学援助率は高く、毎年 40%を越える。

生　徒　数　300 名程度

教　員　数　20 名程度

生徒の特徴　大半が核家族の生徒。服装や頭髪などもきちんとしており、笑顔で挨拶をする生徒が多い。数年前に「荒れた」片鱗は一見すると見あたらない。クラブ活動もさかんである。不登校生は 20 名程度おり、全体の 5%程度であり、全国平均や県平均が 3%前後であることと比較しても、やや多く、その半数は怠学傾向のある生徒で、児童相談所とも連携しながら取組を進めている。

１．学校の概要

学校は、いわゆる「地元民」は少なく、大半が近隣都市から引っ越してきた住民である。「100 人のうち 10 人しか、今の住所で生まれていない」（研究主任）という状況であり、阪神淡路大震災で被災して転居してきた家庭も少なくない。しかし、「学校に対しては協力的」（校長談）で、PTA 役員を先頭に学校行事等への協力を惜しまず、また登校安全指導に地域住民も協力して立ち番をしてくれている。

市営住宅の入居基準が母子世帯優先であることもあり、全体として経済的困難家庭は 43%（生活保護世帯が７%、就学援助が 35%）と極めて高く、共働き家庭も大半を占めている。ひとり親家庭率が 23%と多いのも特徴的である。こうした数値は近年、ほとんど変化していない。また、校区には児童養護施設があり、今年度は 10 名程度の生徒が通学してきている。このように学校背景は極めて厳しく、10 年前に突然、大きく荒れた。しかし、近年の学校再建の中で、現在は落ち着きを取り戻し、毎週金曜日に訪問するスクールカウンセラーによると、近隣の中学校の中では最も相談事例が少ない「落ち着いた学校」だという。地域での中学校への評価も高く、また経済的理由もあって、小学校卒業後に私立中学校に進学する生徒は数名程度である。高校進学も、私学を併願せずに公立専願を希望する生徒が、他校に比べると多い。

しかしながら、U 中の学力は全国学力調査を見ても、高いレベルを維持している。平成 21 年度国数ＡＢ問題合計の県平均が 63.8、全国平均が 61.7 に対して、U 中は 72.6 と 10 ポイント前後高い。過去 3 年間の文部科学省学力調査において 2 回、県平均値を超えている。

２．スクールバスモデルからみたＵ中学校

では、スクールバスモデルを使って、Ｕ中学校の特徴を整理してみよう。

①気持ちの揃った教職員集団

40 代後半から 50 歳代の教員と若い 20 歳代が多く、30 代がブランクという、いわゆるワイングラスを逆さにした教職員人口ピラミッド型の教職員集団である。「荒れ」の立て直しに陣頭指揮を執ってきた歴代校長・教頭のリーダーシップ、学校全体を細やかにマネージメントしている研究主任などのミドルリーダー層がうまく機能して学校が回っている。毎朝、管理職と教育総務・生徒指導教員等によるリーダーのブリーフィング後、教職員打ち合わせがおこなわれる。また、毎週 1 回の総務会（各学年総務・生徒指導部長・学習部長などのスクールリーダーの会合）における協議と方針提起が図られ、リーダーシップが発揮されるシステムが特徴である。

②戦略的で柔軟な学校運営

一方で、「荒れ」を授業で立て直した実績を継承し、授業公開を義務づけて若い教員の授業力を引き上げようとする取組が盛んだ。頻繁な家庭訪問、生徒との対話、ノート指導、生徒会活動やクラブ活動などにおいても、若手や転勤教員に「荒れの記憶」の継承と克服してきた道筋の共有に努めている。「学校文化を伝えることが大事」（校長先生談）と、意識的につなごうとしている。

教職員のモチベーションを上げるために、次々と国・県・市教委の研究事業を引き受け、自らにタスクをかけて推進していこうという実践力も特筆に値するだろう。教職員の間で、ビジョンの共有が図られ、生徒会執行部の生徒に訊いても、先生に訊いても、「うちの学校は前向きでしょ？」という答えが返ってくる。

③豊かなつながりを生み出す生徒指導

「クラブや行事など、目の前の小さな目標を常に掲げて、子どもたちのエネルギーを集中させてがんばらせ、毎週の学年集会や全校集会では、それを認めて評価する」（校長先生談）、これが「荒れ」を克服してきたキーポイントの一つである。学校訪問したときの全校集会では、クラブで表彰される子どもたちに加えて、学校独自の漢検で名人位を達成した子どもたちも表彰されていた。教室には名人位の表彰状が貼られてあった。

このようにクラブ活動や生徒会活動が盛んで、90％を超える生徒がクラブ活動に参加しており、「土日も練習や試合で忙しくて、生徒も荒れる暇がない」（教頭先生）という。体育大会や文化祭シーズンに学校訪問を重ねたこともあり、生徒会活動や生徒たちの自主活動の活気は強く感じた。「我らの絆　情熱　無限大∞」というテーマで行われた今年の文化祭では、学年合唱に続く全校合唱は圧巻で、保護者の中には涙ぐむ姿も見られた。

そのほか、細かなノート指導や各種の生徒会を中心にした自主活動などを通して、子ど

もと関わる姿勢が強く感じられた。

④全ての子どもの学びを支える学習指導

10 年前の「荒れ」の克服は「分かる授業をする」から始めた。文部科学省学力調査において、3 年間で 2 回も、県平均を上回る好成績だったことは、その取組の成果でもある。「そのために積極的に研究指定を受けて授業改革に取り組む」「相互授業公開を進めてオープンな学級にする」など、授業力アップに取り組む一方で、生徒との関係を細やかに作り直している。自主学習ノート・教科ノート・図書ノートなど教師と生徒の交換ノートが多くあり、家庭学習習慣をつけていく仕掛けがなされている。それらのノートに、教師は生徒のがんばりを認めるメッセージをせっせと書き込んで返却するといった、相互交流的なノートの往還が頻繁になされている。

授業を見る限りにおいて、全体に一斉授業形式が多く、教員の統制が利いた授業が主流である。生徒の授業集中もよい。中には、教師と生徒たちの良好なラポールを感じさせる柔らかな問答が続く授業もある。選択授業の中では、「漢検チャレンジ」や「英語単語テスト」「計算進級」といった基礎学力の定着を目的とした学習も進めている。例えば「漢検チャレンジ」は 10 級から 10 段を経て名人位の称号がもらえ、これは全校朝会で校長先生から表彰される。生徒たちの中にある２極化しがちな学力状況をいかに食い止め、底上げを図るかという戦略が見られる。

また、学校マニフェストともいうべき「学校教育計画」を保護者に配布している。これは、A4 版 80 ページにも及ぶ冊子だが、教育目標や年間計画、教科の年間指導計画などに加え、全教員の「わたしの研究テーマ」が 1 ページずつ掲載されている。例えば、研究テーマには「PDCA サイクルによる授業展開で、『楽しむ体育』と『考える体育』に取り組む～ポートフォリオの作成で学習の振り返りを行う」とか「基本的な知識や能力がしっかりと生徒へ定着するよう体験活動を重視した『実験・観察』に主眼を置いた理科の学習活動」などが掲げられ、授業上の工夫や具体的な実践課題が述べられているのも特徴的だ。

⑤ともに育つ地域・校種間連携

校区の 2 小学校との小中連携が活発である。年間３回の合同研究会では分科会ごとに熱心に研究討議がなされる。子どもたち同士でも、中学校のクラブや授業見学、修学旅行やキャリア教育のプレゼンテーション交流、地域清掃などが盛んである。

また、地域の資源活用も盛んで、キャリア教育の一環として、学園都市に近い地の利を活かして６大学を探訪させ、大学講義見学や施設見学、学生食堂利用などを体験させる。結果としてＵ中学校生の大学・短大進学希望者は 71.4％と高率である。また「プレ親学習」では近隣の幼稚園や保育所などで子育て体験も進め、積極的な地域連携を図っている。

⑥双方向的な家庭との関わり

大半が核家族で、共働き家庭であり、ひとり親家庭率も高いＵ中学校では、家庭連携は大きな課題である。「保護者による学校教育活動評価アンケート」を見る限り、学校への信頼感は強く、近年、学校評価は大きく上昇している。例えば、学校の学力向上の取組について、「基礎基本」「英数の少人数指導」「評価」「進路指導」などの項目において、4、5 年前の評価より 10 ポイントから 20 数ポイントアップもの大幅な肯定的評価を得ている。学力保障をとおして、学校づくりをしたいという学校側のメッセージは、保護者に好感をもって伝わっている。また、「子どもは学校へ行くのが楽しいと言っている」という項目や「学校行事や部活動に積極的に参加している」といった項目では、90％前後の評価となっており、子どもが学校生活を楽しんでいる姿が、保護者にとって何よりの学校への好感と信頼を与えている。

その背景には、きめ細かな保護者向け情報発信（学校通信・学級通信はもちろんのこと、各担当からの通信、ホームページの充実、前述した学校マニフェストの配布など）、頻繁な家庭訪問、学校行事への参加呼びかけなどが挙げられる。保護者の学校評価でも「PTA 活動が盛ん」に 87％が肯定しているように、共働き家庭ながら、PTA 活動を活発化し、学校との協働関係を結んでいることも大きい。

⑦安心して学べる学校環境

広々とした敷地に、広いグランドと校舎を有するＵ中学校であるが、教室や廊下には、様々な掲示物が張り出されている。今の課題を明示するスローガンや目標を示すもの、学習成果や学校行事をまとめたもの、大きな表彰状から学級の名人位の表彰状まで、きちんと整理されて貼りだされている。廊下や教室の掲示を見て回るだけで、この学校の「今」がよく分かる。生徒たちの目の前の課題を明確にし、達成できたことを評価する教師の意図も、よく伝わってくる。

⑧前向きで活動的な学校文化

Ｕ中は、10 年前の「荒れ」の克服を、授業の立て直しと生徒集団の自主活動から始めた。教職員集団は自らにタスクをかけて、次々と研究指定を引き受けて、志気を高めていく。

この教職員の Can Do 文化が、Ｕ中のけん引力であったことは間違いないだろう。

また、詳しくは後述するが、「子どものいるところに教師もいよう」という学校文化が根付いている。子どもに寄り添い、コミュニケーションをとりながら、かつ生徒指導の死角を作らないという教師―生徒関係も特徴と言えるだろう。「荒れ」克服の教訓は、ここにも生きている。

３．成功の３つのポイント

Ｕ中学校が好成績をおさめている要因として、次の 3 つのポイントが挙げられよう。

１）「子どものいるところに教師もいよう」～前向きな生徒指導（③）

「周囲とけっして協調しようとしない生徒や他人を受け入れない固くて狭い自我を持つ生徒が目立つ。また属する集団内において対人関係を苦手とする生徒も増えている。」これは、「平成 20 年度学校報告書」の一部である。決して楽観できる子どもたちの状況ではない。当時、転勤してきた先生が「この学校の子たちの表情が暗い」と、初印象を語られたそうだ。既に述べた厳しい家庭的背景ゆえに、夜遅くまで働く保護者も多く、家族で夕食を共にしない「孤食」の子どもたちも多い。「『表情が暗い』のは、あまりかまってもらえないことも一因だろう」と、教頭先生は語っている。

こうした生徒たちの生活の安定を図る積極的な生徒指導がなされている。「子どものいるところに教師もいよう」という学校文化は、e1 市の他の学校背景の厳しい地域でも耳にしてきたが、Ｕ中学校も同様である。現在は、「生徒管理」を強化するといった意味合いよりはむしろ、生徒とのコミュニケーションと相互理解を意図している。各階の廊下の隅には椅子と机が 1 対置かれてあり、休み時間になると次の時間が空いている教師が座って生徒たちと談笑したり、自主学習ノートの書き込みをしたりしている。教師の負担は大きいと思われるが、「『やればよかった』ではなく、『やっておいてよかった』と言えるように、システム化してきた。この取組で、子どもの人間関係がよく見えてきた」と、「荒れた」学校建て直しの中心を担ってきた研究主任の先生は語る。家庭訪問も市内中学校の中では多く、「何かあれば電話で済ませずに、家庭訪問する」ことが教師文化となっている。

「子どものいるところ」は休み時間ばかりではない。クラブや生徒会活動などで、子どもたちの「荒れる」負のエネルギーではなく、正のエネルギーに収束させようと指導していることも大きい。既に述べたクラブ参加率 90％以上という実態で、朝練習・放課後練習のみならず土日をいとわぬクラブ指導、次々と進められる生徒会活動などがうまくかみ合って、教職員と子どもたちの良好なラポールを形成している。当然のことながらこれが、授業風景にも反映していて、集中した授業につながっている。

生徒会執行部にＵ中学校の特徴を尋ねたところ、口々に「挨拶ができる」「ノリがいい」「仲良しで明るい」「先生とも仲がいい」「部活がさかん」「Ｙ先生の授業はおもしろいから、

ぜひ見てください」「うちのまわりの学校はみんな荒れてるけど、ここだけは平和」と、学校や教師に愛着した意見が多く出たのもうなずける。

２）リーダーシップと教職員集団の同僚性（①）

毎朝、おこなわれる管理職とミドルリーダーのブリーフィング、ミドルリーダー会議である総務会（週 1 回）で状況把握と方針提起など、リーダーシップが如何なく発揮されている。「荒れ」から学校再建のために、①社会力（授業ルールを主に）②人間関係形成能力（宿泊を伴う野外活動、福祉体験学習や進路学習セミナー、体育会や合唱コンクールで対人関係を築き、生徒リーダーを育成）という方針を掲げて、教職員集団で一致した取組を推進してきた。今も、「分かる授業」と生徒の自主活動を中心に据えて、次々と研究事業を引き込み、教師のモチベーションを上げ、人的・財政的支援を行政から取り付けというふうに、リーダーの経営戦略がしっかりしていることが何より大きいと考える。

「貯金を使い果たした学校は、再び荒れます」　これは教頭先生の言葉だが、まさに「荒れ」から生還し学校再建を果たした後も、歩みを止めずに進まなければ、という意思が伝わってくる。「かつて荒れていたときは、教師は一人一人が授業を抱え込んでしまっていました。今は、『抱え込むな！オープンにしよう』ということで、相互授業参観も盛ん」（研究主任）だという。

全校朝会を観察しているときに、遅刻してくる生徒がいると、すかさず教師がそっとそばに行き、話を聞いた後、学級の列に戻していた。学年が違っても同じ動きがみられた。小さなことだが、生徒指導の際の細やかな統一ぶりを感じるシーンだった。「先生方は良く家庭訪問されますし、子どもの家庭の事情も良く分かっています。フットワークは軽いですよ。担任任せにせずに、全て学年であたっています。」と語る校長先生の言葉からも、教職員集団の同僚性が読み取れる。

３）小中連携の確かさ（⑤）

中学校区内の 3 校での相互授業参観や中学校からの小学校への出前授業などが盛んに進められているほか、夏季休業中など年３回の小中合同研修会を持っている。分科会形式でキャリア教育・道徳教育・分かる授業をテーマに、交流をしている。特に道路一つを隔てて向かい合うＵ小との連携は密である。この小学校もまた毎年県平均を超える学力調査結果を出しており、学校背景の厳しい校区で小中そろって好成績というのは、兵庫県でも極めて珍しい。今年の小中連携事業のテーマは「小中の枠組みを越えて、教職員相互の効果的な指導のあり方を探る」であり、相互に公開授業をすることで、小中の授業の継続性を追求している。

Ｕ小とＵ中の授業の特徴は一言で言えば、「協同的でコミュニカティブな授業展開の小学校」と「教師の統制の利いた一斉授業中心の中学校」という構図が見えてくる。Ｕ小では、「発表ボード」（マグネット型のホワイトボードパネル）を使った協同的な授業が盛んに行

われており、子どもたちはグループで話し合ったことをボードに書き込んで黒板に掲示し、グループ相互に意見交換しあう授業が行われていた。こうした協同的な授業の組み立てが、中学校でどう引き継がれてかが課題であろう。U中生の学校評価アンケートでも、「自分の考えをまとめたり、発表する」項目の授業評価は 41%と低い。一人で考える・ペアで考える・小集団で考える→発表・相互討論しあうなどのラーニングコミュニティづくりも、今後の研究課題ではないかと考える。授業開をはじめとする小中連携が進んでいる中学校区だからこそ、実現可能な目標だと考える。

＜鳥取＞

f1 町立 F 小学校

【プロフィール】

所　在　地　鳥取県 f 1 町

校区の特徴　第 1 次産業を生業としている家庭が多い。

児　童　数　80 名程度

教　員　数　20 名程度

児童の特徴　生活の中にある差別に気づき、差別を許さず差別をなくしていこうとする態度を育てる人権尊重の教育を受けとめ、大半の児童は前向きに生活をしている。しかし、課題を抱えた児童も多く、教師のきめ細かで丁寧な指導が求められている。

１．学校の概要

調査対象の町は、農業、漁業、商工業を生業としている町である。

現教育長は町全体の教育に対し、強いリーダーシップを発揮している。まず、教育長はじめ教育委員、指導主事が年 2 回の学校計画訪問を実施している。6 月頃、学校長の経営方針を聞いたり、授業参観をしたりする。その際、保護者を交えた教育懇談会も開催される。11 月には、その進捗状況をヒアリングしている。また月 1 回、町内校長会を行い、その場で、校長が持ち回りで自校の教育についてスピーチをすることになっている。学校の一斉授業公開も年 2 回義務づけられており、その時は保護者だけでなく町内の人々にも広く公開している。

このように、町の全ての学校が共通理解し相互に交流しているので、お互いに切磋琢磨してよりよい教育活動を展開していこうという気風が見られた。教育委員会も学校の実情を把握しているので適切な指導や支援を与えることが出来るようである。私たちの訪問時に教育長も顔を出されたが、F 小学校の教師や子どものことをよく知っているので驚いた。

F 小学校は、全学年単学級の規模の小さな学校で、周りを田畑に囲まれている。小学校の隣には公民館があり、地域と学校の連携が取りやすい環境である。公民館長は元保護者で学校の実情について非常に詳しい。毎朝、児童の登校指導をしているとのことである。私たちの調査訪問時にも「〇〇さんは、今日は元気がなさそうだったよ」と校長に語っていた。登校時の安全確保だけでなく個々の児童の状況までも把握し、必要な情報を学校に伝えている。地域に学校が守られているという感じを受けた。公民館長だけでなく PTA 会長も F 小学校卒業生であった。「差別は厳しい、自分らは学校に育ててもらった」と開口一番に語って下さった。地域・保護者・学校の信頼関係が強く、情報の流れもスムーズでお互いに協力し合って子どもを育てているという感じであった。

鳥取県の平成22年度の全国学力調査(小学校)の結果は次のようになっている。国語A85.8（全国平均83.3)、国語B81.0（同77.8)、算数A76.5（同74.2)、算数B51.4（同49.3）であり、概ね全国平均より高い結果を出していると言える。鳥取県は平成20年に市町村毎の結果を公表している。それを見ると、調査した町は、国語A71.1（県平均68.4)、国語B54.6（同51.7)、算数A81.1（同73.3)、算数B56.8（同52.2）となっており、国語・算数共に県全体より高い傾向にあり、4 教科の平均（65. 9）で市町村全体を比較すると市町村の中でも 2 位の成績を収めえいる。このように、県の中でも教育に力を入れている市町村の一つであると言えよう。

F 小学校には、就学援助率が 20%以上 30%未満となっており生活条件の厳しさを抱えた子どもが多数在籍する学校である。給食費や学級費を支払えない家庭も多い。しかし、学校は地域・保護者からの信頼と期待を受け、様々な取組をしている。

F 小学校の玄関に大きく「みんな輪になって」という標語が貼られている。この言葉は、これまでの歴史的な背景の中でこの言葉のようにして地域を築き上げたことを表していると述べられていた。この意識は10年前に起こった鳥取西部地震で再認識され、今もなお大事にされている。

校舎はオープンスペースとなっており、広い廊下には「ヒントコーナー」と書かれた机といすを置いていて、分かりにくい子への個別指導を行うという工夫がされていた。また、ほとんどの教室にプロジェクターが配置され視覚に訴えた授業の工夫もなされていた。国語の教科書を前のスクリーン（ホワイトボードの活用）に拡大して写し、子どもたちが学んでいる場所が一目で分かるようにしたり、子どもの意見を書き込んだりするなどの工夫を凝らしていた。6 年生の教室では、宮沢賢治と彼の作品を関係づけて読むことによって、作品に込められた賢治の思いを語るという設定で、子ども一人一人が友達と異なった作品を読み自分の考えを書いていた。途中で、学習方法を理解できにくい児童のために早目にできた子どものノートをプロジェクターに写し、子どもに説明をさせていた。終始、しっとりとした授業で深く学ぶ子どもの姿が見られた。

また、算数を中心に、加配教員や教頭先生、教務主任の先生が担任教師とチィームティーチングを組んで個に応じたきめ細かな指導を実施していた。先ほどの「ヒントコーナー」もチィームティーチングを組んだ二人目の教師が指導にあたるとのことである。

教室の背面等の活用もよくされており、子どもの学習状況が分かりやすく掲示されたり、月に 1 回、ノート展を開催し掲示したりするなど教室環境も学習に適したものになるような工夫がなされていた。

また、5年生がF保育園と月2回交流したり、6年生が修学旅行に進路先の中学校を同じくする 4 つの小学校と一緒に修学旅行に行ったり、教師が夏休みに保育園への体験研修に行ったりするなど縦横のつながりを大事にし、人とのつながりを大事にした教育が展開されていた。

補足であるが、私たちが調査に行った時には校長・教頭が率先して案内して下さり、2度目の訪問時には教育長自ら場を共有して下さった。帰りには校長・教頭先生が駅まで送って下さるなど、学校が今回の調査対象となったことを心から喜び、誇りに思っている様子が感じられた。

２．スクールバスモデルからみたＦ小学校

スクールバスモデルの８つの要素ごとに、Ｆ小学校の特徴を簡潔に整理してみる。

①職員集団

最初に訪問した時、子どもたちが学年毎に順番に運動場を走っていた。短い間だったが教師も共に運動場にいた。これは、1年中毎日継続しているとのことである。また、教頭・教務主任・進路指導主事も学級担任とチィームティーチングを組み、きめ細かな学習指導を行っていた。頻繁な家庭訪問、全員 1 回はする授業研究、毎日子どもに課す全学年共通の４つの宿題など、「子どもにとっていいことは何でもしよう」という機運が感じられた。

生活の厳しい地域の子どもたちが多いので、学校教職員が一致して行動していかないと子どもの健やかな成長は望めないという自覚が感じられた。

②学校運営

キーワードは、連携であろう。学校の玄関に「みんな輪になって」と貼られた標語のごとくである。まず、地域・保護者との連携がある。詳しくは後述するが、「ふるさとと言えば、Ｆ小学校です」と PTA 会長が語るほど、つながりが強い。学校もよくわきまえていて、期待に応えるように様々な努力をしている。次にあるのが、保育園・小学校・中学校の縦横の連携である。夏休みに小学校・中学校の先生方は保育園体験研修をし、幼児の状況を観察している。同じ中学校区の 4 つの小学校 6 年生が修学旅行に一緒に行き、寝食を共にしている。実施のために、教師たちも数回の打ち合わせをするなど連携が密になっている。

最後に、教育委員会とのパイプの太さである。先に書いたように教育長はじめ指導主事は学校の子どもたちや教師のことをよく知っている。校長は教育長のことを「教育長の危機管理はすごい。とにかく最悪のことを考えている。でないと対応が後手に回る」と褒めていた。情報をいち早く手に入れ、必要な手だてを適切に取ることへの信頼である。

このように、学校・地域・保護者・保育園や中学校・他の小学校などが子どもを巡る輪を形成し、輪の一員として自分の役割を果たしているという感じであった。

それだけでなく、校長は組織の長として一人一人の教職員に対してもきめ細かな配慮を示し、学校という組織のまとまりを大切にしていた。

③生徒指導

とにかく、きめ細かである。子どもの状況を保育園の時から把握し、特別な対応の必要な子どもを早期に見つけ出し、必要な手だてを講じるように配慮している。「現５年生はい

ろいろな課題を抱えた児童が多いので」と家庭訪問を頻繁に行い、家庭と連携して子どもを見守るようにしたり、チィームティーチングを重点的に実施したりするなど、問題が起こってからと言うより、早めに子どもの状況を把握できるようにするなど、問題行動が起きないような手だてを先々に講じているようである。

④学習指導

授業では、先に記述したように、学校に1台しかない「電子黒板」と、5台の「プロジェクター」とホワイトボードが効果的に活用されていた。このホワイトボードをスクリーンにみなすということは、学習意欲を高めるために、教員同士の話し合いで生じた成果であるとのことである。国語の授業では、状況把握のために授業中に動画を見せるなど、視覚に訴え全員の児童を学習に集中させる工夫がなされていた。

また、算数の授業などでも自分の考えを友達に自力で説明させていた。授業の中で子どもが説明する機会を取り、説明力の育成を重視していた。ノート指導についても「ノートの約束」を定め、学びの軌跡を確認できるよう工夫されていた。

このように、様々な工夫をすることによって子どもが学習に集中し、学力がつく工夫がなされていることが伺えた。

⑤地域・校種間連携

小学校の隣に公民館がある。公民館長さんは、F小学校の卒業生である。毎朝子どもの登校時に校門に立ち、子どもへの挨拶や安全指導をしている。校門に立つだけでなく、子どもの様子もよく把握していて、子ども一人一人に目を配っている。

毎年、夏休みに地域と学校の共催で相撲大会が行われる。この相撲大会は、1年生から6年生まで参加する65年間続いている伝統行事で、地域の人々も応援に来るとのことである、また、毎年 9 月には公民館祭りが行われ、保育園児から小学校、大人までが一緒になって歌や踊りなどの練習をして出演するとのことである。

このように、地域と学校が一体になって子どもを見守り育てるという気風が感じられた。

⑥家庭とのつながり

PTA総会への出席率はほぼ100％を誇るほど、保護者の学校への期待が高く、かつ協力的である。現在の 5 年生は課題を抱えた子が多いので、ほとんど毎日のように学級担任が家庭訪問をしている。問題行動を起こした時だけでなく、「今日、〇〇ができました。褒めてやって下さい」と子どものよさも訪問時に伝えるなど、学校と家庭とで共に子どもの成長を願っているという姿勢を保護者に伝えている。

また、「計算」「漢字」「音読」「日記」の 4 点セットを全学年、毎日宿題に出しており、月に1回「家庭学習強化週間」も設けるなど、家庭学習の習慣化に力を入れている。

これらの成果で、学校運営や教育実践に対する保護者の信頼は高く「F小学校の先生はよ

くやってくれている」と保護者は評価していた。

⑦学校環境

オープンスペースの学校である。廊下が広く、「ヒントコーナー」として活用するなど子どもが出入りしやすい空間となっていた。教室の背面には学習の軌跡が分かるような掲示の工夫がなされていた。また、洗面所には児童全員のブラシとコップが並んでおり、虫歯が多いという子どもたちの実情に対して、学校として対応をしていた。

⑧学校文化

給食費や学級費を払えないような家庭が多いので、校長が「お金のことに関して担任が出ないようにしている。担任と保護者の間に感情のすれ違いがあっては子どもが可哀想」と語るほど、何事に対しても、子どもを中心に考えていた。先の家庭訪問にもあるように、子どもの良さを伸ばし、自尊感情を高めるように配慮していた。

このように、経済的に困難を抱えた子どもたちも「安心して学ぶことが出来る」そんな学校でありたいという雰囲気の感じられる学校であった。来校者である私たちへの対応も親切で申し訳ないくらい丁寧であった。

３．成功の３つのポイント

1）学校を巡る人的な太いパイプの存在（⑨）

まず、隣接する公民館長が毎朝児童の登校指導を行い、児童の状況を把握し気になったことがあると学校へ連絡するなど、地域と共に児童の安全を確保している。毎年体育館で開かれるイベントの地域毎の出し物に地域の人たちと共に児童が参加し、地域と学校の協働が継続されている。5 年生が月に 2 回地域の保育園を訪問したり、近隣の 6 年生との合同により修学旅行を実施したりするなど縦と横の学校間連携も密である。

また、教育長を先頭とする町教育委員会と学校との連携も密で、教育長は全員とはいえないが児童や教師の状況をよく把握している。

2)「学校に育ててもらった」というゆるぎない伝統（⑨）

PTA 会長は「水泳の全国大会参加のために夜遅くまで指導してもらいました」「誇りをもてるものをつくってもらいました」「粘り強くすることを教えてもらいました」と学校への強い信頼の思いを言葉にした。PTA 行事には 100％の保護者が参加することにも表れているが「学校が子どもを育ててくれる」という思いは強く、代々継続されている。

3）学力向上への積極的で多様な取組（④）

全ての教室にプロジェクターとスクリーンが配置され、それを積極的に活用した授業がなされている。加配教員だけでなく教務主任・教頭も参加したチームティーチングが実施され、算数を中心としたきめの細かな授業を行っている。また、授業力向上のために全教員が授業研究を実施し学習指導力向上に取り組んでいる。

全学年児童に対する「漢字」「計算」「日記」「音読」の宿題の徹底や年 2 回家庭学習強化月間を実施したり、週 2 回の「脳トレ学習」を実施したりするなど基礎学力向上に取り組んでいる。

f2 市立 V 中学校

【プロフィール】
所　在　地　鳥取県 f2 市
校区の特徴　山に挟まれた山間の町である。校区には、伝統的な行事がある。
生　徒　数　90 名程度
教　員　数　10 名程度
生徒の特徴　山間に位置する町で、昔から学問を身に付けることが重要な生き抜く術であるとの共通理解がなされ、生徒は総じて真面目で落ち着いている。

１．学校の概要

V 中学校は、冬にもなると運動場が雪で埋まりほとんど使えなくなり、生徒たちは体育館での運動を余儀なくされる。積雪が多くなると、地域の人が自主的に除雪車を出して通学路や校庭を除雪してくれるということである。町の人々の学校教育に対する期待は高く、f2 市への合併前の町議会では、中学校から高校の進学状況が話題になるくらい生徒の学力向上への関心が高い。

また、授業力の高い教師が配置されている。教師数が少ない分、教師一人一人の指導力が生徒の学力に影響を与えると指導主事は見ているようであった。実際に、授業参観をしたが、二人の教師の授業力にはすばらしいものがあった。まず、国語教師は V 中学校の教頭であり、中 3 の国語を受け持っている。授業のはじめは漢字指導からであった。生徒は黙ってノートに漢字を書いていた。教師は生徒の周りを回りながらノートにシールを貼っていた。次に、1 枚の写真を見せて生徒の想像力を働かせ、言語化させていた。最後にその 1 枚の写真の題を漢字一文字で考えさせ、その理由を説明させるというものであった。生徒は終始学習に集中し、教師の問いかけに真摯に答えていた。数学の教師は座標の学習をしていた。授業の始めに自分たちの席の場所の表し方を言わせた後に、一般的な座標について学んでいた。その後、教師が口頭で座標点を言い、生徒がプリントに座標点を書き込んでいった。教師はかなりの速さで座標点を言っていたが、生徒は聞き返すこともなく書き込み、線で結んでいっていた。班で確認をするように指示されると勢いよく見合わせたり話し合ったりしていた。この作業の集中力は見事なものであった。以上のように、子どもの学習状況を丁寧に把握はするが、無駄のないテンポのいい授業展開であった。

その他にも、学校として、朝の読書、基礎学力定着テストの実施や提出物の徹底に取り組んでいた。基礎学力定着テストは、中間テストと期末テストの間に小学校 5 年生くらいの漢字や計算をやるものである。宿題などの提出物の徹底は、全学年一致して取り組んでおり、朝になると忘れた言い訳をするために生徒が職員室の前に並ぶくらいであるということである。合唱にも力を入れており、生徒の歌声は近隣でも評判で、町のイベントにも

参加し賞賛を得るほどだそうだ。これは、合唱指導に長けた教師の存在が大きいとのことである。実際に授業を参観したが、生徒の自信に満ちた生き生きとした歌声に圧倒された。

鳥取県の平成22年度の全国学力調査(中学校)の結果は次のようになっている。国語A77.1（全国平均75.1)、国語B67.1（同65.1)、数学A66.1（同64.6)、数学B44.5（同43.3）であり、概ね全国平均より高い結果を出していると言える。鳥取県は平成20年に市町村毎の結果を公表している。それを見ると、f2市は、国語A76.2、国語B62.1、数学A65.5、数学B52.0となっており、県全体（4市14町1村）の9位の成績を収めており、県全体の中間的な位置を占めている。この時（平成20年）のf2市の4教科の平均が63.9であるのに対し、V中学校の4教科平均は67.7となっており、f2市の中では高い学力を示しているといえる。

２．スクールバスモデルからみたV中学校

スクールバスモデルの８つの要素ごとに、V中学校の特徴を簡潔に整理してみる。

①職員集団

校長は、V中学校で教頭経験もあり、地域のことや地域住民に関することに詳しく、人望のある人物である。生徒一人一人を主人公にした学校にしたいとの思いを強く感じた。ほとんど全ての生徒の名前と顔を覚えており、校長通信で一人一人の生徒の状況を家庭に伝えている。校長の言動には教師たちへの信頼もにじみ出ていた。

また、全員が授業公開をするなど授業力向上への意欲も高く、授業力の高いリーダーとなる教師を中心に切磋琢磨しているとのことである。特に、V中学校の生徒は自分の言葉で語るのが不得意なので、「自分の考えを言う」ことを重視した言語活動の充実に取り組んでいる。全学級の授業を参観したが、授業の中で生徒の発言を促す場面を見ることが多かった。

②学校運営

学校運営方針は、知・徳・体の調和のとれた生徒の育成となっている。しかし、PTA会長の「躾は家庭で、勉強は学校で」という言葉に表れているように、学校は、生徒の学力向上に対する熱意が強く、家庭学習の徹底、教師の授業力向上、読書習慣の形成に熱意を持って取り組んでいる。

また、小規模校なので遠足や運動会などに縦割り活動を行い、生徒の人間関係の広がりや縦の関係による思い遣りや責任感の育成などにも力を入れている。

③生徒指導

提出物を徹底的に出させる。そのためには個人名も明らかにし取りこぼしのないように取り組んでいる。生徒も教師の姿勢に対し、自分が忘れた場合は先に教師に事情を申告するなど提出に対する意識は高い。また、できていなかった場合はその日のうちに学校で宿題などを済ませるようにするとのことである。

V 中学校の生徒はほとんど携帯電話を持っていない。地域の人々は生徒の顔をよく知っており、塾もほとんどなく校区に安全性が保たれているために携帯電話は必要ないことにもよるが、地域・家庭が生徒には携帯電話は必要ないという認識で一致していることによるものらしい。大人の価値観が生徒の持ち物にも影響を与えているのである。これは、一つの例であるが、全体として大人の考え方が子どもに浸透しているようである。

また、学校で問題行動を起こし、学校から家庭に連絡が入ると、地域の方からも保護者に指導が入るほど地域の関わりが大きい。地域の中に家庭と学校がすっぽり入っており、全体で生徒を見守り指導している感があった。

④学習指導

近年、基本的な学力低下を防ぐために、勉強を全くしない時期を作らないという目的で、定期テストの合間に国語（漢字）と数学の基礎学力定着テストを実施し始めた。今年度は 3 年目で、現在は全教科実施している。国語では小学校 5 年生で習う漢字リストから 50 問出題し、40 点以上取れたら 6 年生のものを実施する。それもクリアしたら、漢検リストから教師が問題を作成し、次々と進む形態にしている。数学も同様に小学校時の問題から手掛けている。

このような基礎学力向上のための取組だけでなく、先に述べたように、全教師が授業公開をしている。前校長が小学校出身の方で、小学校のような研究授業をするきっかけとなり現在に至っている。教師は授業を見られることに抵抗がないようであった。現在は、質問紙調査で課題として浮かび上がった自己表現の弱さをなくすために、言語活動に力を入れて研究を進めている。

⑤地域・校種間連携

ほとんどの家庭が 3 世代同居であり、核家族は少ない。家に帰っても誰かがいるという環境で、年寄りが口やかましく言うなど昔ながらの地域の教育力が残っているようである。V 地区は、中心部が非農家・商家の世帯であり、周辺が農林業を主体とした世帯である。中でも町の中心部の商家の人々が教育熱心で、周辺の人々がそれを見習う形で教育を大事にしてきた歴史的背景があるとのことである。また、合併前の町議会が中学校の進路先についても関心を示し議題になったこともある。その位、教育に力を入れている土地柄である。地域は生徒一人一人をよく見ている。

⑥家庭とのつながり

PTA 会長が「躾は家で、勉強は学校で」とそれぞれの責任分担を明確に捉えていると語るほど、家庭でも躾を重視している。家庭の教育力が存在している地域である。子どもたちは素直で落ち着いている。

f2 市の中学校では学期に 1 回、年に 3 回、仕事のある保護者も見に来られるように土曜参観が行われる。V 中学校も同様であるが、その出席率は 8 割となり、これほど出席率の高い中学校は f2 市では他にないとのことである。中でも、出席者の 3 分の 1 は父親である。父親を含めた保護者が、生徒の学校での状況や教師の頑張りを見聞きする機会が多いので、「先生方の目が行き届いている」、「学校の先生方がよく頑張ってくださる」と PTA 会長が語るように、学校の情報が共有され、更なる信頼となっていくようである。

⑦学校環境

近くに、清流のほとりにある静かなたたずまいの学校であった。裏手には山が見え、「このような所に居ると落ち着くだろうなあ」と思わせる環境である。冬にもなると除雪をしないといけないほどの積雪になるとのことである。

学校もこれといったものがある訳ではないが、しっとりと落ち着いている。校内を回っている時も、清掃が行き届いており、生徒のざわめきが聞こえることはなかった。

⑧学校文化

校長が生徒一人一人のことを通信で家庭に知らせ、保護者も参観日に子どもの学習状況を見、子どもの様子を学校と家庭で共有し、共に育てていくという風土がある。特に、地域には子どもを守る・子どもに教育をつけるという思いが強く、学校がそれに呼応する形で取り組んでいる。

全生徒の提出物の徹底や基礎定着学力テスト、全教師の授業力向上の取組など一人の取りこぼしもないように丁寧な教育実践をしている。学校で学力を向上させるという伝統的な学校文化を守る努力を感じた訪問であった。

３．成功の３つのポイント

1）地域・保護者の学校教育への高い期待（⑨）

昔から教育を大事にしてきた歴史的背景があり、子どもに教育をつけることへの高い期待が町全体にある。PTA 会長が「躾は家庭で、勉強は学校で」と言明するほど学校への高い期待感と同時に親の子育てへの責任感が強い。子どもの学校での様子をしっかり把握し、責任を持って躾をし、しっかり勉強をさせようという親の思いが表れている。それが、授業参観への高い出席率にもなって表れている。また、教育に対する関心も高く、子どもに学力をつけることへの願いを町全体で共有していることが感じられた。学校もその期待に応

え、教師の力を高めると共に生徒一人一人を大事にした教育活動を展開している。

2）授業力向上への教員の意識の高さ（④）

学習指導力の高い教師が存在している。言語活動育成を重視した授業研究も全教師が行うなど全教師一体となって生徒が集中して学ぶ時間を重視している。また、音楽教師の合唱指導力も高く、地域のイベントなどへ生徒が参加し称賛されることにより、生徒の自尊感情育成に寄与している。

3）提出物は必ず出させるという徹底した取組（③）

忘れた場合は事前に生徒が申告し、その日のうちに宿題をやりきらせるということを全教師が一致して同一歩調で指導しており、忘れた場合には生徒が職員室に理由説明に来ると言う。宿題だけでなく、他の提出物も徹底されている。

＜香川＞

g1 市立 G 小学校

【プロフィール】

所　在　地　香川県 g1 市

校区の特徴　急速に市街化が進み、マンションの新設もあり、児童数が増加傾向にある。

児　童　数　900 名程度

教　員　数　40 名程度

児童の特徴　比較的安定した家庭背景を持つ児童が多いが、家庭背景の厳しい児童も一定程度在籍する。

１　学校の概要

G 小学校は、２０００人を超える児童が在籍した時期もある。現在も９００人近い児童が通っている。校区は、古くからの住宅地と新しくマンションが建設される地域からなっている。一部ではあるが田んぼも残り、自然も豊かである。新設マンションへの入居者を中心に、転勤者が多く、全校生に占める割合も年々増加する傾向にあるが、保護者の教育に対する関心は高く、古くから校区に住まれている方も転勤された方も総じて、学校に対して、協力的である。教職員は年齢的にはベテラン教員が多いが、近年、新採の教員が増加しつつある。

児童たちは、二つの中学校に半分程度ずつ進学していく。それぞれの中学校と連携をとっているが、連携を深める上で大変なところがある。設備面では、耐震工事が一段落したものの、防水工事、トイレ工事などが続いて行われている。児童数が 900 名と多いが、運動場がその割に手狭で、しかも、校舎と運動場の間に市道が通る構造となっている。朝の登校指導の際、教頭先生と校区を一回りした。学校周辺は交通量が多いが、地域ボランティアを中心に、交通安全指導体制がとられるとともに、校長先生を中心に率先して、教員もパトロールを行っている。完全登校時間の 8 時 5 分を過ぎても、校門は完全に閉めず、主幹教諭が遅れてくる児童に声をかけながら迎え入れる体制がとられている。

G 小学校の特徴は、きめ細かな児童理解に基づき、学校の様々な取組を実践していることが第一にあげられる。そのために、学校の先生方は空き時間をほとんど作らず、子どもたちに関わる体制を、自ら選択してとっている。そして、学校の様々な取組を家庭と共有すべく、道徳通信など、工夫された情報が数多く発信されている。その結果、家庭、地域も学校の取組に協力的で、子どもたちが安心して通える学校になっている。

もう一つの特徴が、学校の取組の核となっている人権・同和教育の実践である。子どもたちが人権の大切さを理解し、一人一人の人権を大切にできる実践が行われている。G 小学校に最初に連絡させていただいたとき、校長先生は「本校は学力向上に向け、特別な取組

をしているわけではない。ただ、人権教育を核にして、子どもたち一人一人を大切にする実践を行っているだけです」という趣旨のことを語られた。訪問日に実施された 6 年の研究授業では、子どもたちが部落差別の問題を自分のことのように考え、意見を交流する場を見させてもらった。6 年間の積み重ねの中で、子どもたちに確かな人権感覚が育っていると感じさせる授業であった。これらの取組の結果として、学力の好成績になっていると考えられる。

２．スクールバスモデルからみたＧ小学校

ここでは、スクールバスモデルの８つの要素ごとに、Ｇ小学校の特徴を簡潔に整理してみたい。

①教職員集団

Ｇ小学校は４０名近い教職員が配置されているが、全体として、まとまりが感じられた。その背景として、ベテラン教員が多く配置されていること、教職員全体で子どもを見守る学校運営が実践されていることがあげられる。観察した日に校内研修会が開かれたが、小グループに分かれて議論を行い、その後全体で交流する機会が設定され、活発な意見交換が行われた。また、課題を抱える児童の対応に、空き時間の教員が関わる体制をとることについて、全教職員が話し合い、そのような結論が出たと伺った。

②学校運営

ベテラン教員が多いこともあり、それぞれが自ら考えて、動ける体制がとられている。一方、学校評価の結果、県、全国の学習状況調査の結果、体力テストの結果などを分析し、学校の課題解決に向けた取組がされている。例えば、学校評価の結果、道徳の取組に対する保護者の理解が十分でない結果を踏まえ、道徳主任が、道徳通信を発信する、道徳ノートを作成し、それを家庭で保護者に見てもらい、メッセージを書いてもらうといった取組を進め、一定の改善がみられた。体力に関しても、子どもたちの２極化の実態を踏まえ、体育の授業の改善などが図られていた。

学校全体の運営について、管理職を中心に、課題の焦点化がはかられるが、その改善については、教職員全体で合意しながら進められている。先生方も、問題が発生しないために必要なことを意識し、改善策が出されるため、管理職が考える改善の方向性に沿ったものに、結果としてなっているとのことだった。

③生徒指導

Ｇ小学校において、もっとも重視されているのが、人権尊重の精神に徹した人権教育である。子どもたち一人一人が確かな人権感覚を持ち、相互に高めあいながら、学ぶことがで

きるように取組が進められている。そのため、特に課題を持つ子どもについて、学校全体としてどのように関わっていけばよいか、定期的に交流するとともに、様々な教員が関わる体制がとられている。その結果、子どもたちは落ち着いて学ぶことが可能となり、学力の好結果につながっていると考えられる。

また、学校生活に適応できなくなった子どもたちに対しても、温かい視線で関わるようにしている。例えば、朝の登校時間が終了した後も、正門は閉めずに、遅れてくる子どもが学校に入りやすいように配慮されている。安全のため、主幹教諭が校門近くに立ち、遅れてくる子どもに関わることがされていた。これは、中学の生徒指導主事の関わりに近い。主幹教諭がそうした子どもたちのセーフティネットの機能を果たしつつ、学級担任と連携しながら対応していることが特徴の一つとしてあげられる。

また、生徒指導速報を出し、不審者情報、保護者からの声などを迅速に伝達し、周知徹底することも行われている。

④学習指導

G 小学校核となる学習は、人権総合の取組である。6 年間人権に関して継続的に学び、6 年の部落問題学習へとつなげる取組である。見学させてもらった 6 年の授業では、差別に立ち向かった女性の話を子どもたちが体全身で聞いている姿が印象的であった。人権総合としての積み重ねと確かな定着を感じさせる内容であった。

もう一つの柱が、研究のサブテーマでもある伝え合い、わかり合うための話す・聴く力の育成である。例えば、話す力として、「最後まではっきりと」「「順序(関係)を考えて」「理由を入れて」「例(事実・資料・他の考え)を入れて」「相手との相違(立場)を考えて」「構成を考えて」と系統的に育成することが目指されている。同様に、聴く力として、「最後までしっかり」「大事なことを落とさずに」「何が一番言いたいのか考えて」「疑問点(質問)はないか」「自分との相違を考えて」「立場(賛成・反対)などを考えながら」とされている。これらをまとめた系統図が、各クラスに掲示され、学校としての統一して取り組む姿が見られた。

子どもたち一人一人を大切にする意識を高めることが、この学校の取組の核となっている。子どもたちが互いに大切にしあう、そうした雰囲気が、授業の中に満ちており、そのことが落ち着いた授業環境を生み出していた。

⑤地域・校種間連携

G 小校区は地域とのつながりが豊かである。学校の歴史も古く、地域住民も古くから住んでおられる住民と新しく開発されたマンションなどに住んでいる住民がおられるが、それぞれが協力的でもある。後で見るように、この学校の縦割り活動は、地域ごとにグループ化され、各地域のつながりを強める働きも果たしている。

校区は、市内中心部に近く、登校時間等は、交通量が比較的多く、道幅の狭いところも

多い。地域のボランティアの方が交通安全指導に立ち、学校と協力して、子どもたちの安全の確保に努めている。

校種間連携としては、校区の子どもたちが進学する中学が２校に分かれる事情を持つ。そのため、学校としての負担が高いところもある。それぞれの中学校と一定の情報交換を持ちつつ、校区の小学校との連携を図っているが、1 つの中学校と連携するのとは異なる苦労もあるようである。

⑥家庭との関わり

G 小学校では、家庭とのつながりを大切にしている。それを象徴するのが、数多い通信である。学校便り、心の窓が開くとき(道徳通信)、ほけん便り、図書館便り、教育相談便り、生徒指導便りなど。学校が知ってもらいたい情報、保護者が知りたい情報を定期的に発信し、学校の理解者を増やす取組が恒常的に行われている。ＰＴＡ活動なども盛んで、保護者の参加意欲も高いのも、情報発信の取組が成果を上げているからであろう。

⑦学校環境

G 小学校の校舎は、新しくはないが、非常にきれいに保たれている。子どもたちはきびきびと掃除していたし、学校の掲示なども安らぎを持たせるよう、配慮されていた。教室にも、④でも触れたように、話す、聴くの系統図が掲示され、机などもきちんと並んでいた。子どもたちが安心して学べるよう、十分配慮された環境となっていた。

⑧前向きで活動的な学校文化

G 小学校には、地域の縦割り班がある。これにより、運動会や G っ子まつりなどが開催される。運動会は、５月に開催され、地域別に学年が混合して座る配置となっている。１年などは、自分の学年の取組に集合するため、上学年の子どもがサポートするなどの体制がとられ、円滑な実施ができている。

３．成功の 3 つのポイント

G 小学校が学力面で力を発揮している特徴をまとめてみたい。

１）教職員集団で子どもを見る体制の確立（②）

これまで見てきたように、G 小学校の一番の特徴は、子どもが安心して学べる環境を学校全体で確立しているところにある。課題のある子どもへの支援を組織的、学校全体で行っていた。ほとんど全ての先生が、空き時間なく、他の学級の支援の必要な子どもに関わる体制をとっていた。また、主幹教諭が校内の生徒指導の中心として位置付き、子どもたちのセーフティ・ネットとして機能することに共通理解がとられていた。毎月、特別支援教

育コーディネータおよび主幹教諭が中心となり、支援が必要な子どもについての情報交換を行い、その状況に応じて、体制を柔軟に変更することが行われていた。しかも、その体制が、トップダウンで決定されるのでなく、先生方が現状を出し合い、その中でよりよい解決策として意志一致できているところが、この取組を効果的にしている。

２）家庭に向けての積極的な情報発信（⑥）

学校を訪問させてもらい、校長先生から話を聞くとき、資料として渡された学校が発信している通信の数に圧倒されたが、一つ一つを担当の先生が細かな配慮をして、情報を伝えようとする姿が伝わってきた。家庭の方も、学校から出される情報に関心を持って受け取っている様子がうかがえた。そのとき、大きな役割を果たしているのが、子どもであろう。道徳の時間の子どもの考えをノートにまとめて、保護者と共有する機会を設けたり、家庭学習も保護者との関わりを促進するよう、学習の手引きなども作成されていた。出された情報が、子どもたちの成長の中で確認できることが、情報発信を確かなものにし、学校と家庭の信頼を高めることにつながっている。

もちろん、全ての家庭が、学校から発信されている情報を共有できているわけではない。厳しい家庭背景を持つ家庭については、こまめに家庭訪問を行うなどの体制がとられている。そうした家庭に丁寧に関わるためにも、学校に協力的な家庭を増やすことが必要であり、そのために家庭が求める情報を的確に発信しているのである。

３）安心して学べる学校の空気（⑨）

この学校の第三の特徴として、上記二つの特徴とも関連するが、細部にまで配慮が行き届いていることによる安心感があげられる。子どもたちは安心して学んでいる姿が多くの教室から感じられ、先生方も普段から連携して、安心して働けている様子が伺えた。そうした安心感を基盤として、子どもたちの伝え合う活動を中心とした学びが成立しているように思われる。校長先生の「特別なことはしていない」というやりとりからスタートした学校訪問であったが、確かに特別なことではなく、学校としての当たり前の姿を感じさせる、すなわち、安心して学べる学校であるため、様々な配慮がされている点を強調しておきたい。

g1 市立 W 中学校

【プロフィール】
所　在　地　香川県 g1 市
校区の特徴　学力が高いことが知られ、ブランド化しているところもある。
生　徒　数　800 名程度
教　員　数　40 名程度
生徒の特徴　比較的安定した家庭背景を持つ生徒が多いが、家庭背景の厳しい生徒も一定程度在籍する。

１．学校の概要

校区の小学校からほとんどの児童が進学してくる。

校区は、古くからの住宅が多く、地域との結びつきの強い住民が多いが、近年、再開発が進み、大規模マンションが次々と建設されている。W 中学校区は、生徒指導上も大きな問題がなく、また、学力も高水準であるという評判が定着しており、その条件を求めて、引っ越してくる人も多い。一方、経済的に厳しい家庭も比較的多い実態を併せ持つ。

訪問した日、学校は、新校舎への一部建て替えが進み、1 年などの教室は仮設のものであった。学校全体に工事の影響を受けていたが、非常にきれいに整備されていた。この中学校は靴を履き替えない土足可の校舎であるが、廊下なども掃除が行き届いていた。

初日、10 時前に学校に到着し、どこから入ればいいか、周りを見回していると、養護教諭の先生が保健室から出てきて、案内をしていただいた。「この時間は、不登校気味の生徒が来ることがあるので、外を気にしていると、姿が見えたので」と声をかけてくださった。それ以外にも、学校全体として、生徒の動きを見守る教師の姿が見られた。

校長先生は、赴任 1 年目で、g1 市教育委員会から来られた。非常にエネルギッシュで、様々なことを改革していこうとする意欲があふれていた。

この中学校は、全体の職員室がなく、学年ごとの職員室と、管理職、事務などの方がおられる部屋に分かれた作りとなっている。幾人かの先生が、職員室が分かれていることについて、学年間の連携がやや困難であるということをいっておられた。

今回、W 中学校が良好な結果となった点に浮いて、校長先生はじめ、数人の先生に話を伺ったが、共通点は、次の 4 点となる。

第一に、地域の安定があげられる。古くから居住している住民と、新しくマンションなどができて流入してきた住民がいるが、双方とも、教育に対する関心が高く、学校教育に協力的である。そのことが生徒の授業態度にも影響し、良好な教育環境が保たれている。

第二に、第一の点と関連するが、生徒たちの集団の力である。校区としては、安定した家庭の生徒が多いが、家庭環境の厳しい生徒も一定数存在する。その割合は決して低いも

のではない。しかし、そうした生徒たちも含め、まじめに授業を受けるという雰囲気が教室にあることがあげられた。実際、全てのクラスの授業をみさせてもらったが、授業に集中している生徒の姿が支配的だった。宿題などの提出物も、出すのが当たり前、という意識が強いということで、実際提出状況も良好であるとのことだった。

第三に、通塾率の高さがあげられた。香川県全体として、高校入試のハードルが高く、特に g1 市内の高校に進学するには、狭き門となっているという話を、これまでの調査で語られてきたが、この中学校区でも、小学校高学年くらいから、高校入試に対する取組がスタートし、通塾率が増えるということであった。中学 3 年では 7 割以上の生徒が通塾し、それも夜遅くまで通っているという実態が明らかになった。

第四に、教員が授業に集中できる環境にあることがあげられた。これまでみてきたように、生徒指導上の課題が少ないため、日頃は授業や部活動の指導に集中できるため、きめ細かな対応がなされているとのことであった。ただ、この点については、さらに改善が必要と認識があり、授業改善の取組を進めているという話でもあった。

２．スクールバスモデルからみた W 中学校

①気持ちのそろった教職員集団

W 中学校の教職員集団をみるとき、二つのハンディがある。第一に、全体の職員室がなく、管理職、事務の方がおられる部屋、後、学年別の 3 つの部屋に教職員が別れる形となっていることである。学年内の連絡は問題ないが、学年を越えた連携がややとりにくい環境となっている。同じ職員室だと、他の学年が何かぎくしゃくしている、という雰囲気を感じることができるが、他の学年の先生とは 1 日会わないことも多い、という声が聞かれるように、周りのサポートが遅れてしまう環境でもある。第二に、学年 7 クラスと大規模なため、教員も 40 名を超える組織となっている点である。

これらの課題を乗り越えて、W 中学校は、良好な教職員の関係が築かれている。要因として、第一に、管理職を中心に、生徒指導主事、教務主任、養護教諭など、学校全体をみることができるメンバーが学年間を必要に応じてつないでいることがあげられる。第二に、年度当初の学年構成の際、教員を適宜入れ替え、固定化しないようにしていることも語られた。そして、この落ち着いて学べる環境を是非とも維持したいという思いが教職員の意識の基盤となっていることがもっとも大きな要因としてあげられよう。

②戦略的で柔軟な学校運営

①でもみたように、学校組織規模が大きく、学年組織中心に動かざるを得ない職員室等の構成もあり、学年中心に組織化されている。学年主任を中心に運営を進めるとともに、学年の代表の会議等も定例で開催され、学校として、同一歩調を維持するようにされてい

る。今年度赴任した校長を中心に、さらに、学校として取り組むことが重視されるようになっている。

③豊かなつながりを生み出す生徒指導

生徒指導上、大きな課題が少なく、また、不登校の生徒も、市の平均に比べ少ないが、生徒指導主事を中心に、学校全体として、方針を統一した指導が進められている。朝、登校時の様子を観察したが、当番の先生だけでなく、校長を始め、多くの教師が積極的に指導に当たっている姿が印象的であった。観察した日は、体育館で集会があったため、普段より早めに登校しないといけなかった。それを忘れていた生徒が、走りながら登校していた。

この学校で、生徒が求められる基準は、全体的に高めである。提出物、授業中の態度など、徹底している。そうした基準に適応できない生徒もいるのでは、と尋ねたが、生徒たちの中に、それが当たり前という雰囲気があること、基準に適応できない生徒には、担任を中心に丁寧な対応がなされているということだった。

④全ての子どもの学びを支える学習指導

学習指導に関して、どの学級も授業は成立し、教師と生徒の関係も良好であることが伺えた。ただ、多くの先生方が、授業改善を進める必要性を訴えていた。昨年度まで、道徳の授業を各学年 1 学級が行い、交流の場が持たれていたが、今年度より、全ての教科が 1 度、研究授業を行う体制をとり、改善に着手し始めた。教師主導の授業からの転換が進められようとしている。

⑤ともに育つ地域・校種間連携

校区の小学校同士で、年 2 回それぞれの授業を参観することを続けているが、連携が密とはいえないと校長は語っていた。香川県全体として、小中の人事交流も盛んではなく、小中の更なる連携が重要であるという認識を持っていた。

⑥双方向的な家庭との関わり

家庭は、おおむね学校の取組に肯定的で、学校のルールを守ることを求める雰囲気が強い。体育祭や合唱コンクールなどへの行事の参観率は高いが、授業参観などへの出席率はよくないとのことであった。家庭の学校への協力的な態度は、高校受験の厳しさと結びついているところがある。中学 1 年の時より、生徒から「内申」という言葉が聞かれ、保護者や塾などの影響が強いことを危惧する先生もおられた。

⑦安心して学べる学校環境

W 中学校は、土足可の学校であるが、廊下や教室などもきれいに保たれていた。掃除の時

間は、男女ともまじめに取り組んでおり、きれいな状態を保つのが当たり前となっている。給食の時間の後、片付けの様子も観察した。この中学は、給食センター方式を採用している。センターに返却するため、食器、おかず関係 2 箱を各クラスが一斉に返却する。しかも、残った食べ物を、入り口の係のところで一つの箱に回収することも行っていた。20 クラス以上が一斉にやってくるが、大きな混乱もなく、てきぱきと片付けられていた。ここにも、校長を始め、養護の先生など、当番以外の手の空いた教師が指導に当たっていることが印象的だった。給食の残りも極めて少なく、学級の指導が行き届いていると思われる。

⑧前向きで活動的な学校文化

W 中学校には、体育祭と合唱コンクールの二つの大きな行事がある。どちらも、生徒たちが熱心に取組、大いに盛り上がるとのことであった。観察した 2 日前に合唱コンクールが行われ、参観した保護者の感想をみても、感動した、という意見が多くみられた。観察した日の放課後に、各学年の上位 3 クラスが発表されたが、優勝したクラスは、大いに盛り上がり、一生懸命取り組んでいる姿が伺えた。校長先生に話を聞くと、生徒たちは 7 時 30 分には練習のため学校に登校し、毎日続くということだった。7 時 30 分という時間も、練習が加熱し、どんどん登校時間が早くなった過去があり、それで、7 時 30 分以前は禁止という措置をとった。担任も練習を見守るため、同じように出勤している。「大変ですね」と尋ねると、「先生方も皆さん、熱心に取り組んでくれています」と、当たり前のように取り組む姿が伺えた。

数人の生徒に、この学校のいいところは何、と訪ねたら、回答に困っていた。観察する立場からすれば、いろいろよいところが目立つのであるが、当人たちにとってみれば、これが当たり前であり、質問されて困ったのであろう。

３．成功のポイント

W 中学校が好結果となっている要因を整理したい。

１）落ち着いた学校としての居心地の良さ（⑨）

W 中学校は、生徒指導上、大きな荒れを経験してこなかった。生徒たちも、そして、保護者も、落ち着いた環境で学べる学校に居心地の良さを感じている姿が伺えた。先生方も、この状態がこの学校の当たり前の姿として認識しつつも、そこで油断することなく、生徒に対して細かい配慮をする場面が見て取れた。ルールを守らせるため管理的になるということなく、しかしながら、生徒たちは大きくはみ出すこともなく、学校生活を送っていた。

その背景には、W 中学校としてのブランドがあげられる。この学校に子どもを通わせたいという保護者の思い、その期待に応えようとする学校、それらがうまくかみ合い、学校としての居心地の良さを創り出している。

２）自ら課題を見つけ主体的に動く教職員集団（①）

W 中学校の教職員集団の大きな特徴に、全体的にまとまっていることがあげられる。まとまりながらも、自主的に動く教師の姿が目立つ学校でもあった。朝の登校指導、給食の片付けなど、当番以外の先生も積極的に関わっていたし、養護教諭も、気になる生徒の情報を担任と共有するなどの姿が当たり前のように行われていた。また、合唱コンクールの指導、部活動の指導なども、先生方が自主的に生徒につきあい、交流を深めているとのことであった。こうしたフットワークの軽さが、学校全体に活力を生み出していると考えられる。

このように積極的に動くことが大変でないか、と何人かの先生に話を聞いたが、これが当たり前、以前の先生はもっと動いておられた、という答えが多く返ってきた。W 中学校だけでなく、香川県の多くの学校で、子どものためにより多くの時間をかけることが当たり前の文化として根付いていることも大きい。県全体、市全体として、教職員が主体的に動く、その中で特に W 中学校は、学校がよい方向で動いていることもあり、前向きな教職員集団となれているのである。

３）生徒の自主的な取組による学校行事の活性化（⑧）

最後の特徴が、生徒たちが中心となって執り行われる行事の数々である。生徒会が主体となる全校集会、体育祭、合唱コンクールの行事など。近年、授業時数の確保のため、学校行事の時間が削られる傾向にあるが、W 中学校では生徒たちが朝に自主的に練習することで、行事の質を維持していた。こうしたことが、学校にうまく適応できない生徒にプレッシャーになっていないか、先生に尋ねたところ、最初は距離をとっていた生徒も、周りの生徒が一生懸命取り組む姿を見て、自然とその輪の中に入っていくことがほとんどということだった。周りの生徒も、距離をとっている生徒に圧力をかけることなく、自然と入ってくるのを待てるのである。これも、学校としての長い伝統があるからであろう。合唱コンクールでも、3 年がすばらしい合唱を披露する、それを見ている 1、2 年は、さらにがんばろうという意識を高めていくのである。

＜高知＞

h1 市立 H 小学校

【プロフィール】

所　在　地　高知県 h1 市

校区の特徴　校区は、3 世代同居、または、お爺さん・お婆さんが近くに住んでいる児童が多い。

児　童　数　500 名程度

教　員　数　40 名程度

児童の特徴　訪問時点では、就学援助率がだいたい 3 割程度。単親家庭の子どもも 2 割弱程度。6 年生の 3～5 割が私立中学校を受験する。通塾率は 6 割程度。

1．学校の概要

1970 年代には、H 小学校の児童数が 1000 人を越えていたこともあるが、現在は少子化の影響もあって、児童数は 500 名弱となっている。

H 小学校の子どもたちの生活を見ると、そこには大きな格差が存在している。H 小学校の就学援助率は 3 割程度、単親家庭に育つ子どもも 2 割弱であり、生活基盤が不安定な子どもたちが一定数存在する。その一方で、H 小学校には私立中学校へ進学する児童もまた多い。年度にもよるが 6 年生の 3～5 割は私立中学校を受験するという。また、受験に備えて塾に通う子ども多く、6 年生の通塾率は 6 割程度である。生活に課題を抱えている子どもたちと、塾に通い私立中学校を目指す子どもたちが、同じ学校に通ってきているところに、H 小学校の学習指導／生活指導の難しさがある。

H 小学校の最大の特徴は、「当たり前のことを当たり前にできる学校」という点にある。「成果を上げている学校」というと、何か特別な実践をしているのではないかと思われがちであるが、H 小学校は、積極的に研究発表に取り組むような「派手さ」のある学校ではない。しかし、教材研究をコツコツし授業もうまいベテランの教員が多いため、クラス運営は非常に安定している。また、個々の教員の力量が高いだけでなく、気になることがあれば夜 8～9 時まで職員室で話しあうこともできるため、自然と連携できる雰囲気があると教員たちは感じているようである。

H 小学校の校長先生は、保護者や子どもに「寄り添う」ことを重要視し、腹の底から上っ面でない付き合いをしなければならないという信念を持っている。インタビューの中で聞いた「子どもの心の安定があれば、（学力は）いくらでも上乗せできる」という言葉には、彼女の教育観が端的に表れていると思う。

現在は、不登校の子どもたちとの関わりを大事にしているようで、私たちの訪問中も、校長室に不登校傾向の子どもがやってくるなど、校長先生と子どもたちとの普段の関わり方

がうかがえた。地域とのつながりを保つため、地域の飲み会にも積極的に出席しているという。「何かあったら担任任せにするのではなく、校長や教頭が顔をだし、動いている姿を見せる」ことが大事だと考えているそうである。

学校内では、強いリーダーシップを発揮して職員を引っ張っていくというよりは、サポート役に回っているように見受けられた。私たちが、2 日間の訪問で感じた H 小学校の雰囲気は、学校全体で共通の目標は掲げつつも、一人一人の教員の実践は自由にやってもらうという、おおらかなものである。高知県の他の学校でもしばしば聞く話だが、高知の人間には「やらされる感覚を嫌う」傾向がある。H 小学校のおおらかな学校の雰囲気は、こうした高知人の気質に配慮したものなのかもしれない。

学力面で言えば、H 小学校では、特に国語に力を入れた実践が昔から行われてきた。授業以外でも、本に親しむことを目標にし、毎週 2 回のお母さん達による読み聞かせの時間など、読書を意識した取組が行われている。その成果か、本が好きな子どもが多いようで、20 分休みには図書室が子どもでいっぱいになっていた。

さて、こうした H 小学校の実践を陰に日向に支えているのが、地域とのつながりである。H 小学校の校区には、「学校パトロール隊（校区を見回る地域の人たちの集まり）」「朝ん歩隊（老人会の人たちが登校時間に、散歩ついでに子どもたちの安全を確認する）」「守るんじゃー（大学の学生ボランティアが、下校時間に同行して安全を確保する）」など、学校と連携して子どもたちの安全を守る組織がいくつも存在している。地域主催の活動も盛んで、花火大会や敬老の日の活動などが、今でも活発に行われているという。

H 小学校の学校内には、こうした地域とのつながりを示す掲示物がいくつかあった。例えば、子どもたちの靴箱のそばの壁には、「学校パトロール隊」として登録した 50 人ほどの地域の人の顔写真が貼られている。また、職員室の壁には、子どもたちの手によるものと思われる「守るんじゃーの歌」の歌詞が貼られていた。

訪問中、私たちは、H 小学校と地域のつながりの中心にいる、校区で貸衣装屋を営む男性から話を聞くことができた。彼は、自身の子どもが 25 年前に H 小学校を卒業してからも、H 小学校に関わり続けているという。現在は、H 小学校で英語を教え、隣の H 第二小では放課後学習、さらに H 中学校では地域コーディネーターを勤めるなど、H 小学校だけでなく H 中学校区で幅広く活躍している。こうした学校と地域をつなぐ人材がいることも、H 小学校の実践を支える、大きな力になっていると言えるだろう。

2. スクールバスモデルからみた H 小学校

①気持ちのそろった教職員集団

H 小学校には、7～8 年と長く勤務するベテラン教員が多い。彼らの授業のうまさ、安定度の高さが、H 小学校の力の源の 1 つである。もちろん個々ばらばらに動いているわけでは

なく、教職員集団のまとまりもよく、話しやすい職場ができているという。毎回の職員会では、児童コーナーと呼ばれる時間があり、気になる子どもの情報が共有されている。また、研究部などの学校の部会は、各学年の代表が集まり意見を交換するかたちになっており、一人一人の意見を集約して、学校が運営されていくスタイルになっているようであった。

②戦略的で柔軟な学校運営

H 小学校の教員集団は、個々のやり方を尊重し、それが学校全体でうまく機能するという形になっている。これを支えるのが、H 小学校の管理職である。校長先生をはじめとして、表だって強いリーダーシップを発揮しているというわけではないが、不登校傾向のある子どもたちを一手に引き受けたり、地域とのつながりをつくって個々の教員が動きやすい学校をつくりだしたりしている存在になっている。こうした管理職の存在があってこそ、学校がしっかりと運営されていると言えるだろう。

③豊かなつながりを生み出す生徒指導

ベテランの先生が多く、学校も落ち着いているので、学校全体として、「これ」という方針があるわけではない。ただ、子どもに寄り添うことは大事にしていると言う。また、若手の先生には、校長先生から、折に触れアドバイスがされているようであった。

④全ての子どもの学びを支える学習指導

H 小学校では、「授業へのアプローチ　5 つのポイント」と書かれた用紙が教職員に配られており、「1.授業のねらいを明確にする」「2.具対物を提示する」「3.発問・指示・説明はわかりやすく」「4.みる、きく、はなす、かくをバランスよく」「5.わかったこと、よかったこと、定着度を振り返る」といった点について、共通理解がなされている。

H 小学校の自慢は図書館である。本は表紙を見せる「面出し陳列」。ボランティアに来てもらって、一日中、図書室を開けられるようにしている。さらに、図書室のイスの布カバーや部屋の装飾などはお母さんたちの手作りである。ときには、辞書引きコンテストも開催されるそうである。

こうした学習の仕掛けを見ていると、H 小学校では、学力テストの点数を上げるためにテスト対策をするのではなく、読み書き計算という基本的な能力を子どもたちにつけることを目指した教育が行われているように感じられた。

⑤ ともに育つ地域・校種間連携

基本的には、地域が落ち着いているので、あまり深刻な問題は起こっておらず、学校に直接やってきて文句を言うような人も、ほとんどいないとのこと。決して経済的に恵まれた地域ではないが、H 小学校の校区では、地域の組織がしっかりしており、子ども会、登校

班といった昔ながらの組織がまだ機能しているそうである。老人会の活動も活発であり、これらの地域組織は、H 小学校を支える力になっている。

注目すべき取組は、3 年前から始まった中学校との連携である。H 小学校、H 第二小学校、H 中学校の 3 校は、家庭学習・読書・学力向上を目指して、小中連携に取り組んでいるという。特に、家庭を学びの環境にするために、家庭にお願いしたい 15 項目を B4 カラー印刷にまとめて配布するなどの活動を行なっている。

また、現在の H 小学校・H 第二小学校・H 中学校の校長は、同時期に H 第二小学校で管理職を務めていたという経歴の持ち主で、3 校で何かやるとなったときには、非常に連携がとりやすいという。

⑥ 双方向的な家庭との関わり

「何かあったら家庭訪問！」が、校長先生の方針。H 小学校では、学力以前に、生活に課題を抱えた子どもが多く存在している。校長先生は、こうした子どもたちの安定をはかることが、クラスの安定になり、それが学力保障につながると考えている。そのため、H 小学校では、常々「その日にいったら説明だが、2、3 日たったら言い訳になるで」と、家庭訪問の重要性が説かれている。

⑦ 安心して学べる学校環境

小学校だからという面もあるだろうが、H 小学校の教室には、様々な展示物が貼られている。各クラスで掲示物を統一しているわけではないが、豊かな学習環境が整えられている印象を受けた。

学校内では、特に図書室に力が入っているようで、20 分休みには、多くの子どもたちが訪れていた。また、地域との連携を示す掲示物（「学校パトロール隊」のメンバーの顔写真や、「守るんじゃーの歌」など）があり、地域と学校のつながりを感じることができた。

⑧ 前向きで活動的な学校文化

ベテランが多いためか、個々の教員は、それぞれの持ち味を活かして授業を行っているように見えた。子どもたちも、様々な課題を抱えているものの、学校ではのびのびと活動しているように見えた。

3. 成功の 3 つのポイント

1）地域に支えられた学校（⑤）

H 小学校の取組を支えているのは、第一に地域である。H 小学校では、経済的には苦しい家庭も多いものの、子ども会の活動や地域の活動を通して、親同士が知り合いになるケー

スも多く、親が孤立しない状況があるそうである。また、附属池田小学校の事件のあとは、登校時間に子どもたちに声をかける取組をしたいという依頼が、地域の老人会だけでなく、民間企業からもあったという。

他にも、近隣に大学があり学生や研究者の力を借りやすいことや、H 中学校校区で小中連携の実践を積み重ねてきたことなども、H 小学校の財産となっていると思われる。

2）学校・地域の力を引き出す学校運営（②）

2 点目として、学校と地域の力をうまく引き出す学校運営をあげておきたい。H 小学校の学校運営は、管理職が強いリーダーシップをとって、学校を運営していくというスタイルではなかった。しかし、校長先生・教頭先生の動きを見ていると、地域とのつながりを保つために地域に積極的に関わっていくだけでなく、それぞれの先生が動きやすくなるように不登校児童の面倒を見るなど、細やかな配慮が伺えた。

トップダウンの「引っ張る」リーダーシップではなく、地域や、それぞれの先生が力を発揮しやすいように、「支える」「つなぐ」リーダーシップが、H 小学校の成果を導いた要因の一つではないかと思われる。

3）当たり前のことを当たり前に取り組む（⑨）

ここまで見てきたように、H 小学校は、強力なリーダーシップを持った管理職がいるわけではないし、特別変わった取組をしているというわけでもない。インタビューの中で、校長先生・教頭先生が最初に語ったのは、「うちは特別なことはやっていない。他の小学校でもやっているようなことを、着実に積み重ねているだけです」ということであった。

しかし、私たちが 2 日間の訪問で感じたのは、むしろ、「この当たり前のことを当たり前に取り組む」ことこそが、小学校では重要なのだということであった。H 小学校の校区は、それほど恵まれた環境にあるわけではない。にもかかわらず、「当たり前のこと」ができていること。そのすごさは、強調しておく必要があると思う。

「成果を上げている学校」というと、私たちは、すぐに何か特別なことをしなければならないと思いがちである。しかし、H 小学校の実践は、「当たり前のこと」を着実に積み重ねていくことこそが重要であり、成果を上げるために特別な近道などないということを、私たちに教えてくれている。

h2 町立 X 中学校

【プロフィール】
所　在　地　高知県 h2 町
校区の特徴　海と山に挟まれた自然豊かな町。
児　童　数　150 名程度
教　員　数　20 名程度
生徒の特徴　就学援助率は 30%～40%。単親家庭は 20%程度。生徒は、非常に人懐っこい。

1. 学校の概要

X 中学校がある h2 町は、海と山に囲まれ、自然豊かな町であると言える。

X 中学校がある h2 町 X も、自然の恩恵を受けている。校区には、商店街があり、その日に水揚げされた新鮮な旬の魚が並ぶ。お昼前には、水揚げされたばかりの朝どれ・昼どれの新鮮な魚を求めて、賑わうという。もっとも、近年では、景気が悪くなっていることもあって、漁師を仕事にしている人は減ってきているようである。

朝 8 時頃に、私たちが学校へ向かうと、校門で立ち番をしていた教頭先生が出迎えてくれた。X 中学校では、毎日、登校する生徒をあいさつで迎える朝の立ち番が行われており、教職員は日替わり、生徒会執行部や全校生徒も当番で参加するという。あいさつをして気持ちよく朝を迎えることが一日を有意義にするという方針から、この立ち番が生まれたそうである。

学校に入ると、入り口には、学校の教育目標が書かれた紙が貼ってある。おもしろいのは、学校教育目標の下に書かれた「目指すイメージ（スローガン)」である。「(1)夢を持て(2)特技を持て(3)根を張れ」と書かれており、特に(2)が校長先生のお気に入りで、「(1)夢を持て、(3)根を張れ（地域とつながる）はよく聞くが、(2)の特技を持てというのは珍しいだろう」と胸を張っている。

実際、校長先生の方針通り、X 中学校の生徒たちは、自主的に動くことのできる子どもたちに育っている。9 月に実施された体育祭は、3 年生が中心になって活躍し大成功をおさめたそうで、地域の人たちだけでなく、h2 町の教育長までもが絶賛している。私たちの訪問中に行われた合唱コンクールの全体練習でも、3 年生が 2 年生・1 年生をまとめている姿が見られた。さらに今年は、3 年生の自主的な申し出で、3 年生だけの合唱も披露される予定になっているという。

こうした成功がある一方、X 中学校に通う子どもたちの家庭生活は、それほど恵まれた環境にはない。就学援助率は 30%～40%と年々右肩上がりであり、ひとり親家庭の割合も 20%程度である。学校にクレームを言う保護者が多いというわけではないのだが、「教育にあまり関心がない」保護者も多く、教職員からは「文句もいってこない代わりに、参観日の出

席率も低かったり、参観日に誰も来なかったりするときもある」という声も聞かれた。一方、体育祭などの行事には非常に協力的であり、勉強にはそれほど熱心ではないが、学校を信頼してくれている地域の人々の姿が伺える。

また、X 中学校の子どもたちの特徴として、「よく言えば自由、悪く言えばざっとしている（いい加減な）ところがある」そうである。X 中学校の教員からは、部活の練習中に「先生ちょっと暑いきに、泳いできてかまん？」と学校前の川に飛び込みに行ってしまう子どもがいたという話や、「ちょっと家に帰ってもかまん？忘れ物とってくる」と家に帰ってしまう子どもがいて、非常に戸惑ったというエピソードを聞くことがあった。

さて、X 中学校を「効果のある学校」とした最大の要因は、校長・教頭のリーダーシップである。明るく冗談好きな校長先生と、理論家でまじめな教頭先生の組み合わせは、二日間訪問しただけの私たちの目から見ても、学校を支える屋台骨になっているように思われた。

校長先生は、50 代の男性。私たちの訪問中は「うちは教頭と事務の先生がいいですから！私は何もしてません！」などと、冗談ばかり言っていた。しかし、教員時代から生徒指導をしてきたベテランで、当時を知る X 中学校の教員（校長先生の元教え子）の話では、生徒指導で恐れられていたそうである。今でも、問題を抱えた子どもたちの対応を一手に引き受け、荒れる可能性のある生徒は早い段階で「手中に収め」たり、卒業生でも問題を起こしそうな生徒の情報は常に仕入れるようにしているという。実際、X 中学校は、数年前は「グレ中」と呼ばれるほど、荒れた中学校であったのだが、現在の校長が着任して以後、落ち着きを取り戻したと言われている。

一方、学校の教育実践を取り仕切る、学校の頭脳は教頭先生（男性）である。朝のあいさつ運動も毎朝校門に立つほか、毎月「コミュニティ・スクールだより」を作成、地域へ配布しているということであった。「コミュニティ・スクールだより」は、ウェブ上にも公開されている。教職員や地域の人からの教頭先生への評価は、とにかく真面目。ほかにも「土日も朝から学校に来て仕事をしている」「毎日朝 7 時くらいからいる」「理論家」など様々な評価を聞くことができた。

生徒指導のベテランで、豪快な性格の校長と、まじめで理論家の教頭。この二人が、絶妙のバランスでもって、学校を支えているところに、X 中学校の強みがあると言えるだろう。管理職は、二人とも地域の活動にも積極的に出かけているといい、PTA の関係者へのインタビューでも、非常に信頼されている様子が伺えた。

学力面を見ていくと、X 中学校は、もともと恵まれた家庭の子どもが多いわけではないので、それほど平均点が高いわけではない。しかし、理論家の教頭のもと、学力向上のための組織づくりをしっかり行ない、校内研修体制を作りあげているようであった。X 中学校では、学習環境づくり（あいさつ運動・全校読書・授業規律）が教職員全員で行われているだけでなく、授業力を向上させるために全員が年に 1 回は研究授業を持つなど、授業にも力を入れることのできる体制が築かれている。

2. スクールバスモデルから見たX中学校

①気持ちのそろった教職員集団

教職員へのインタビューでは、「非常に働きやすい」「チームとして動くことができる集団になっている」「風通しがよい」「管理職のフットワークが非常に軽い」など、教員集団に対する肯定的な意見が多数を締めていた。また、小規模校のせいもあるかもしれないが、飲み会などで、若い教員に年配の教員が自然とアドバイスをくれる雰囲気もあるという。

②戦略的な柔軟な学校運営

校長先生と教頭先生のタッグで学校が運営されている。校長先生は「一人でも学校に来たくない思いをしている子どもがいるのは許せん。それと一緒で、先生も一人でも嫌な思いをしている先生がいるのも許せない」といい、誰もが通いやすい学校を目指しているそうである。一方の教頭は、他の先生が活動しやすくなるように、様々な裏方仕事を一手に引き受けている。

もうひとつ、校長先生が強調しているのが、X 中学校の事務員さんの優秀さである。「うちは、この 2 人（＝教頭と事務員）で保っている」とは、校長先生の言。事務員さんへのインタビューでは、面倒な事務手続き（例えば奨学金の説明や書類のチェックなど）を積極的に引き受けていることや、学校の事務手続きの簡素化などに努力しているという話が聞けた。

このように、管理職がリーダーシップをとっているだけでなく、事務員が教員を支えるように立ち回ってくれているところに、X中学校の強みがあると言えるだろう。

③豊かなつながりを生み出す生徒指導

地域性もあるかもしれないが、X中学校では、教師と生徒の距離が近い。教職員自身、「この学校は、教師と生徒の仲が良いと思う」という声が多い。ただし、ただ仲が良いだけではない。X中学校では、同時に「先生が生徒を上回っていなければならない」という校長先生の方針が、浸透している。

「重要なのは、頭ごなしにおさえつけるのではなくて、話をして、そのつど関わっていくこと。大変な子どもたちも校長先生がしっかり見ている。子どもたちと関わりを持つ。地域の活動にも顔をだす。頭ごなしに押さえつけるのではなくて、話をして、その都度関わっていく。自分ひとりではなくて、必ず、担任、学年団、管理職と指導方針を話し合った上で、一緒に行うようにということは気をつけている」という、ある先生の言葉が、X中学校の生徒指導を物語っていると思う。

④全ての子どもの学びを支える学習指導

X 中学校の指導体制は、理論家の教頭先生が作っている面が大きいようである。教頭先生は、ベースは学習環境を作ることと言い、学校の中に勉強に向かうような環境をつくれば、子どもたちは自然に勉強に向かうと考えている。そのために、あいさつ運動・全校読書活動を導入したり、授業規律を徹底したりする活動を行なっている。朝読書の時間も、静かな時間を作るために導入しているといい、職員は、この時間は絶対に教室に上がることになっているそうである。

また、X 中学校では、学力向上サポーターとして大学生 5 名がボランティアで活動している。他にも、地域支援サポーター・地域コーディネーター・不登校支援の加配など、多くの人間が学校に関わっており、子どもたちの学びを支える体制づくりが整っていると言えるだろう。

⑤ともに育つ地域・校種間連携

校長先生・教頭先生は、積極的に地域にでるスタンスを取っている。教職員にも常々「地域にでていきなさい」と言っているそうで、教員に声をかけて地域に関わらせるようにしているという。また、文化発表会では PTA に協力してもらい、カレーライスやおでんを販売してもらう等、意図的に地域や保護者を学校教育活動に巻き込もうとしている。

⑥双方向的な家庭とのつながり

X 中学校の保護者については、あまり学習面では熱心ではないが、体育祭などの行事には協力的であり、「勉強にはそれほど熱心ではないが、学校を信頼してくれている」というのが多くの教員の認識のようである。駅伝大会があった時には、実際に走る子の保護者ではない方も来てくれるといい、保護者との信頼関係が築かれているようであった。

⑦安心して学べる学校環境

訪問時は、仮校舎だったため、教室の大きさがマチマチということもあって、なかなか授業が組み立てづらい面はあるようだった。しかし、校舎は非常にきれいであり、掲示物も多い。生徒が作った標語などがあちこちに貼られている。教室にも掲示物が多く、学習環境が整っていた。

⑧前向きで活動的な学校文化

授業や生徒指導でも、子どもたちの人懐っこさをうまく活かし、教師と生徒の距離が近い学校になっている。もっとも、馴れ合いになっているわけではなく、指導はきっちり通る。3 年生が主体的に活動する姿も見られ、学校内に積極的な空気が生まれていると言えるだろう。

3.成功の 3 つのポイント

1）豪快な校長とまじめな教頭の管理職タッグ（②）

X 中学校の成功の要因は、管理職のリーダーシップに尽きる。前向きな学校文化をつくりだす冗談好きの校長と、がっちりとした学校組織を作りあげる理論家の教頭。この 2 人が管理職としてそろったことが、X 中学校が成果を上げることができた最大の要因であろう。さらに X 中学校では、ここに事務仕事を引き受けてくれる事務員さんが加わり、先生方にとって、万全のサポート体制が築かれていたように思われる。

教員へのインタビューでも、「管理職がいろいろなことを任せてくれるし、フォローしてくれる」「校長先生も明るく盛り上げてくれて、相談しやすい」「教頭先生が数学などを中心になって指導してくれてありがたい」「事務員さんにはとてもお世話になっている」など、現在の学校体制について、非常に肯定的な声を聞くことができた。

2）子どもたちを活かす教育（⑨）

第 2 の要因として、子どもたちを活かす教育という点を挙げたい。体育祭や合唱コンクールの成功に象徴されるように、X 中学校では、子どもたちが中心になって行事を盛り上げていくことができている。それを支えているのは、教職員の子どもたちへの基本的な信頼である。

私たちは、数学の授業中、突然、男子生徒が席を立って遠くの席の子どもに問題の考え方を聞きに行く様子を見て驚いたのだが、それは X 中学校では普通のことらしい。あとで教員に聞いてみると、「ある程度彼らに任せてみたら、ある程度の規律は守れる。逸脱はしない。子どもたちは理由があって動いている」と語ってくれた。

こうした生徒への基本的な信頼の上にたって、「子どもたちを活かす」教育実践が展開できていることも、X 中学校の成功のポイントのひとつだと言えるだろう。

3）地域を巻き込んだ活動（⑤）

X 中学校成功の 3 点目のポイントは、地域を巻き込んだ活動である。X 中学校の管理職は、校区の人々と積極的に関わり、地域の力を学校に活かすことを考えている。現在も、総合的な学習の時間を使い、全学年で地域との交流活動（漁師町であることを活かしたかつおのたたき実習など）を行っているそうである。

PTA の関係者からの学校の評判も上々で、ここ数年で学校の雰囲気がだいぶ変わったと感じているという話を聞くことができた。このように、地域の人々が X 中学校の実践を全面的に信頼し、積極的に協力していこうとしていることを、X 中学校が成果を上げた要因を考える上で忘れてはならないだろう。

＜宮崎＞

i1 市立Ｉ小学校

【プロフィール】

所　在　地　宮崎県 i1 市

校区の特徴　旧商店街だったこともあり、古くからの「地域」が残っている。そのため、３世代にわたってＩ小という子どもも少なからずいる。また、i1 市で最初にできたというＰＴＡ組織が強固であり、ＰＴＡのＯＢで作る「振興会」が学校教育活動の支援に果たす役割も小さくない。

児　童　数　800 名程度

教　員　数　40 名程度

児童の特徴　子どもたちは「まじめ」、「素直」、「おとなしい」、保護者は全体的に教育熱心だという。校区が i1 市中心部であり、私立中、附属中学へのアクセスが容易で２～３割が進学するが、必ずしも学力トップ層ばかりが抜けていくわけではない。児童数は、近年校区内のマンション建設に伴い、漸増傾向にある。全体的に家庭は恵まれているが、その中で「差」が目立つ場面もあるという。

１．学校の概要

Ｉ小校区は、市の中心地のいわゆる「まちなか」で、旧商店街を含み、古くから住む地域住民が多い。近年はそこにマンションが建ち、移り住んだ核家族も増えてきているという。

子どもたちは総じて落ち着いていて、「まじめ」「素直」「おとなしい」という評価が教師や地域の人からなされている。学習意欲も高く、読書も大好きだそうである。そのまじめさ・素直さ、学習意欲の高さを基盤に置きながら、教師の指導によって、非常に鍛えられているという印象を授業中や掃除などをする子どもたちから受けた。

Ｉ小では、４年生が CRT（市費）、５年が県の学力テスト、６年が全国学力調査を受け、その分析が学級、学年、教務の各レベルで行われている。この分析は校長曰く「しっかりやっています」ということで、結果をもとに授業改善が行われている。

見学した道徳の授業は、担任と子どもたちの真剣勝負の場といった緊迫感があるものであった。子どもたちは皆姿勢を正し、教師の問いかけにはほとんどの子が挙手をし、はきはきと発表をする。発表や応答の仕方が決まっており、それが徹底されている。教師だけでなく子どもたちも共によりよい授業にしようとしているようだった。「授業規律の徹底」を超えて、子どもたち皆が積極的に授業に参加する雰囲気が満ちあふれていた。

掃除の場面でも子どもたちの姿は真剣そのものである。Ｉ小学校では、「６つの無言の場」が設定されており、掃除はその一つである。掃除開始の予鈴が鳴ると、子どもはその場でピタッと動きを止めて、掃除にむけて気持ちを切り替え、心を落ち着かせている。

Ｉ小で最も印象に残ったのは、教員も児童も、保護者・地域住民もＩ小を誇りに思い、その誇りを胸に学校活動に取り組んでいることである。聞き取りのなかで様々な人から何度も「誇り」という言葉を聞いた。子どもたちはＩ小生にふさわしくあろうと熱心に学び・学校生活を送り、また教師も一人一人が自らの教育実践に自信を持って取り組み、そこにさらなる研鑽を深めていこうとしているように感じられた。

保護者や地域住民も誇りあるＩ小にふさわしい教育を学校に求めると同時に自らも教育実践を高めるための支援を惜しまない。教師の指導は学習指導から生徒指導まできめ細やかに計画され、学年や学校としての共通認識を持ったうえで行われている。それに子どもたちは応えて成長し、保護者や地域住民はそれを支えている。

また同校に限ったことではないが、宮崎県の学校は学校を囲む塀が低い。校門も開かれており、チェックを受けて敷地内に入るということはない。学校は必然的に地域の学校としてあり、子どもたちは（家庭に困難を抱えていても）地域の大人に支えられながら育ち学ぶことができている。地域ぐるみで作り上げられた学校の風土に支えられながら、子どもたちが学び、育っているという印象を強く受けた。

２．スクールバスモデルからみたＩ小学校

ここでは、スクールバスモデルの８つの要素ごとに、Ｉ小学校の特徴を簡潔に整理してみたい。

①職員集団

教員の平均年齢が 47.6 歳で 20 代はいないという構成で､若手の育成という問題がなく、互いが高めあう教員の同僚性が成立している。経験豊かな教員がその力を発揮しながら、互いのいいところを参考にしながら更に研さんを積んでいる。夜も遅くまで教育研究に取り組んでいる。

このように、個々に力を持ち、教育研究に熱意をもった教師陣ではあるが、それぞれ別々に動くのではなく、「チーム Ｉ」として学校、学年で同じ取組をするように意識統一がされている。研究授業もみんなで作り上げて、うまくいったものはモデルとして他の単元でも使えるようにするなど、教員の力を合わせた教育活動が行われている。

②学校運営

県、市の方針をもとに校長が学校経営ビジョンを示す。それは、①学校・教室が子どもにとって楽しい場で、②保護者・地域から信頼される開かれた学校であり、③働き甲斐があり一人で抱え込まずチームＩとして動くことである。それをふまえて、年度初めに校長と個々の教員との間で教員各自の目標設定をし、８～９月に中間ミーティング、12 月に最終ミーティングとフィードバックを行っている。これは教員評価制度の導入と連動して行

われているが、管理職と個々の教員が「取組を振り返る機会になっている」ということである。

校長の明確な学校経営ビジョンをもとに、学校経営の PDCA サイクルを形式的にではなく実質的・効果的に運用していると言えそうである。

③生徒指導

生徒指導上の問題は、皆無ではないがそれが学校の雰囲気に影響を与えるようなものではないという。学校のルールをしっかり守り、望ましい生活習慣が形成されている子どもたちが多い。靴を揃えたり傘をきちんと巻くといったことは低学年から徹底して指導されており、その積み重ねが子どもたちの「まじめさ」につながっている。さらに、６年生には最上級生としての自覚をもって行動するようにしっかり指導しているという。掃除や給食配ぜんで上級生が模範となったり、ボランティアで朝早く登校し庭の掃除をした後あいさつ運動をしたりするなどしている。

④学習指導

基本的な学習態度・習慣の育成が徹底されている。子どもたちは、基本的にまじめで熱心だと言うことだが、全学年共通の「学習の約束」を教室に掲示し、その指導が徹底されている（表１、低・中・高学年ごとにひらがな・漢字表記が異なる）。

１授業に必要なものを忘れません。
２休み時間に、次の授業の準備をします。
３チャイム１分前に静かに席に着きます。
４ひじを伸ばしてまっすぐ手をあげます。
５返事や発表は、大きな声でします。
６話している人に、体を向けてしっかり聞きます。
７わからないことは、進んで質問します。

表１　Ｉ小「学習の約束」

授業中、教師の指示は一度で通り、聞いていない子は見当たらない。教師も子どもたちも真剣ものである。

こうした学習態度の育成のために、各学期のはじめに「学習態度育成月間」が設定されている。「重点指導事項」を設定し、児童にもそれを振り返るようにさせている。

また、基礎学力を育成するために、全校で行う共通実践事項として定期的に朝の活動（週２回）と予備時数を活用し、「I 学」が推進されている。「I 学」は、国語の基礎学力（漢字、言葉、音読等）・算数の基礎学力（計算等）の定着と継続への意欲付けを図るものである。学力的に課題のある子をどう支えるかについては、少人数授業（習熟度別）の編成を工夫

したり、昼休みに指導したり、「日常的に目をかける」といったことで対応しているという。

⑤地域・校種間連携

Ｉ小学校を誇りに思う保護者や地域住民が多く、学校との信頼関係もしっかりしている。授業などへの保護者の要求水準は高いが、それに応えようとする教師への信頼は厚いという。PTA と教育振興会が中心になり学校の教育活動をサポートしている。PTA で「親学」を推進したり、バザーやベルマーク運動で図書室や会議室にクーラーを設置したという。朝の時間や昼休みを利用した「読み聞かせ」の活動なども継続的に行われている。

⑥家庭とのつながり

学校に協力的で、落ち着いた家庭が多いこともあり、全体的に学校と家庭が足並みをそろえて子どもの教育に当たることができている。低中高学年ごとの「家庭学習の手引き」を年度初めに配布し、家庭学習の基本を家庭と共有している。家庭での読書を記録し習慣づけを促す「家庭読書カード」なども実施している。数は少ないが不登校傾向の子どもに対しては、担任が朝迎えに行くなど個別に地道な支援を行っている。

⑦学校環境

学習環境を整えるということで、「教室設営に必要なものを基本的に共通化し、各学年で創意工夫する」ことになっている（例えば、教室前面には、「校歌」・「話型表」・「目指す児童像」・「学級目標」・「声のものさし・学習のやくそく」・「生活目標」・「時間割等」、背面には、「児童の作品等」)。校内の掲示物についても学校全体でコンセプトを出し意思統一している。「学び通り」をつくり、各学年で児童の学習成果物等を掲示している。

⑧学校文化

Ｉ小を誇りに思う文化が、地域ぐるみで醸成されている。その誇りに恥じぬように、児童、教職員、保護者・地域住民それぞれによって高いレベルの授業や学校生活が追求されている。そして、上級生が下級生の模範となることでその文化が受け継がれている。

３．成功の３つのポイント

最後に、Ｉ小が好成績をおさめている要因として、下の３つのポイントを指摘しておきたい。

１）個々に力のある教師が学年集団を組んで高めあう「同僚性」(①)

それぞれの教師が授業で勝負しようと教材研究に励み、また互いの実践から学びあう姿勢が高い。経験を積んだベテランの教師集団が学習意欲のある（打てば響く）子どもたちに対して「質の高い」授業で勝負しようとしている。個々に力のある教師が互いに学びあ

い、チームとして動くことで高いパフォーマンスを達成している。

２）皆（子ども・教職員・地域）が誇りに思う学校（⑧）

子どもも、教職員も、保護者・地域住民も、多くがＩ小学校の一員であることを誇りに思っている。上級生は下級生の模範になるように、下級生は上級生のようになりたいと思って学校生活を送っている。縦割り（無言）掃除では、６年生がリーダーとなって反省会を行っている。

３）みな「まじめ」で、授業規律等鍛えられている（③）

地域・家庭の安定さ・教育熱心さを基盤として、授業中の私語が全くない、発表の仕方が統一され授業がスムーズに進む、心を落ち着かせ静かに清掃に取り組むといったことに表れているように、子どもたちはよく指導されている。授業中の集中力も高く、字も丁寧に書く児童が多い。授業中をはじめとした学校生活における子どもたちの態度からは、勤勉さが感じられる。

i1 市立Ｙ中学校

【プロフィール】
所　在　地　宮崎県 i1 市
校区の特徴　まちづくりに積極的に取り組み、学校の取組を支援する住民も少なくない。
生　徒　数　400 名程度
教　員　数　30 名程度
生徒の特徴　分譲の戸建て（30%）と県営住宅（51%）、市営住宅（15%）、その他賃貸・共済（４%）。高い学力を求める家庭と学力に「無関心」な家庭に二極化している。就学援助率は 25%、生活保護を受ける家庭の生徒は 16 名（約４%）

１．学校の概要

人口は 9,000 人ほどで、年齢構成は 50-54 歳と 15-19 歳が多くなっている。

Ｙ中学校は、創設当初、戸建てもしくは公務員住宅の生徒がほとんどであったが、現在では県営・市営住宅の生徒が７割を占める。単親家庭も２，３割あるという。

子どもたちは「素直な子が多い」という声が教員からも地域住民からも聞かれた。ある程度閉じられた地域のなかで守られて育った半面「世間知らず」なところもあるという。小学校から中学校に上がる際には、５分の１ほどの子どもたちが私学や附属中に行くそうである。

学校を訪問した３日間、生徒たちは廊下や教室で会うたびに私たちにあいさつをしてくれた。校長の話でも「１日何度会ってもそのたびにあいさつをしてくれるんですよ」とのことだった。

学校の様子を見学し、子どもたちはとても落ち着いて学校生活を送ることができているように感じられた。授業中に立ち歩いている生徒は皆無であるし、同校教諭によると自習でも静かに取り組んでいるという。チャイム着席が徹底され、教師も授業に遅れて入ることなどない。

Ｙ中で一番印象的だったのは、生徒たちが非常に熱心に授業を受けていたことである。見学した授業の一つ、環境問題を取り上げていた３年生の理科では、皆明るい表情で教師の問いに対して活発な議論が展開されていた。なかには議論から外れるような冗談を飛ばし続ける男子生徒もいたが、それもクラスに包摂しつつ、クラスで一つのことを知恵を合わせて考えていた。授業を受けることで新しいことを知ることができる、それが楽しいという雰囲気がある。その一方で板書をノートに取る時間になるとピタッと静かになり、ノートを取り終えた生徒も静かに待っている。ボーっとしている生徒も見られず、勉強する雰囲気がクラスを覆っているという印象である。勉強のできる生徒も苦手な生徒も熱心に授業を受けているのだ。元ＰＴＡで地域の顔役として学校を支えているＡさんによれば、Ｙ中

には先生の話を聞こうという雰囲気が伝統的にあるという。

数学と英語の授業は、全て少人数分割授業で実質的に習熟度別の編成がされている。基礎コースの人数を発展コースより少なくし、より個別に対応できるように構成されている。ここでも子どもたちは熱心に授業を受けていた。見学した数学の授業では、基礎コースの数名の子どもたちは、教卓に自分たちの机を擦りつけるようにして課題に取り組んでいた。仲間同士でこうじゃないかと相談したり、「ああ、そういうことか」と気づく姿が見られ、わかることの喜びが、子どもたちから感じられた。

集団づくりという観点からみると、体育大会、長縄、合唱コンクール、チャレンジカップ（スポーツや文化系の種目で競い合う）などのクラス対抗のイベントが多く組まれており、生徒はクラスのみんなで力を合わせてそれに取り組むという。また昔から「チャレンジ精神」を大切にしてきた学校で、中学校で行われる成人式や小学生対象の「子ども祭り」にボランティアで参加したりもしている。

学習にかんしても自主活動についてもがんばってやろうというポジティブさが伝わってくる学校である。

地域のサポートも Y 中のよさを支えている大きな要因の一つであると思われる。開校以来教育熱心で比較的経済的に安定した保護者が多いなかで高いパフォーマンス（県トップ）を上げてきた Y 中であるが、近年県営・市営の住宅の保護者が多くなってきており、家庭で勉強する環境が確保されていない子どもたちも増えているという。そこで元ＰＴＡでまちづくりの活動にも積極的に関わっている地域住民が集まり、「寺子屋」を開いている。中学校と連携を取って勉強の苦手な３年生を集め、週３回午後５時から７時までボランティアの大学院生や退職教員にも手伝ってもらいながらマンツーマンに近い形で学習支援が行われている。「地域の子どもは地域で育てたい」、「保護者だけでは限界がある」、「高校行けなくて地域でうろうろしているような子を出したくない」、そんな思いで活動しているそうだ。

２．スクールバスモデルからみたＹ中学校

ここでは、スクールバスモデルの８つの要素ごとに、Ｙ中学校の特徴を簡潔に整理してみたい。

①職員集団

校長によれば、教員はみな教育に熱心で「足引っ張り」がいないという。職員の仲もよく、学年単位を中心にしながら、学校全体でも協力して頑張ろうという雰囲気があるという。教室の掲示物を見ると統一されてはいないが似ているものが多く見受けられた。教員がお互いいいと思ったものを取り入れて広がっているようである。授業のなかでの「発表の仕方」や「挙手の仕方」も一定学校で統一しているという。また一人年一回は研究授業

をすることに表れるように研究熱心でもあるが、「特別なことではなく当たり前のことをしているだけです」というのが、同校教諭陣の感覚であるという。

また一度決まった方針には従い、それに対して全力を尽くす。例えば、（県の施策で、市の施策で、学校の方針で）習熟度別授業を行うと決まったならば、個人的に習熟度別授業をよい／悪いと判断するのではなく、どうしたら習熟度をうまく活用できるかを考える。こうした「まじめ」さも取組を停滞させずに、学校に前向きな雰囲気を生み出している。やるべきことをきちんとやるという雰囲気が教師集団のなかにあるように感じられた。

②学校運営

Y 中では、校長が学校経営ビジョンを示しながらも、教師のまじめさ、熱心さ、自主性を生かした学校運営が行われている。生徒のチャレンジ精神が大事にされているように、教師が「こういうのやってみようか」と考えだしたアイディアが大切にされている。校長はそのアイディアが生徒や学校にどういう影響を与えるのかを吟味し、実施につなげていく（または実施しない判断をする）役割を果たしている。

③生徒指導

上で述べたように、現在非常に落ち着いて学校生活を送っている生徒たちであるが、生徒指導としては、教職員が「同じものさし」で行うことを徹底しているという。職員朝礼で日常的に生徒の情報を共有している。また自主活動やクラス対抗の取組により生徒の自主性を育み、仲間とともに頑張ろうという雰囲気を醸成している。

④学習指導

授業規律が生徒に内面化され、さらに勉強が得意な生徒も苦手な生徒も、授業に積極的に参加しようという雰囲気をつくることに成功していることが、Y 中の授業をうまく展開させていると思われる。それでも、子どもたちの学力格差は以前と比べると大きくなってきているという。それに対応する意味でも、上で述べたように英語と数学の授業は、毎時間習熟度別の少人数授業を有効活用し、きめ細かな指導が行われている。その他にも手作りのプリントを用意したり、週末に計画的に国・数・英の宿題を出したりしている。この宿題については、学習に課題のある生徒にも「できる」ものを用意する。昼休みには、課題未提出者を集め、取り組ませたりもしている。「やりきること」の大切さを教え、それが「勉強はきちんとするもの」という学校の雰囲気づくりにもつながっている。

⑤地域・校種間連携

地域連携では、青少年育成協議会、PTA、おやじ会、教育振興会（PTA の OB 会）等様々な団体から支援を受けている。学校に協力的な地域住民が多いことで教育活動を落ち着いて行う基盤となっている。

⑥家庭とのつながり

全体として勉強しようという雰囲気がある学校・地域であり、通塾率も高いが、なかには家庭学習の習慣がついていない生徒もいる。格差が広がりつつある中で、そうした生徒に対して家庭との連携が模索されている。

⑦学校環境

校内は非常に整理されており、掃除もいきとどいている。教室後部の靴箱や個人ロッカーもきちんと整理整頓されている。無言清掃が徹底されており、生徒たちは丁寧に掃除に取り組んでおり、自分たちの学校を自分たちできれいにするという感覚が育まれている。教室の掲示物は学校で統一されているわけではないが、緩やかに似ている。多くのクラスで個々の学習目標や生活目標が教室の後ろに貼られていた。

⑧学校文化

生徒も教師もまじめ、そして学習にもクラス活動・自主活動にも熱心に取り組むポジティブさがある。後輩は、活躍する先輩を見て育っている。生徒の自主性、「チャレンジ精神」を重んじてきた伝統が受け継がれていることが、Y 中の大きな強みとなっている。

３．成功の３つのポイント

最後に、Y 中が好成績をおさめている要因として、下の３つのポイントを指摘しておきたい。

１）安定した授業規律（④）

生徒は予鈴で着席し、授業開始の音楽（チャイムの代わり）の間黙想をし、心を落ち着かせてから授業に臨んでいる。予鈴は、「始業に合わせて着席できるように」生徒会からの提案で始まったという。また教師も授業開始の音楽までには必ず教室に入っている。「授業の内容がほとんど分かっていない」生徒でも、机に伏して寝たり教室から出たりするのではなく、一生懸命教師の話を聞き授業に参加しようとしている。学力も高く塾に通っているような生徒でも、授業に積極的に参加している。クラス全体に「勉強しよう」（もしくは「勉強しなければならない」）という雰囲気がある。授業は時に（私語ではなく）意見が活発に出て盛り上がり、板書を写すときには「シーン」とし、書き終わった子どもたちも静かに待っている。自習でも騒ぐようなことはめったにないという。

２）チャレンジ精神・自主性とクラスで頑張る雰囲気を重んじる伝統（⑧）

生徒会など生徒の自主性を重んじる活動がさかんである。本文でも取り上げた予鈴の導

入に表れているように生徒からの提案は尊重されている。こうした自主性・チャレンジ精神を重んじる校風は、学校創設以来のものであるという。後輩が先輩の活動を見てそれを受け継いできたのであろう。またクラス対抗の行事も年数回あり、子どもたちは熱心に取り組んでおり、クラスで頑張ろうという雰囲気がある。

学習についても言えることではあるが、何事にも前向きに頑張ろうというポジティブな雰囲気が学校にはある。それもみんなで頑張ろうという雰囲気であり、それが学力を下支えしている大きな要因になっていると思われる。

３）「学校が学校である」ための地域のサポート（⑨）

地域の世話役的な存在で中学校と地域の窓口にもなっている A さんは、「学校には学校であってほしい」つまり教師が授業に専念できるような環境を整える手助けを地域としてしたいという。学校支援地域本部の発想である。PTA の OB にも「自分の子どもがかつてお世話になった学校をサポートしたい」という思いによって動いている人が多いという。象徴的な活動が、「寺子屋」という週３回（一回２時間の学習会）行われている学習会である。勉強の苦手な中学３年生の 15 人ほどを対象にしたボランティアによるもので、なんとか地域の子どもを高校に行かせたいという思いで取組が行われている。

＜沖縄＞

j1 市立 J 小学校

【プロフィール】

所　在　地　沖縄県 j1 市

校区の特徴　人口、児童数が増加している。野鳥が舞い降りるなどの自然が残る。

児　童　数　800 名程度

教　員　数　40 名程度

児童の特徴　新しく転入してきた家庭と昔から住んでいる家庭が混在している。家庭背景が厳しい子どもも比較的多い。しかし、素直で学ぶ意欲の高い児童が多い（校長先生談）。

１．学校の概要

都市部に近いことから、ベッドタウンとして人口が急増してきた。また他方では、野鳥や水辺の生物が多く生息する自然豊かな一面もあわせ持っている。

J 小学校の児童数は 800 名程度で、2 年生のみ 5 クラス、他の 5 学年が 4 クラスである。

我々が訪問した朝、小学校の校門に通じる坂道の手前の交差点を、学校に向かう子ども達が横断していた。その子ども達の安全を守るため、地域の人たちが黄色い旗を持って交通整理をしている。沖縄の小学校は敷地内に幼稚園を併設している場合が多いのだが、J 小学校には、小学校の前に道を挟んで幼稚園が位置している。ただ、この学校前の道を時々大きなトラックが通行するため、小学校幼稚園の関係者は児童園児が交通事故に遭わないよう細心の注意を払っているのだ。私たちは、約束の時間より少し早く着きすぎたかなと考えながら、交通整理の光景を眺めていたのだが、後にその旗を持っていた人の中に校長先生がいたことを知ることとなった。早いときには 7 時過ぎから校長先生自ら横断歩道に立っていると言うことであった。

校門を入ってまっすぐ進むと低層（2 階建て）で打ちっ放しコンクリートのモダンな校舎が目に入る。その正面に「ようこそ J 小学校へ」の文字と、学校教育目標である「よく考え、進んで学ぶ子、思いやりのある子、たくましい子」の文字が掲げられている。その他にも、児童自身の手による標語が掲げられている。例えば、「勉強を　今すぐやろう　未来のために」「あいさつの　ひびく学校　J 小」などである。

この標語が示すとおり、子ども達に目が合うと大きな声で挨拶をしてくれる。校舎の前には児童会選挙の立候補者であろう子ども達が自分の名前のたすきを掛けて、大きな声で挨拶しながら登校する子ども達を迎えている。また別の方に目を向けると、低学年の児童が花に水をやっている光景を見ることができる。毎日のこうした基本的な活動がきちんと

できている学校だという印象を持った。これは、学校をあげて、「凡事徹底」つまり、「当たり前のことを、当たり前にしっかりやること」に取り組んでいる成果である。ここでいう当たり前のこととは、挨拶をする、人の話を聞く、相手を思いやる、時間を守る、清掃する、などである。なお、「凡事徹底」は沖縄県教育委員会が推進する運動のひとつである。また、挨拶への取組として、4年生の「あごがでますよ運動」が我々の目を引いた。これは、「ありがとう、ごめんなさい、がんばってね、です・ます、よかったね」の頭文字をとったものである。

掲げられている標語の下を抜けて校舎内の入ると、ヨーロッパの名画が所狭しと飾られている。さらにもう少し中に進むと児童が獲得した、スポーツや文化系の数々の賞状やトロフィーがあり、スポーツや音楽、芸術などの活動が盛んであることがわかる。

教室は廊下との仕切りが無い開放的な作りである。廊下も広くとられている。この作りは、保護者参観の時に、子ども達の様子を見やすい。また、クラスが閉鎖的になることを防ぐ作用もあるだろうと思われる。いずれにしても開放的で、我々を招き入れてくれる雰囲気を感じることができた。

沖縄県と j1 市の平成 21 年度の全国学力調査結果を全国平均と比べてみると、平均得点の高い順に全国、j1 市、沖縄県となる。J 小学校は全 4 科目のうち、国語 A 以外の 3 科目において全国平均を上回る結果を残している。国語 A においても市の平均は上回っている。J 小学校の子ども達が必ずしも家庭的に恵まれているわけではない。中には、大きな課題を抱えている子ども達も一定の割合で存在するという。そうした状況で、J 小学校が比較的高い学力を残しているのは何故だろうか。

その要因を尋ねたところ校長先生は 4 つの要因を挙げられた。第 1 には「授業改善への意識の高さ」である。教員は常に授業改善を頭に置き、毎日遅くまで授業準備をしている。第 2 に「学年の連携の良さ」である。同学年の 4 クラス、5 クラスの教員達が、資料や取組を共有して、よりよいものを目指している。第 3 に「学校全体の連帯感」である。教師それぞれが抱える問題を共有し、プラス思考で解決していこうとしている。そして、最後に「子どもが素直で、学ぶ意識が高い」と言うことであった。

２．スクールバスモデルからみた J 小学校

ここでは、スクールバスモデルの８つの要素ごとに、J 小学校の特徴を簡潔に整理してみたい。

①教職員集団

担任の仕事は「全ての子どもの学力を保障すること」に全力を注ぐことだと校長先生は言う。それ以外のことに極力時間をとられないようにするために、校長自らが保護者から

の苦情に対応する。「何か問題があったら私に回しなさい」という校長先生のリーダーシップの下、比較的若い年齢層の多い教職員は安心して自らの取組に集中できている。

②学校運営

アクションプランや学校目標を具体的に示し、共有しているため、反省点や改善点を見つけやすい。例えば、J 小学校の 3 つの取組として、「基礎学力の定着を図り単元テスト 80 点以上を 8 割の子どもが達成するよう取り組む」「「J っ子学習の約束」を守ることができる児童 8 割になるよう取り組む」「学年の読書目標冊数を 8 割の子が達成できるように取り組む」など、具体的な数値を挙げた目標を立て、それが達成できたのかできていないのかが判断できるようになっている。

③生徒指導

生活リズムの乱れが学校生活に悪影響を与えるため、基本的な生活習慣の形成を目標としている。先に述べた「凡事徹底」をスローガンに、当たり前のことを、当たり前にしっかりやることに取り組んでいる。児童にとって「当たり前のこと」とは挨拶をする、先生や親の話をしっかり聞く、決まりを守るなどであり、保護者にとっての「当たり前のこと」とは、早寝・早起き・朝ご飯を心がけること、子どもの話に耳を傾けることなどである。実際、子ども達のアンケートを見てみると「毎日朝食を食べている児童」は 98%、「進んであいさつをした児童」は 84.2%と高い割合を示している。

④学習指導

学力の目標として「わかる授業を通し学習内容の 8 割を理解させる」ことを全学の目標として取り組んでいる。授業の際にはかならず、その回の「めあて」（目標）を明確にしてから授業が始まる。つまり、教員は、今回の授業で何が分かるようになって欲しいかを常に子ども達に示している。また、「J っ子学習のやくそく」を振り返り、自己採点するチェックシートを用いている。例えば、「授業のめあてをかくにんする」「聞くときは、先生の目を見て、声をださずうなずききく」「発表する人の話は、さいごまで静かにきく」といった項目がある。児童達は、このシートによって具体的に自分を振り返ることができる。

⑤地域・校種間連携

地域のお年寄りや老人会の人たちが朝の交通安全指導を行っている。また、教師は地域祭りに毎年参加している。学校でも「J 祭り」を実施し、バザーやゲームをし、地域の人々との交流の場を持っている。ただ、まだ十分ではなく、課題も多いと言う。

⑥家庭とのつながり

保護者や教員が PTA の集まりなどで使用する「クラブハウス」と呼ばれる部屋がある。J

小学校の PTA には専門委員会として、広報委員会、環境整備委員会、ベルマーク委員会、校外指導委員会などがあり、こうした活動を保護者の方々（主にお母さん方）がこの部屋で行っている。クラブハウスは保護者の社交場であり、教員（主に校長先生）と交流する場となっている。また、保護者による読み聞かせボランティアが存在し、週に一度朝の読書タイムに読み聞かせを行っている。ほぼ全学級という規模で保護者による読み聞かせが定期的に行われているのは珍しいのではないだろうか。さらに、保護者が学習支援ボランティアとして補充授業に入る事もある。このように学校と保護者がつながる機会は多いと言うことができる。ただ、参加する保護者と参加しない（できない）保護者が固定化してしまっている。特に学校と関わりを持って欲しい保護者と係わることが難しい点が今後の課題である。

⑦学校環境

安藤忠雄の建築を思わせる打ちっ放しコンクリートのモダンな校舎、2 階建てという小学校では珍しい低層構造、そして、廊下との仕切りが無い教室のつくりが、学校に開放的な雰囲気を与えている。廊下が広くとられ、ここも児童の活動の場となっている（休み時間に絵を描いたり、縄跳びをしたりしていた)。さらに特徴的なのは、玄関に飾られるたくさんの名画と児童による賞状とトロフィーである。

⑧学校文化

子ども達が休み時間に校長室をノックし、週末のサッカーの試合の結果を知らせに来る。何かで表彰された子ども達もうれしそうにそのことを校長先生や教頭先生に知らせに来る。児童数は決して少ないわけではないが、このように管理職を含めた教職員と児童の距離が近く、温かい雰囲気を感じる。

３．成功の３つのポイント

最後に、J 小が好成績をおさめている要因として、下の 3 点を指摘しておきたい。

１）管理職を中心に一体感ある教職員集団（①）

クレームには自ら対応し、早朝から横断歩道に立って子ども達に声をかける、頼りがいのある校長、教えることが大好きで今でも教壇に立つ教頭、部活のキャプテンのような勢いのある若手の教務主任。この三者が中心となり教職員、保護者を引っ張っている。その結果、幼稚園を含めた教員全体に一体感があり、課題に向き合って解決していこうとする雰囲気がある。

２）豊かな言語を身につけた児童の育成（④）

沖縄の子ども達は語彙力が少なく、表現力に乏しいとの認識の下、平成 20 年度は「読む力」、21 年度は「言語能力」を研究主題とし、表現力の向上に力を入れた。22 年度は 1 年から 4 年は国語、5 年と 6 年は英語を中心とした表現力向上に取り組んできた。こうした言語力育成をテーマとして校内研修を行い、どうすればわかりやすい授業となるかを各学年で頻繁に話し合うことは、学年のまとまりの良さにも結びつている。

３）個を大切にする学習指導（④）

個別指導を行う部屋、別名「願いを叶える部屋」であり、設立当初は、学力に課題のある子ども達が放課後に集い勉強する場であった。しかし、現在では学力に関係なく希望者に開放されている。市から派遣されている学力向上対策支援員が個別指導にあたり、課題をその日のうちに分からせることを目標としている。この部屋は火曜日と木曜日の放課後に実施される。それ以外の時間には、学力向上対策支援員は主に低学年の授業に入っている。

j2 市立 Z 中学校

【プロフィール】
所　在　地　沖縄県 j2 市
校区の特徴　保護者の多くが学校教育に理解を示している（校長先生談）。
生　徒　数　500 名程度
教　員　数　30 名程度
生徒の特徴　比較的裕福な家庭がある一方で、就学援助率は約 4 分の 1 にのぼる。

１．学校の概要

Z 中学は全校生徒 500 名程度の中規模校である。校区内には、比較的裕福な家庭がある一方で、2 つの市営団地を抱え、子供たちの経済格差、学力格差が課題となっている．生徒の約 4 分の 1 が就学援助を受けており、その割合は市内の他の地域と比較しても高い。

Z 中学が位置する j2 市は沖縄県の中心都市であり、第 3 次産業の比率が高い都市型である。市内に小学校 36 校、中学校 18 校を有する。全国学力調査の j2 市の平均は県平均よりも高いが、全国平均と比較すると国語が約 5 点、数学が約 10 点下回っている。

Z 中学校の校舎の造りはユニークである。校門を越えると 2 階建ての校舎があり、1 階の玄関から中に入ると同階に校長室や職員室があるのだが、実は、校舎全体からすればここは 3 階に当たる。玄関が 3 階にあるのだ。つまり、校門付近が学校の中で一番高い位置にある。そして、玄関横の道は、グランドに向かって下っていく急な坂道となっている。その道の横には平行して長い下り階段が設置されている。下り階段の脇には途切れることなく赤い鉢植えの花が並んでいた。この長い下り坂は運動部の格好の練習場所となっており、我々が訪れた際にもサッカー部員、野球部員が幾度となく坂道ダッシュを繰り返していた。この坂は Z 中学校の名物のひとつとなっているということであった。

午前 7 時 45 分、我々が学校を訪れたとき、既に「おはっぴか」運動は始まっていた。「おはっぴか」とは朝の挨拶（おはようございます）と清掃活動（ぴかぴか）を指す言葉である。玄関前に一列に並んだ生徒達が登校してくる生徒に対して大きな声で挨拶をしている。我々に対しても大きな声をかけてくれた。また、他の生徒達は校舎回りの清掃や草花への水やりを行っている。生徒と共に教員の姿も見える。我々を迎えてくれた校長先生も、箒とちりとりを手にして、玄関の掃除をしている最中であった。

Z 中学の教育目標は「真剣に学ぶ生徒。心豊かな生徒。たくましく健康な生徒」である。校訓は、校舎にも掲げられている「向上無限」と「文武両道」。中でも「向上無限」の言葉は生徒の体操服の背中にも書かれている。また、沖縄では祭りの時などに旗頭（はたがしら）と呼ばれる大きなのぼりを、男性がかけ声をかけながら腰に載せて練り歩く風習があ

り、j2 市では中学校ごとに独自の旗頭が作られるのだが、Z 中学校の旗頭には「向上無限」の言葉が力強く刻まれている。生徒からもこの言葉が好きだという声が聞かれ、「向上無限」は Z 中学を象徴する言葉と考えてよいだろう。

Z 中学のめざす学校像は、「明るく美しく信頼と希望みなぎる地域の学校」である。また、学校経営方針として「地域が学校を支え、地域に信頼される学校づくりを行う」とあり、学校と地域との連携を重視していることがわかる。後述するように、中学校内に「地域・学校連携施設」があり、ここは地域の人々が子どもに太鼓を教えたり、祭りの準備をしたりする際に用いられ、地域と学校をつなぐ空間となっている。学校の HP に「本校に気軽にお立ち寄りください。学校を案内いたします。お待ちしています」と書かれているように、地域に開いた学校運営を目指している点が Z 中学校の特徴としてあげられるだろう。

２．スクールバスモデルからみた Z 中学校

ここでは、スクールバスモデルの８つの要素ごとに、Z 中学校の特徴を簡潔に整理してみたい。

①職員集団

校内の規則やルールの見直しと実施を徹底してきた校長先生と、教職員の良き相談相手となっている教頭先生。二人の管理職を中心として、教職員がひとつの方向を向いてまとまっている印象を受けた。教職員の年齢構成は 30-40 代が中心で、20 代が 2 名である。若い教職員が問題を一人で抱え込まないよう、職員全員で問題を共有しているということであった。

②学校運営

校訓の「向上無限」「文武両道」の言葉が示しているように、部活動にも勉学にも向上心を持って、最後までやり抜くことのできる生徒を育てようとしている。実際、クラブ活動が盛んで約 7 割の生徒が参加しており、地域あるいは県内でも優秀な成績を残している部もある。また、漢字検定や日本語検定などの合格者氏名が廊下に張り出されており、そこには「目標に向かって、行動を起こせ！」の文字が掲げられている。

③生徒指導

朝の挨拶運動と清掃活動（「おはっぴか運動」）は生徒指導の一環と見ることができるだろう。遅刻の多い生徒に対しては、10 時を過ぎると学校に入れないという規則を徹底することで、ほとんどの生徒はその時間までに学校に来るようになっている。また、学校に来ても教室に入ることの難しい生徒が何人かいるが、その原因がメンタル的な場合には心の相談室が、それ以外の場合には教育相談室がサポートに当たる。

④学習指導

文部科学省の学力向上実践研究推進校に指定され、書くことを通して「表現する力を高める授業の工夫」に力を入れている。当初、国語科のみで行われていた取組は、現在では全教科に広がり、Z 中学校を代表する事業となっている。

⑤地域・校種間連携

校舎内の一室、地域・学校連携施設（別名、Z 中コミュニティープラザ）が学校と地域を結ぶ取組の中心となっている。地域・学校連携施設は板張りの部分と畳を敷いた和室、そして、備蓄倉庫からなっている。登録をすれば地域の団体が自由に使え、公民館のような役割を果たしていると考えられる。中には太鼓があり、壁には自治会や婦人会、老人会などの地域団体の名前がざっと貼り付けられている。1 年に何度か行われる大きな祭りの際には、学校と地域が連携してここで準備にあたる。エイサーなど沖縄特有の伝統文化をキーとして地域との交流が図られているのだ。

⑥家庭とのつながり

生徒の約 7 割が参加する部活動には、各部ごとに保護者会がある。また数名の地域住民を指導者として迎えている。活発な部活動が学校と家庭を結びつけるひとつのポイントとなっている。ただ、保護者との関係が十分に築かれているかと言えば、未だ課題が残ると言うことであった。特に、学校への関心が小さい家庭といかに関係を築くかが一番の課題である。

⑦学校環境

打ちっ放しコンクリートのおしゃれな校舎に、吹き抜けの中庭、そして、広い廊下と廊下を飾る様々な掲示物が、学校に明るさと活気を与えている。緑と花があふれる校内は、学校に暖かさを与えている。天井が高く開放感あふれる図書室は書籍がきれいに整理されており、休み時間になると本好きの生徒達が集まってくる。Z 中学校の生徒は平均して年間 80 冊の本を読むが、この数は j2 の平均を大きく上回っている。

⑧学校文化

「向上無限」が象徴的に表しているように、生徒の可能性を引き出し、生徒のチャレンジ精神を力一杯応援しようという雰囲気が感じられる。一方で、規則を徹底し、規則を守られなかった場合には、生徒自身が不利益を被ることを教えようとしている。

３．成功の３つのポイント

最後に、Z 中が好成績をおさめている要因として、下の 3 つのポイントを指摘しておきた

い。

１）表現することを中心にした授業づくり（④）

Z 中学は、文部科学省の学力向上実践研究推進校に指定され、書くことを通して「表現する力を高める授業の工夫」に力を入れている。その背景には、沖縄県の低学力には語彙の少なさや表現力の乏しさが影響しているとの認識があり、それを克服するための取組である。前任の校長先生が国語科だったということもあり、国語科から始まった表現重視の取組は、現在では全教科に広がっている。例えば 1 年生の国語の授業では、相手を説得するために、根拠を明確にして自分の主張を相手に伝えることを学ぶ授業が行われていた。また、3 年生の数学では円周角の定理の活用がテーマとなっていたが、そこでも解答を求めるだけではなく、解答に至るまでの道筋を記述する授業が実施されていた。その他、理科、社会、道徳、英語についても自分の考えを相手に伝え、理解してもらえる表現方法を重視した授業が展開されていた。このような日々の活動の成果が全国学力調査の国語 B 問題の伸びにつながっているという。また、読書活動も推奨しており、朝の読書タイムや休み時間に自然と本に向かう習慣が身についているという。沖縄県では年間 40 冊の読書を目指しているが、Z 中学では年間平均 80 冊の読書量を誇っている。

２）教員の教科を越えたつながり（①）

「表現すること」が学校をあげての授業づくりのテーマとなったことで、教員間の教科を越えたつながりが育まれている。例えば、全職員で取り組む校内研修を少なくとも月に 1 回実施し、授業実践及び授業研究会も全教科で実施している。全教科での共通実践事項を明確にすることで、教科の枠に収まることなく、教科の枠を越え、学校全体の統一的な課題の洗い出しと解決に向けての取組が可能となっている。

３）「おはっぴか運動」に代表される規律の徹底（③）

2 年前、校長先生が Z 中学校に着任した時の生徒達の印象は、時間を守ることができない、挨拶ができない、人の顔を見て話しを聞くことができない、というネガティブなものであった。問題が大きいと感じた校長先生は、「学力は勉強だけでは高まらない。日常の生活から見直さなければならない」と規律を徹底する取組を始めたと言う。まず、生徒に時間を守らせる前に教員の時間に対する意識を高めた。集会がある場合は、生徒よりも早く教員が集合場所に赴くようにした。授業開始チャイムが鳴ってから職員室を出るのではなく、授業開始チャイムと同時に授業を開始することを徹底した。遅刻する生徒に対しても、10 時までに来なければ学校に入れないという方針をとった。このような取組が功を奏し、最近では遅刻者も減り、時間に対する意識が高くなってきているということである。また、あいさつ運動と清掃が活発に行われており、これは、「おはっぴか運動」と呼ばれている。野球部顧問の一声から始まったというこの運動は、今では、野球部のみならず、他の部活

動、生徒会を中心としたボランティアによって継続して行われ、数十名が正門前で朝の挨拶、清掃を行っているのだという。昨年はこれらの活動が評価され、野球部が地元の警察から表彰を受けているというから、その徹底ぶりが伺える。今では、廊下をすれ違う生徒たちはほとんどが顔を上げ、大きな声で挨拶をしてくれるまでに成果を上げている。また、授業の開始、終了時や集会の時の挨拶も徹底されており、２年生の集会では、正座をして挨拶をしていた。

５章　まとめの考察

１．スクールバスモデルへの当てはめ

本調査で試みたのは、「教育的に不利な環境のもとにある子どもたちの学力の下支え」に成功している 20 の小・中学校における教育活動の特徴を明らかにすることである。「教育的に不利な環境」を、本研究では、「その自治体のなかで就学援助率が相対的に高い学校に在籍すること」と操作的にとらえた。1 章でみたように、就学援助率の高さは、統計的に学力水準の低さと結びついているからである。就学援助率に代表される「校区の社会経済的特性」が子どもたちの学力水準にかなりの影響を及ぼすことは、私たちが準拠する教育社会学の常識に属することがらであり、そのハンディキャップをくつがえして良好な成績をおさめることができている（しかも 3 年連続で）学校は、「効果のある学校」と呼ぶにふさわしい学校であると私たちは考えた。

私たちが数年前に大阪の「効果のある学校」の教育実践をベースに作成した「スクールバスモデル」を今回の 20 校に当てはめ、それらの学校の「成功」に寄与している要因を 3 つずつ指摘した（各事例の３）の部分)。それぞれの「見出し」の最後に付した「①」～「⑧」の番号が、スクールバスのどこに相当する項目であるかを示している。①～⑧のどれにも相当するとは考えられない項目は、「⑨」とカテゴライズした。その結果を整理したものが、次ページにまとめた（表 1）である。

全体で 60（3 個×20 校）のアイテムが抽出されたが、最も多くのアイテムが集まったのが④の「学習指導」である。全体の 7 割の学校に相当する 14 の学校で、成功のポイントとしてあげられていた。具体的には、「個を大切にする指導」「協同的な授業づくり」「ことばの力を伸ばす指導」といった内容があげられている。学習面での成果が著しい学校では学習指導面での工夫がこらされているという結果は、いわば当たり前と言ってよかろう。それに続くのが、①の「教員集団」の 9 件、③の「生徒指導」の 8 件となっている。前者では「一体感」「同僚性」「リーダーシップ」といった言葉が、後者では「集団づくり」「規律の徹底」といった言葉がキーワードとして提示されている。

逆に、指摘が少ないカテゴリーは、⑦の「学習環境」（0 件）や⑥の「家庭とのつながり」（1 件）である。それらはおそらく短期の観察・聞き取りでは見えにくい要因であり、今回の結果はこうした要因が重要ではないということを意味するものではないと解釈しておきたい。

注目されるのは、⑨「該当せず」の件数が相対的に多いことである。すなわち、全体の 6 割にあたる 12 校でそれが指摘されており、さらにそのうち、「地域のサポート」「地域・保護者の高い期待感」といったように「地域」に言及するものが 7 件を占めているという事実である。「地域の力」という条件がよい学校づくりのための大きなアドバンテージとなるということが、今回の調査結果から見出された新たな知見と言える。

（表 1）　各校の成功に寄与している要因

①気持ちのそろった教職員集団　言及された回数：９回

「管理職を中心に一体感ある教職員集団」「協同研究をはぐくむ同僚性と OJT」
「個々に力のある教師が学年集団を組んで高めあう『同僚性』」
「教師が楽しむ授業研究」「『ろへん』という語に代表される教職員のまとまり」
「教員の教科を越えたつながり」「自ら課題を見つけ主体的に動く教職員集団」
「リーダーシップと教職員集団の同僚性」「教科の枠を取り払った研究体制」

②戦略的で柔軟な学校運営　５回

「学校・地域の力を引き出す学校運営」「教職員集団で子どもを見る体制の確立」
「『しかけ』のある学校経営が生み出すチームワーク」
「豪快な校長とまじめな教頭の管理職タッグ」「『教師のやる気をそがない』学校づくり」

③豊かなつながりを生み出す生徒指導　８回

「みな『まじめ』で、授業規律等鍛えられている」「チームですすめる特別支援教育」
「素直さをこえる子どもたちをめざして」「縦横の連携を重視した集団づくり」
「『おはっぴか運動』に代表される規律の徹底」
「提出物は必ず出させるという徹底した取組」
「『子どものいるところに教師もいよう』－前向きな生徒指導」
「教職員のねばり強い取組による『荒れ』の克服」

④全ての子どもの学びを支える学習指導　１４回

「豊かな言語を身につけた児童の育成」「学力向上への積極的で多様な取組」
「『ドラえもんルーム』に代表される個を大切にする学習指導」
「発表ボードを多用した協同的な授業づくり」「表現することを中心にした授業づくり」
「基礎基本の学力定着を図る指導システムの確立」「授業力向上への教員の意識の高さ」
「ことばの力を伸ばす働きかけ」「学習ルールの徹底から基礎基本の定着へ」
「安定した授業規律」「言葉を中心に多彩な表現活動の展開」
「学習規律の重視」「厳しく丁寧な指導の徹底」「小中一貫した授業づくり」

⑤ともに育つ地域・校種間連携　６回

「地域に支えられた学校」「地域を巻き込んだ活動」「小中連携の確かさ」
「『包容力』ある地域との連携」「地域社会の一員としての生徒たち」
「学校の外に積極的に関わり、地域の力を学校に取り入れる」

⑥双方的な家庭との関わり　　１回

「家庭に向けての積極的な情報発信」

⑦安心して学べる学校環境　　０回

⑧前向きで活動的な学校文化　　５回

「皆（子ども・教職員・地域）が誇りに思う学校」「学校的価値の重視に応える文化」

「行事を核にした学校文化の創造と継承」

「生徒の自主的な取組による学校行事の活性化」

「チャレンジ精神・自主性とクラスで頑張る雰囲気を重んじる伝統」

⑨該当せず　　１２回

「当たり前のことを当たり前に取り組む」「安心して学べる学校の空気」

「学校を巡る人的な太いパイプの存在」「子どもの気持ちを育てる地域社会」

「『学校に育ててもらった』というゆるぎない伝統」「教育を重視する地域の風土」

「『学校が学校である』ための地域のサポート」「子どもたちを活かす教育」

「落ち着いた学校としての居心地の良さ」「地域・保護者の学校教育への高い期待感」

「子どもにかける地域の熱い思い」「少人数であることのメリット」

次ページの表２は、その結果を校種別に分けて集計してみたものである。思ったほどには、校種による違いは出てこなかった。唯一数字が大きく違うのが、⑤の「地域・校種間連携」（小で１件、中では５件）である。小学校では、自己完結的に「よい学校」をつくりやすいが、中学校ではなかなかそれが難しいということなのかもしれない。特に、中学校の５件中４件が、「地域連携」に言及するものであることが興味深い。上で述べたことがらが「資源としての地域」と形容できるとすれば、こちらの方は「地域の有効活用」という側面と表現できるかもしれない。中学校においては、地域との良好な関係づくりが学校づくりの成功にとって不可欠な要因であるようだ。

他方で、小学校で相対的に多く指摘されているのが、④の「学習指導」であった（8 件＝8 割）。小学校で成果をあげている学校は、ほぼ例外なく「よい授業をしている所であると」いうことになる。特に「言語」面への言及が目立つ（3 件）。逆に中学校では、「学習規律」への言及が多かった（3 件）。

（表２）　小・中学校別の結果

＜小学校＞

①気持ちのそろった教職員集団　言及された回数：５回

「管理職を中心に一体感ある教職員集団」「協同研究をはぐくむ同僚性と 0JT」

「個々に力のある教師が学年集団を組んで高めあう『同僚性』」

「教師が楽しむ授業研究」「『ろへん』という語に代表される教職員のまとまり」

②戦略的で柔軟な学校運営　３回

「学校・地域の力を引き出す学校運営」「教職員集団で子どもを見る体制の確立」

「『しかけ』のある学校経営が生み出すチームワーク」

③豊かなつながりを生み出す生徒指導　４回

「みな『まじめ』で、授業規律等鍛えられている」「チームですすめる特別支援教育」

「素直さをこえる子どもたちをめざして」「縦横の連携を重視した集団づくり」

④全ての子どもの学びを支える学習指導　８回

「豊かな言語を身につけた児童の育成」「学力向上への積極的で多様な取組」

「個を大切にする学習指導」

「発表ボードを多用した協同的な授業づくり」

「基礎基本の学力定着を図る指導システムの確立」「授業力向上への教員の意識の高さ」

「ことばの力を伸ばす働きかけ」「学習ルールの徹底から基礎基本の定着へ」

⑤ともに育つ地域・校種間連携　１回

「地域に支えられた学校」

⑥双方的な家庭との関わり　１回

「家庭に向けての積極的な情報発信」

⑦安心して学べる学校環境　０回

⑧前向きで活動的な学校文化　２回

「皆（子ども・教職員・地域）が誇りに思う学校」

「行事を核にした学校文化の創造と継承」

⑨該当せず　６回

「当たり前のことを当たり前に取り組む」「安心して学べる学校の空気」

「学校を巡る人的な太いパイプの存在」「子どもの気持ちを育てる地域社会」

「『学校に育ててもらった』というゆるぎない伝統」「教育を重視する地域の風土」

＜中学校＞

①気持ちのそろった教職員集団　言及された回数：４回

「教員の教科を越えたつながり」「自ら課題を見つけ主体的に動く教職員集団」

「リーダーシップと教職員集団の同僚性」「教科の枠を取り払った研究体制」

②戦略的で柔軟な学校運営　２回

「豪快な校長とまじめな教頭の管理職タッグ」「『教師のやる気をそがない』学校づくり」

③豊かなつながりを生み出す生徒指導　４回

「『おはっぴか運動』に代表される規律の徹底」

「提出物は必ず出させるという徹底した取組」

「『子どものいるところに教師もいよう』－前向きな生徒指導」

「教職員のねばり強い取組による『荒れ』の克服」

④全ての子どもの学びを支える学習指導　６回

「表現することを中心にした授業づくり」「安定した授業規律」

「言葉を中心に多彩な表現活動の展開」「学習規律の重視」

「厳しく丁寧な指導の徹底」「小中一貫した授業づくり」

⑤ともに育つ地域・校種間連携　５回

「地域を巻き込んだ活動」「小中連携の確かさ」

「『包容力』ある地域との連携」「地域社会の一員としての生徒たち」

「学校の外に積極的に関わり、地域の力を学校に取り入れる」

⑥双方的な家庭との関わり　０回

⑦安心して学べる学校環境　０回

⑧前向きで活動的な学校文化　３回

「学校的価値の重視に応える文化」

「生徒の自主的な取組による学校行事の活性化」

「チャレンジ精神・自主性とクラスで頑張る雰囲気を重んじる伝統」

⑨該当せず　６回

「『学校が学校である』ための地域のサポート」「子どもたちを活かす教育」

「落ち着いた学校としての居心地の良さ」「地域・保護者の学校教育への高い期待感」

「子どもにかける地域の熱い思い」「少人数であることのメリット」

以上の結果をまとめると、まず「地域の力」（＝「家庭の力」）が相対的に高い校区に立地する学校は「有利に戦える」ということができるだろう。そのうえで、やはり「教職員のまとまり」が学校づくりに占めるウェイトが大きい。そして、その基盤のうえで、「丹念な生徒指導」「学習指導の充実」がよりよい学校をつくるうえでの必須事項となるようだ。さらに中学校の場合は、「地域の力」をいかに学校の教育活動に取り込むかがカギになると思われる。

２．スクールバスの拡張に向けて

今回の訪問調査によって、それぞれの自治体の「効果のある学校」では各地・各校の独自性に根ざしたユニークな要因が「成功」をもたらしていることが明らかになったが、同時に多くの要因が「スクールバスモデル」との共通性を有していることが確認できた。スクールバスの「限定性」ではなく、その「一般性」あるいは「普遍性」が示されたというのが、私たちの包括的な評価である。大阪で見出されたスクールバスモデルは、日本全域の学校に適用可能であるということが示唆されるのである。

とはいうものの、このスクールバスモデルには明示されていないが、よりよい学校づくりに欠かすことができない要因として、２つのものの重要性が今回の調査研究から浮かび上がってきた。ひとつは、前節で指摘した「地域」ないしは「地域性」という要因、今ひとつが、「行政のサポート」という要因の重要性である。

先にも述べたように、今回の作業を通して見出された最も大きな発見は、「効果のある学校」になるためには「地域に恵まれる」という要因が思いのほか大きいということであった。スクールバスモデルをつくった時点での発想は、「学校に何ができるか」というものであった。すなわち、そのフォーカスは「学校の力」を成り立たせるものの抽出にあったのである。しかしながら、今回対象となった学校の多くで、それらの「学校の力」を支えている「地域の力」がクローズアップされる結果が出てきた。今回の対象となった学校の多くが「大都市圏」ではない「地方」に立地する学校であったことが、ことによるとその結果に関連しているかもしれない。またその結果と関連して、特に中学校において「地域の有効活用」という要因が、もう一つのキーファクターとして浮かび上がってきた。「学校の力」を向上させるには、学校が立地する地域の状況がどのようなものであろうとも、「地域の力」をうまく引き出すことが不可欠であるという含意をそこから引き出しうる。

いずれにしても、スクールバスモデルのなかに「地域」を位置づけるなら、それはバスが走る「道路」あるいは「路面」に相当するものと考えておきたい。

第二の「行政のサポート」の重要性という要因は、各校のレポートにおいて表立っては語られていないものの、調査に携わった者の多くが実感したことがらであった。地教委が学校の主体性を最大限に尊重し、物心両面にわたってそのサポートを惜しまない状況にあるとき、その自治体に所在する学校は「効果のある学校」となりやすいのではないかという感触を私たちは得た。あるいはまた、特定の学校が行政の支援を上手に引き出し、積極

的な学校運営を心がけようとしているとき、その学校が「効果のある学校」となる蓋然性は高まるだろうと私たちは感じた。

行政の役割をバスモデルに位置づけるとすると、それは、バスにガソリンを供給し、車の点検・修理等のサービスを行うガソリン・スタンドとなるかもしれない。あるいは、バスの適切な運行をコントロールする管制室としての役割を与えるのが適切かもしれない。

今回の調査研究となった 20 の小・中学校の特徴は、3 年続けて（H19～21 年度）すぐれた結果をおさめた「効果のある学校」であるという点にある。単年度の結果がすぐれている学校はたくさんあるが、「3 年続けて」となると、その数は一挙に減少する。残念ながら、今回の調査では、その点を十分に掘り下げて探究することができなかった。すなわち、その成果の「継続性」を何が支えているかという点については、踏み込んで検討するまでにはいたらなかったのである。「管理職の強いリーダーシップ」「恒常的な地域からのサポート」「教職員間での『物語』の共有」など、いくつか鍵となりそうな要因を指摘することはできるが、この点についてのさらなる探究は今後の検討課題としたい。